

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第33集

# 折立遺跡

— 県道百枝浅瀬野津線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2008

大分県教育庁埋蔵文化センター

# 折立遺跡

— 県道百枝浅瀬野津線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2008

大分県教育庁埋蔵文化センター



折立遺跡遠景・蛇行河川は大野川（南上空から）

## 序 文

本書は、県教育委員会が平成17年度に大分県三重土木事務所の依頼を受けて実施した県道百枝浅瀬野津線道路改良工事に伴う豊後大野市三重町百枝の折立遺跡発掘調査報告書です。

大野川の上・中流域には、穏やかな起伏の火山灰台地が発達し、日当たりの良いところに旧石器時代から歴史時代にかけての遺跡が数多く点在しています。

今回調査した折立遺跡は大野川の河岸段丘上に位置し、東北側には旧石器時代の文化層を確認した百枝小学校遺跡や弥生時代の集落遺跡である陣箱遺跡が所在しています。

発掘調査の結果、折立遺跡は弥生～古墳時代の竪穴住居跡と掘立柱建物よりなる集落跡であり、竪穴住居の中には当時の人々が使った土器や石器が残され、生活の様子を想像することができました。竪穴住居跡の密集する範囲は隣接する陣箱遺跡へと繋がっており、この周辺一体には大規模な集落跡が展開していることが判明しました。

本書が、埋蔵文化財の保護に向けて、また、地域の先人の生活を理解する資料として、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

終わりに、長期間にわたる発掘調査に御支援御協力をいただきました関係各位に衷心から感謝申し上げます。

平成20年3月25日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所 長 福 田 快 次

# 例 言

- 1 本書は大分県教育委員会が平成17年度に実施した、県道百枝浅瀬野津線道路改良工事に伴う折立遺跡発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は大分県土木建築部三重土木事務所の依頼を受けて大分県教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査にあたり豊後大野市教育委員会、県土木建築部三重土木事務所、地元関係各位の協力を得た。
- 4 発掘調査出土遺物の整理は大分県教育庁埋蔵文化財センターで行った。
- 5 発掘調査出土遺物、図面、写真等は大分県教育庁埋蔵文化財センターで保管している。
- 6 本書の執筆・編集は栗田勝弘が担当した。

# 目 次

第1章 調査の経過と概要	1
第1節 調査に至る経過と調査方法	1
第2節 調査団の構成	1
第2章 遺跡の立地と環境	2
第1節 地理的・歴史的環境	2
第3章 調査の成果	4
第1節 第1調査区	6
第2節 第2調査区	14
第3節 第3調査区	28
第4節 第4調査区	49
第4章 総 括	60

## 【図版目次】

第1図 折立遺跡周辺の主要遺跡位置図 (1/25,000)	3
第2図 折立遺跡調査区配置図 (1/2500)	4
第3図 折立遺跡遺構配置図 (1/200)	5
第4図 折立遺跡1号竪穴実測図 (1/60)	6
第5図 折立遺跡1号竪穴出土遺物実測図 (1/4)	7
第6図 折立遺跡2号竪穴実測図 (1/60)	8
第7図 折立遺跡2号竪穴出土遺物実測図1 (1/4)	8
第8図 折立遺跡2号竪穴出土遺物実測図2 (1/2)	9
第9号 折立遺跡3～6号竪穴、1号掘立柱建物実測図 (1/60)	10
第10図 折立遺跡7号、8号竪穴実測図 (1/60)	11
第11図 折立遺跡7号竪穴出土遺物実測図 (1/4)	11

第12図	折立遺跡9号、10号竪穴実測図 (1/60)	12
第13図	折立遺跡1号掘立柱建物実測図 (1/60)	12
第14図	折立遺跡第1調査区出土遺物実測図 (1/4、1/2)	13
第15図	折立遺跡第11号竪穴実測図 (1/60)	14
第16図	折立遺跡第11号竪穴内土坑実測図 (1/30)	15
第17図	折立遺跡11号竪穴出土遺物実測図 (1/4、1/2)	16
第18図	折立遺跡12~14号竪穴実測図 (1/60)	17
第19図	折立遺跡12号竪穴出土遺物実測図 (1/4、1/2)	17
第20図	折立遺跡13(1)、14号(2)竪穴出土遺物実測図 (1/4)	18
第21図	折立遺跡15号竪穴実測図 (1/60)	18
第22図	折立遺跡15号竪穴出土遺物 (1/10)	18
第23図	折立遺跡15号竪穴出土遺物 (1/10)	18
第24図	折立遺跡15号竪穴出土遺物実測図 (1/4)	19
第25図	折立遺跡16~18号竪穴実測図 (1/60)	20
<b>第26図</b>	<b>折立遺跡17(1)、18号(2)竪穴出土遺物実測図 (1/4)</b>	<b>21</b>
第27図	折立遺跡19号竪穴実測図 (1/60)	22
第28図	折立遺跡19号竪穴出土遺物実測図 (1/4)	22
第29図	折立遺跡20号竪穴実測図 (1/60)	23
第30図	折立遺跡21号竪穴実測図 (1/60)	23
第31図	折立遺跡21号竪穴出土遺物実測図 (1/4)	23
第32図	折立遺跡22~25号竪穴実測図 (1/60)	24
第33図	折立遺跡22号竪穴出土遺物実測図 (1/4)	25
第34図	折立遺跡26号竪穴実測図 (1/60)	26
第35図	折立遺跡27、28号竪穴実測図 (1/60)	26
第36図	折立遺跡27号竪穴出土遺物実測図 (1/4)	27
第37図	折立遺跡第2調査区出土遺物実測図 (1/4)	27
第38図	折立遺跡29号竪穴実測図 (1/60)	28
第39図	折立遺跡29号竪穴出土遺物実測図 (1/4)	29
第40図	折立遺跡29号竪穴出土遺物実測図2 (1/4、1/2)	30
第41図	折立遺跡30号竪穴実測図 (1/60)	32
第42図	折立遺跡30号竪穴出土遺物実測図1 (1/4、1/2)	32
第43図	折立遺跡30号竪穴出土遺物(8) (1/10)	33
第44図	折立遺跡30号竪穴出土遺物実測図2 (1/4、1/2)	33
第45図	折立遺跡31号竪穴実測図 (1/60)	34
第46図	折立遺跡31号竪穴出土遺物実測図 (1/4)	35
第47図	折立遺跡32号竪穴出土遺物実測図 (1/4)	35
第48図	折立遺跡32、33号竪穴実測図 (1/60)	36
第49図	折立遺跡34、35号竪穴実測図 (1/60)	38
第50図	折立遺跡34号竪穴出土遺物実測図 (1/4)	39
第51図	折立遺跡35号竪穴出土遺物実測図 (1/4)	40
第52図	折立遺跡36号竪穴実測図 (1/60)	40
第53図	折立遺跡36号竪穴出土遺物実測図 (1/4、1/2)	41

第54図	折立遺跡37、38号竪穴実測図 (1/60)	42
第55図	折立遺跡37号竪穴出土遺物実測図 (1/4)	42
第56図	折立遺跡39号竪穴実測図 (1/60)	43
第57図	折立遺跡39号竪穴出土遺物実測図 (1/4)	44
第58図	折立遺跡40号竪穴実測図 (1/60)	44
第59図	折立遺跡41号竪穴実測図 (1/60)	45
第60図	折立遺跡41号竪穴出土遺物実測図 (1/4、1/2)	46
第61図	折立遺跡42～46号竪穴実測図 (1/60)	47
第62図	折立遺跡42号(1)、43号(2)、44号(3)、45号(4、5)、46号(6、7)号 竪穴出土遺物実測図 (1/4、1/2)	48
第63図	折立遺跡2号掘立柱建物遺構 (1/60)	48
第64図	折立遺跡3号掘立柱建物遺構 (1/60)	48
第65図	折立遺跡47～52号竪穴実測図 (1/60)	49
第66図	折立遺跡47～52号竪穴断面図 (1/60)	50
第67図	折立遺跡49号(1～5)、50号(6～8)、51号(9～12)、52号(13) 竪穴出土遺物実測図 (1/4、1/2)	52
第68図	折立遺跡53号竪穴実測図 (1/60)	53
第69図	折立遺跡53号竪穴出土遺物実測図 (1/4、1/2)	53
第70図	折立遺跡1、2号土坑実測図 (1/30)	54
第71図	折立遺跡2号土坑出土遺物実測図 (1/4)	55
第72図	折立遺跡3号土坑実測図 (1/30)	55
第73図	折立遺跡4号土坑実測図 (1/30)	55
第74図	折立遺跡4号土坑出土遺物実測図 (1/4)	56
第75図	折立遺跡5号土坑実測図 (1/30)	56
第76図	折立遺跡5号土坑出土遺物実測図 (1/4)	56
第77図	折立遺跡第4調査区出土遺物実測図1 (1/4)	57
第78図	折立遺跡第4調査区出土遺物実測図2 (1/4、1/2、1/1)	58

## 【写真図版】

写真図版1	折立遺跡(西上空から)	63
写真図版1	第1調査区調査風景(西から)	63
写真図版1	第2調査区(西から)	63
写真図版1	第3調査区(西から)	63
写真図版1	第4調査区(西から)	63
写真図版2	1号竪穴(南から)	64
写真図版2	1号竪穴(南から)	64
写真図版2	2号竪穴(南から)	64
写真図版2	2号竪穴(北から)	64
写真図版2	2号竪穴 土器出土状態	64
写真図版2	2号竪穴 紡鐘車出土状態	64

写真図版2	7号竪穴（北から）	64
写真図版2	10号竪穴（北から）	64
写真図版3	11号竪穴（北から）	65
写真図版3	11号竪穴（北から）	65
写真図版3	11号竪穴 集石土坑（北から）	65
写真図版3	11号竪穴 集石土坑（北から）	65
写真図版3	12号竪穴（南から）	65
写真図版3	15号竪穴（東から）	65
写真図版3	15号竪穴 床面の土器出土状態	65
写真図版3	15号竪穴 土器出土状態	65
写真図版4	15号竪穴 鉄器出土状態	66
写真図版4	19号竪穴（北から）	66
写真図版4	22号竪穴（東から）	66
写真図版4	22、23号竪穴（東から）	66
写真図版4	28号竪穴（北から）	66
写真図版4	29号竪穴（南から）	66
写真図版4	29号竪穴（南から）	66
写真図版4	30号竪穴（北から）	66
写真図版5	30号竪穴 土器出土状態	67
写真図版5	32号竪穴（北から）	67
写真図版5	34号竪穴（南から）	67
写真図版5	1号掘立柱（北から）	67
写真図版5	4号土坑（北から）	67
写真図版5	5号土坑（北から）	67
写真図版5	5号土坑（北から）	67
写真図版5	勾玉出土状態	67
写真図版6	1号竪穴、第5図1～5	68
写真図版6	1号竪穴、第5図6	68
写真図版6	2号竪穴、第7図1、4	68
写真図版6	2号竪穴、第7図2、3、5～9、13	68
写真図版6	7号竪穴、第11図1	68
写真図版6	第14図4、5、7～9	68
写真図版6	第14図8	68
写真図版6	11号竪穴、第17図1～5	68
写真図版7	11号竪穴、第17図4（上）	69
写真図版7	11号竪穴、第17図4（下）	69
写真図版7	12号竪穴、第19図1～5	69
写真図版7	12号竪穴、第19図6、7	69
写真図版7	13、14号竪穴、第20図1、2	69
写真図版7	15号竪穴、第24図1	69
写真図版7	15号竪穴、第24図2	69
写真図版7	15号竪穴、第24図4	69



写真図版8	15号豎穴、第24図5、8	70
写真図版8	15号豎穴、第24図7	70
写真図版8	15号豎穴、第24図8	70
写真図版8	18号豎穴、第26図2	70
写真図版8	19号豎穴、第28図2	70
写真図版8	19号豎穴、第28図2 (側面)	70
写真図版8	19号豎穴、第28図2、3	70
写真図版8	21号豎穴、第31図1	70
写真図版9	22号豎穴、第33図1	71
写真図版9	22号豎穴、第33図2、3	71
写真図版9	22号豎穴、第33図4~9	71
写真図版9	22号豎穴、第33図10~12	71
写真図版9	27号豎穴、第36図1	71
写真図版9	第37図1、2	71
写真図版9	第37図7、8	71
写真図版9	29号豎穴、第39図1	71
写真図版10	29号豎穴、第39図2	72
写真図版10	29号豎穴、第39図3	72
写真図版10	29号豎穴、第39図4	72
写真図版10	29号豎穴、第39図5	72
写真図版10	29号豎穴、第39図6	72
写真図版10	29号豎穴、第39図7	72
写真図版10	29号豎穴、第39図8	72
写真図版10	29号豎穴、第39図9	72
写真図版11	29号豎穴、第40図10	73
写真図版11	29号豎穴、第40図11	73
写真図版11	29号豎穴、第40図12	73
写真図版11	29号豎穴、第40図13	73
写真図版11	29号豎穴、第40図14	73
写真図版11	29号豎穴、第40図15	73
写真図版11	29号豎穴、第40図15 (底部)	73
写真図版11	29号豎穴、第40図16、17	73
写真図版12	30号豎穴、第42図1、2、3	74
写真図版12	30号豎穴、第42図4	74
写真図版12	30号豎穴、第42図5	74
写真図版12	30号豎穴、第42図6、7	74
写真図版12	30号豎穴、第42図7	74
写真図版12	30号豎穴、第44図8	74
写真図版12	30号豎穴、第44図8 (頸部)	74
写真図版12	30号豎穴、第44図9~11	74
写真図版13	30号豎穴、第44図10	75
写真図版13	31号豎穴、第46図1	75

写真図版13	31号竖穴、第46图2	75
写真図版13	31号竖穴、第46图3	75
写真図版13	31号竖穴、第46图4	75
写真図版13	31号竖穴、第46图5、6	75
写真図版13	31号竖穴、第46图7、8	75
写真図版13	31号竖穴、第46图8 (侧边)	75
写真図版14	32号竖穴、第47图1、2	76
写真図版14	34号竖穴、第50图1、2	76
写真図版14	34号竖穴、第50图3	76
写真図版14	34号竖穴、第50图4、5	76
写真図版14	34号竖穴、第50图6	76
写真図版14	34号竖穴、第50图7	76
写真図版14	34号竖穴、第50图7部分扩大	76
写真図版14	34号竖穴、第50图8	76
写真図版15	34号竖穴、第50图9	77
写真図版15	34号竖穴、第50图10	77
写真図版15	35号竖穴、第51图2	77
写真図版15	36号竖穴、第53图1~4	77
写真図版15	36号竖穴、第53图5~9、11	77
写真図版15	36号竖穴、第53图12、13	77
写真図版15	36号竖穴、第53图14、16	77
写真図版15	37号竖穴、第55图1	77
写真図版16	39号竖穴、第57图1、2	78
写真図版16	41号竖穴、第60图1~5	78
写真図版16	41号竖穴、第60图4	78
写真図版16	49号竖穴、第67图1、2	78
写真図版16	49号竖穴、第67图4	78
写真図版16	49号竖穴、第67图5	78
写真図版16	50号竖穴、第67图6、7、8	78
写真図版16	50号竖穴、第67图8	78
写真図版17	51号竖穴、第67图9、10	79
写真図版17	51号竖穴、第67图11	79
写真図版17	51号竖穴、第67图12 (表)	79
写真図版17	52号竖穴、第67图13	79
写真図版17	53号竖穴、第67图13部分扩大	79
写真図版17	53号竖穴、第69图1	79
写真図版17	53号竖穴、第69图2	79
写真図版17	2号土坑、第71图1	79
写真図版18	4号土坑、第74图1~5	80
写真図版18	4号土坑、第74图1	80
写真図版18	4号土坑、第74图2、3	80
写真図版18	4号土坑、第74图4	80

写真図版18	4号土坑、第74図4、5	80
写真図版18	4号土坑、第74図5	80
写真図版18	5号土坑、第76図1 (表)	80
写真図版18	5号土坑、第76図1 (内面)	80
写真図版19	5号土坑、第76図2	81
写真図版19	5号土坑、第76図2 (外面)	81
写真図版19	5号土坑、第76図2 (内面)	81
写真図版19	第77図1、2、3、4	81
写真図版19	第77図5	81
写真図版19	第77図6	81
写真図版19	第77図7	81
写真図版19	第77図8	81
写真図版20	第78図1	82
写真図版20	第78図2	82
写真図版20	第78図3	82
写真図版20	第78図10、11、12	82
写真図版20	第78図14、15	82
写真図版20	第78図20	82
写真図版20	第78図22 (表)	82
写真図版20	第78図22 (裏)	82

# 第1章 調査の経過と概要

## 第1節 調査に至る経過と調査方法

今回調査した折立遺跡は県道百枝浅瀬野津線道路改良工事に伴うものである。調査対象地は大野川右岸の河岸段丘の三段目に当たり、折立遺跡に隣接する北東部は、旧石器時代の文化層を層位的に発掘調査した百枝（小学校）遺跡や弥生時代の集落跡の陣箱遺跡等が位置している。

折立遺跡は昭和49年（1974）の試掘調査でその内容がある程度把握されていたが、今回の発掘調査は百枝浅瀬野津線の道路改良工事に伴い、平成17年6月1日～平成17年10月31日にかけて実施した。この周辺部は陣箱遺跡も含めて、昭和40年代に圃場整備された場所であったが、遺構、遺物の検出が表土下約1.5m以上も深い地点に遺存していたため、保存状態は比較的良好であった。

発掘調査はバイパスになる路線内を重機で試掘調査し、遺構や遺物の確認された部分を発掘調査の対象地とした。調査区は現在も使用されている道や水路を破壊しないように、第1調査区～第4調査区に区分して実施した。発掘調査の結果、全調査区で旧石器時代～近世の遺物が僅少な出土をしているが、折立遺跡の主体は弥生時代～古墳時代の集落跡であった。遺構としては、53基の竪穴と5基の土坑、3棟の掘立柱建物が確認できた。

折立遺跡の発掘調査報告書は平成18年度に刊行する予定で遺物整理等を実施していたが、建設政策課との協議の結果、三重新殿線に伴う茶屋久保B遺跡の発掘調査を最優先させるため、平成18年度の折立遺跡の整理を一旦中止し、茶屋久保B遺跡の発掘調査に全力を傾注した。その結果、折立遺跡の発掘調査報告書は平成19年度に刊行することとなった。

## 第2節 調査団の構成

平成17年度に実施した折立遺跡の調査組織は以下のとおりである。

調査主体 大分県教育委員会

調査組織	渋谷 忠章	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長
	益永 孝則	大分県教育庁埋蔵文化財センター次長兼総務課長
	栗田 勝弘	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課長
	甲斐 寿義	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課主幹（調査担当）
	吉田 朋史	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課嘱託（調査担当）
	大野 瑞恵	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課嘱託（調査担当）

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 地理的・歴史的環境

折立遺跡は豊後大野市三重町百枝字折立に所在している。発掘調査の結果、折立遺跡の主体は、弥生時代後期～古墳時代前期に至る広大な集落遺跡であった。

阿蘇外輪山に源を発する大野川は、大小の蛇行河川を合流して東流し、ある所では屏風のような深い断崖を形成し、また、部分的な河岸段丘を造成しつつ、三重町の北端付近で大きく向きを北に取り別府湾へと注いでいる。大野川の上・中流域の両岸には、阿蘇Ⅳと呼ばれる溶結凝灰岩を基盤とした穏やかな起伏の火山灰台地が発達している。この様な日当たりの良い台地には旧石器時代から歴史時代にかけての遺跡が数多く点在しており、まさに、大野川の「たまもの」とも呼べるほどの立地環境である。

折立遺跡の所在する百枝地区は大野川の右岸の第三河岸段丘上に位置している。標高は約104mであり、大野川との比高は約43mである。折立遺跡は大野川の蛇行に沿って舌状に延びる段丘上の基部付近に位置し、東側に延びた陣箱遺跡とともに、段丘上の縁辺部を主体として東西に長く展開する集落跡と推察できる。

路線幅内でこれまでに確認できた遺構数は、折立遺跡が53基の竪穴遺構、陣箱遺跡が47基の竪穴遺構であった。これを、この周辺の面積で換算してみると、折立遺跡、陣箱遺跡の周辺では数百基の大集落遺跡が眠っている計算となる。

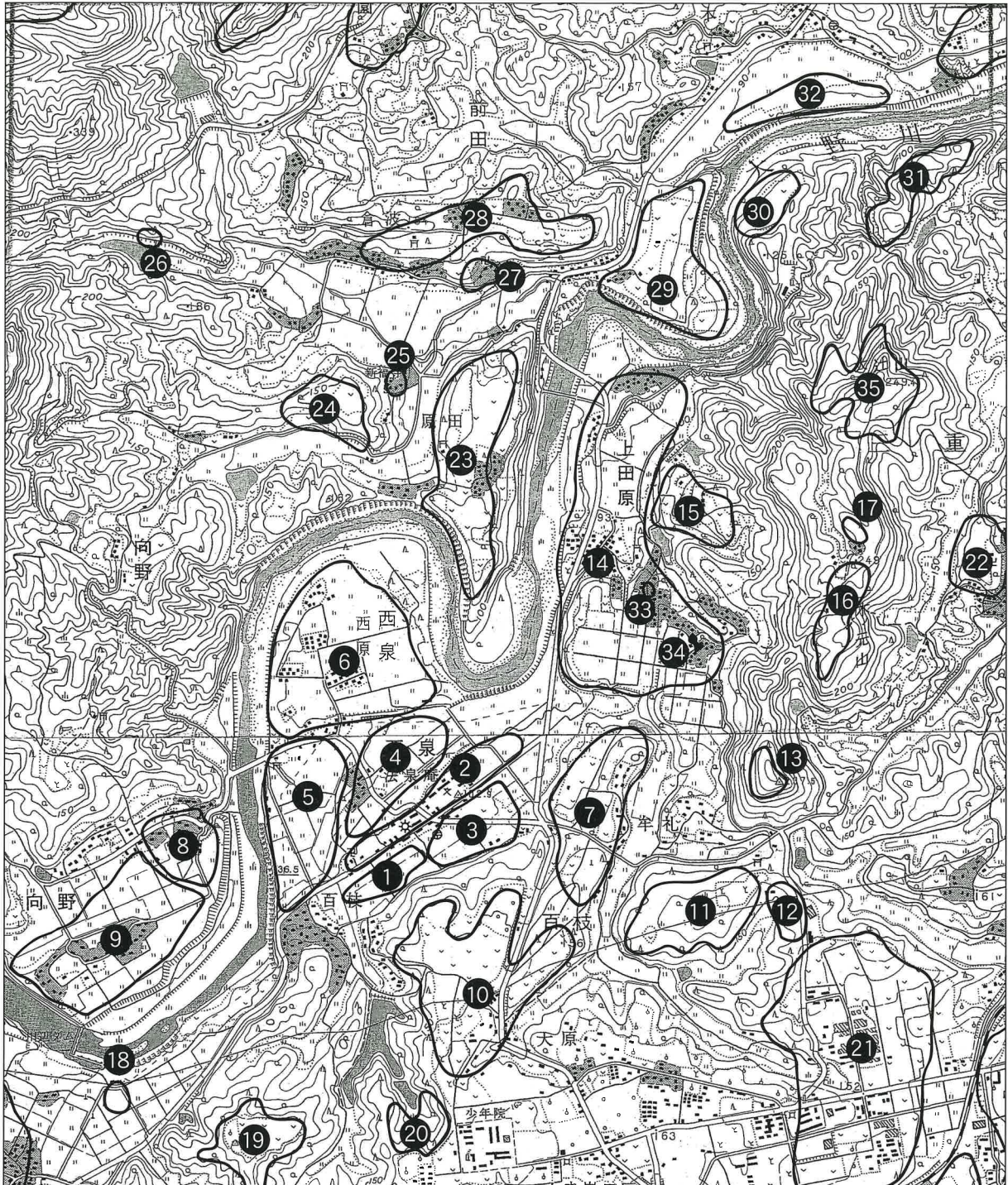
折立遺跡の約100mの北東部には後期旧石器時代の遺跡として百枝（小学校）遺跡が著名である。昭和50年度の屋外プール建設、昭和57年度の校舎建設、昭和59年度の体育館増築に伴って3度の発掘調査が実施された。その結果、集石遺構を伴った文化層を層位的に把握し、石器組成の変遷等注目すべき成果が確認されている。また、折立遺跡の南西約1.8kmの川辺地区では細石刃、細石核を主体とする上下田遺跡、同4kmにはコケシ形石製品で著名な国指定史跡の岩戸遺跡が位置している。一方、折立遺跡の南東約2kmには平成18年度に調査した茶屋久保B遺跡が発見されている。三稜尖頭器のみを主体とした特異な文化層であり留意される。

縄文時代の遺跡としては纏まったものはないが、上記の遺跡からは縄文早期や後晩期の土器、石器が僅少含まれていた。また、折立遺跡の東約1.5kmには旧石器や縄文早期の包含層が検出された牟礼越遺跡がある。

弥生時代の遺跡としては、東北側に隣接する陣箱遺跡や同約1kmには上田原遺跡、西側約1kmの大野川対岸には向野遺跡が周知されている。

古墳時代には折立遺跡の北東部の上田原地区には前方後円墳の立野古墳、舟形石棺や箱形石棺が露出した鉢ノ窪石棺群、下津留古墳群が位置している。また、折立遺跡の南東約3kmに前方後円墳の道ノ上古墳や重政古墳、同約2kmには竜ヶ鼻古墳や竜ヶ鼻横穴墓群が位置し、南約1.5kmには穴井横穴墓群、南西約2kmには十六山横穴墓群が形成されている。

古代・中世の遺跡は顕著ではないが、折立遺跡の北東2.5kmの大辻山頂には見事な中世墳墓群が遺存している。また、石造品では正中25年（1370）の法泉庵宝篋印塔や明德4年（1393）の川辺宝塔、天文5年（1536）の馬場石幢などの県指定有形文化財が著名である。



1 折立遺跡	2 百枝(小学校)遺跡	3 陣箱遺跡	4 法泉庵遺跡群
5 法泉庵・西遺跡群	6 川辺遺跡群	7 牟礼遺跡	8 浄土寺遺跡
9 向野遺跡群	10 大原遺跡群	11 宮山遺跡	12 牟礼ノ越遺跡
13 木ノ元山の陣	14 上田遺跡群	15 上田原東遺跡群	16 牟礼嶽遺跡
17 正福寺遺跡	18 松尾遺跡	19 梶原遺跡	20 穴井横穴墓群
21 茶屋久保遺跡群	22 下津留遺跡	23 原田第2遺跡群	24 新福寺西遺跡
25 新福寺遺跡	26 妙光寺遺跡	27 賢龍寺遺跡	28 中原遺跡群
29 長田遺跡	30 大辻山北麓遺跡	31 宇村瀨城	32 大木遺跡
33 鉢の窪石棺群	34 立野古墳	35 大辻山中世墳墓群	



大分県

第1図 折立遺跡周辺の主要遺跡位置図 (1/25,000)

### 第3章 調査の成果

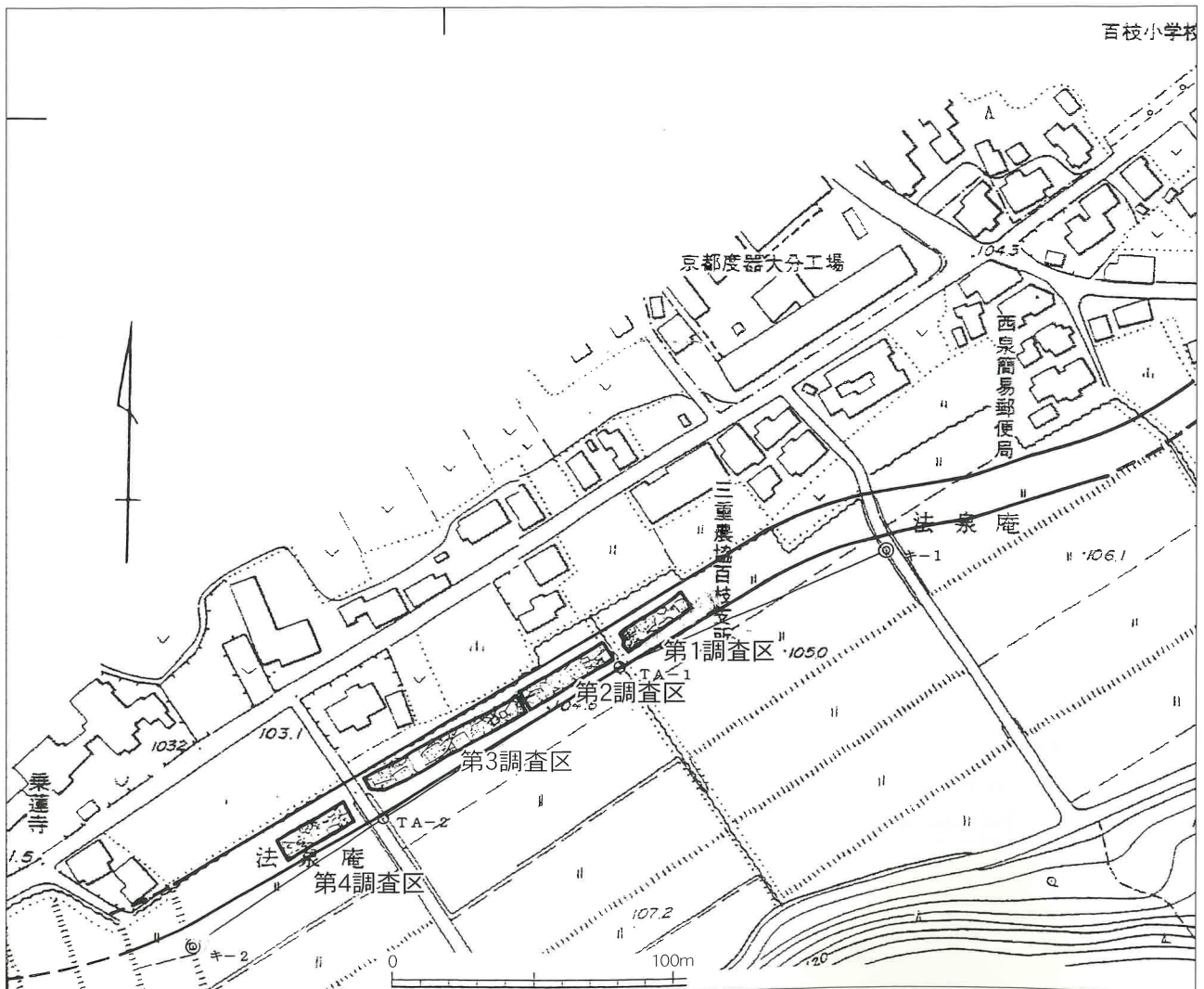
折立遺跡の発掘調査は、第1調査区～第4調査区を設定して調査を実施した。各調査区の出土遺構は次のとおりである。その内、出土遺物が確認できた遺構はゴシックで表示した。

第1調査区は1号竪穴(S-002)、2号竪穴(S-003)、3号竪穴(S-016)、4号竪穴(S-017)、5号竪穴(S-018)、6号竪穴(S-019)、7号竪穴(S-029)、8号竪穴(S-031)、9号竪穴(S-006)、10号竪穴(S-030)、1号掘立柱建物遺構。

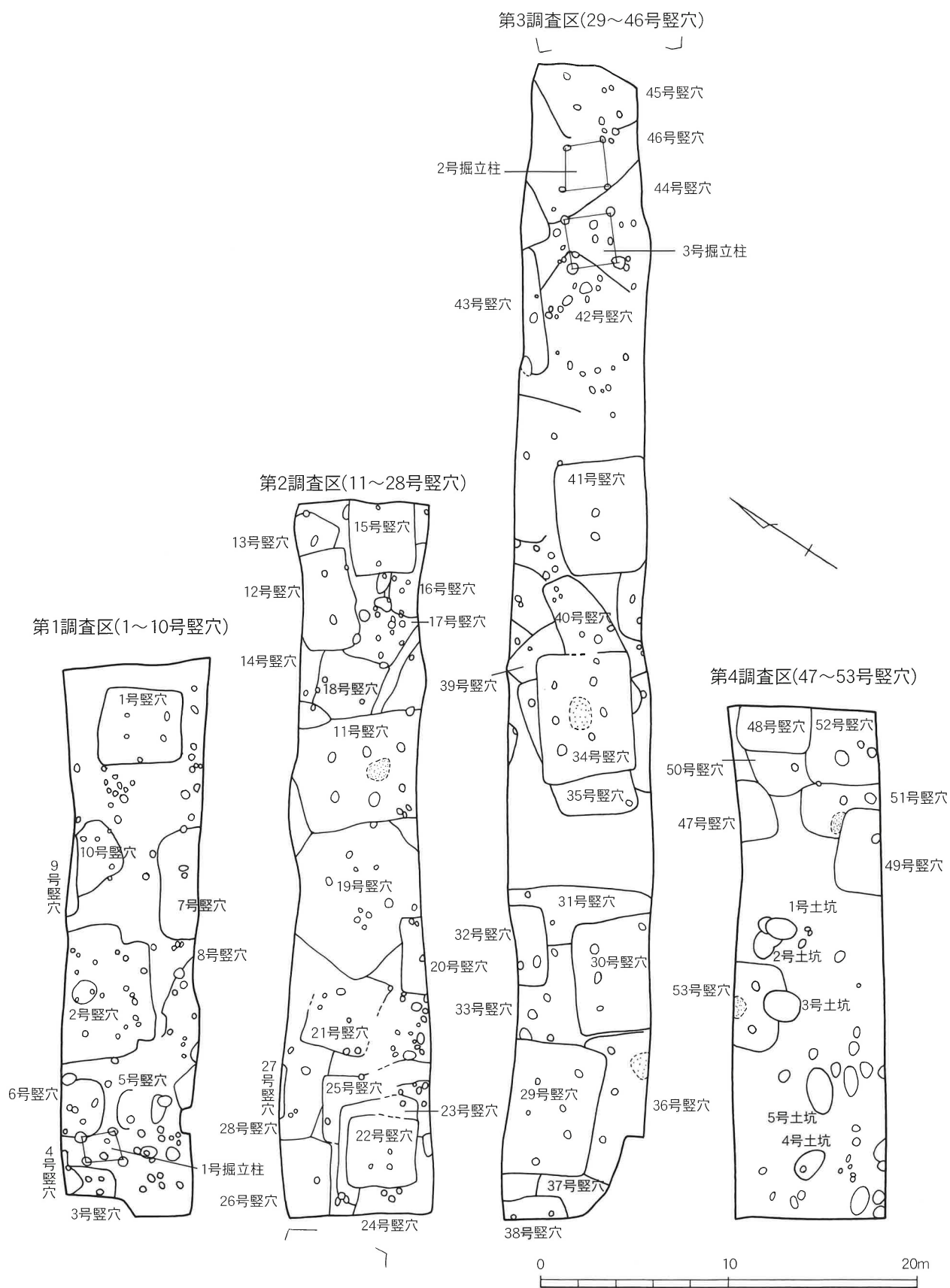
第2調査区は11号竪穴(S-011)、12号竪穴(S-012)、13号竪穴(S-014)、14号竪穴(S-015)、15号竪穴(S-013)、16号竪穴(S-026)、17号竪穴(S-027)、18号竪穴(S-034)、19号竪穴(S-035)、20号竪穴(S-037)、21号竪穴(S-038)、22号竪穴(S-041)、23号竪穴(S-044)、24号竪穴(S-047)、25号竪穴(S-049)、26号竪穴(S-046)、27号竪穴(S-045)、28号竪穴(S-048)。

第3調査区は29号竪穴(S-067)、30号竪穴(S-068)、31号竪穴(S-069)、32号竪穴(S-070)、33号竪穴(S-071)、34号竪穴(S-074)、35号竪穴(S-079)、36号竪穴(S-075)、37号竪穴(S-076)、38号竪穴(S-077)、39号竪穴(S-081)、40号竪穴(S-084)、41号竪(S-088)、42号竪穴(S-089)、43号竪穴(S-091)、44号竪穴(S-093)、45号竪穴(S-094)、46号竪穴(S-095)、2号掘立柱建物遺構、3号掘立柱建物遺構。

第4調査区は47号竪穴(S-060)、48号竪穴(S-061)、49号竪穴(S-062)、50号竪穴(S-063)、51号竪穴(S-064)、52号竪穴(S-065)、53号竪穴(S-066)、1号土坑(S-058)、2号土坑(S-059)、3号土坑(仮-)、4号土坑(仮-001)、5号土坑(仮-003)。



第2図 折立遺跡調査区配置図 (1/2500)



第3図 折立遺跡遺構配置図 (1/200)



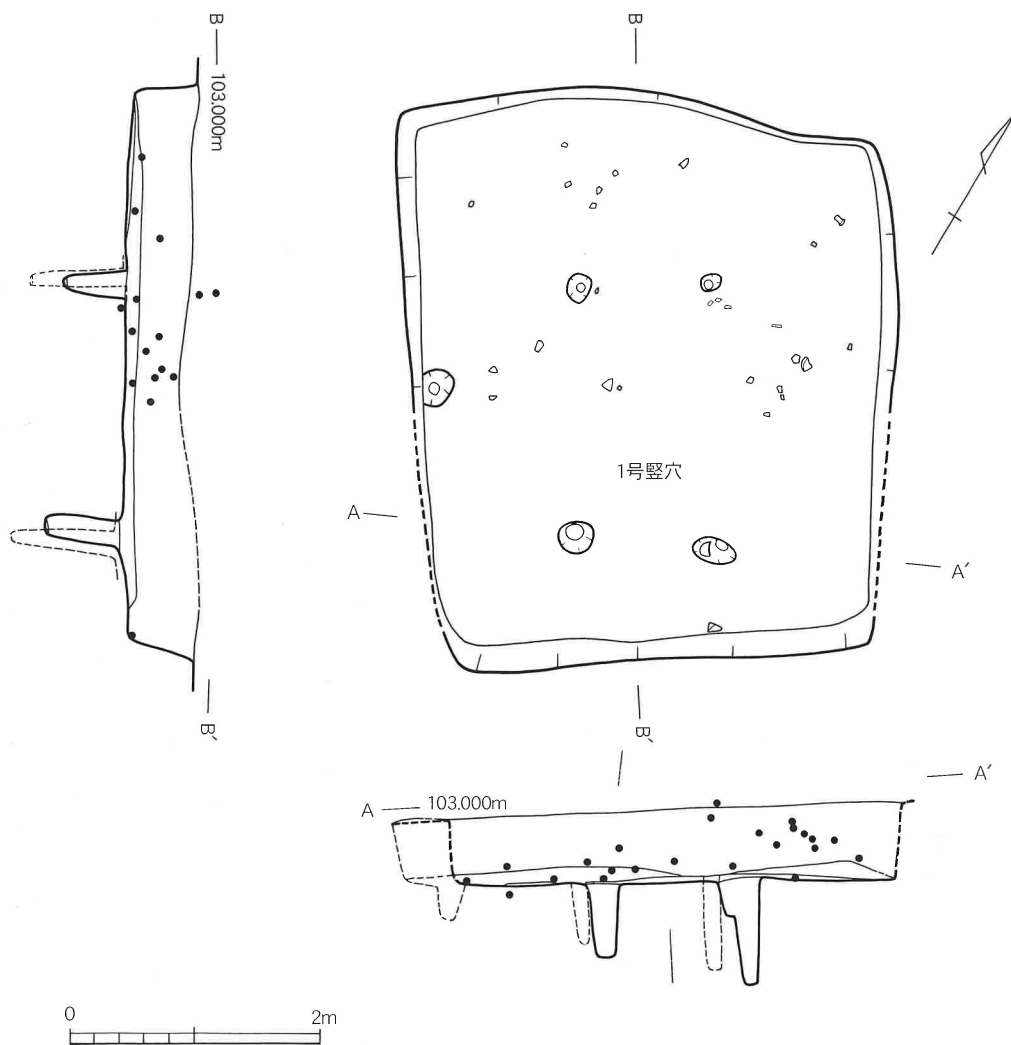
## 第1節 第1調査区

### 1号竪穴 (第4図)

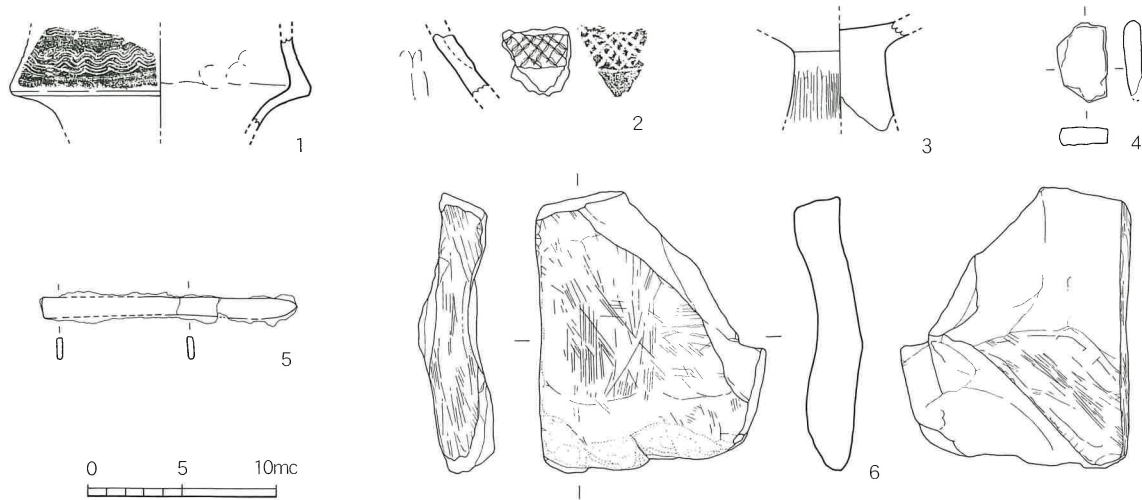
第1調査区の西端に位置する長方形プランの竪穴である。長軸を南北にとり、長径は4.6m、短径は4mである。確認面から床面までは約60cmである。長方形プランの内側の中央部に長軸約2m、短軸約1mに4本主柱が位置している。柱穴の深さは床面から60~85cmである。覆土には少量の土器片が包含されていた。炉跡等は確認できなかった。

### 出土遺物 (第5図)

1は複合口縁の壺形土器である。口縁を欠損するが、屈曲部での最大径は16.2cmである。櫛描波状文が上下2段に施文されている。2は胴部に施文された帯状突帯に斜め格子目文を施す。3は高坏の脚部である。4は半月形の土器片加工品である。長径4.3cm、短径2.5cmである。5は長さ13.5cm、幅1cmの刀子の一部である。6は良く使い込まれた砥石である。



第4図 折立遺跡1号竪穴実測図 (1/60)



第5図 折立遺跡1号竪穴出土遺物実測図(1/4)

## 2号竪穴(第6図)

第1調査区の中央部の北壁に位置する二段掘りの花卉形プランの竪穴である。北半分は調査区外に遺存している。花卉は隅丸長方形の4弁を呈し、長径5.4m、短径1.4mである。確認面から花卉の床面までは25cmである。中央部には方形の竪穴があり、確認できる一辺は4.5mである。確認面から床面までは約50cmである。竪穴中央部には長径1.3m、短径1.1m、深さ25cmの楕円状の掘り込み炉跡が位置している。支柱穴は中央部の方形竪穴の各コーナーにある4柱穴と心持ち胴張りのする4辺の中央部にある4本柱穴の計8本である。花卉にも幾つかの柱穴があるが対応は判然としない。柱穴の深さは床面から50~60cmである。花卉形プランのほぼ全面には焼土や炭化物が遺存しており焼失家屋と考えられる。炉跡の南側には略完形の下城式の甕形土器が潰れた状態で出土していた。覆土には少量の土器片が包含されていた。

## 出土遺物(第7、8図)

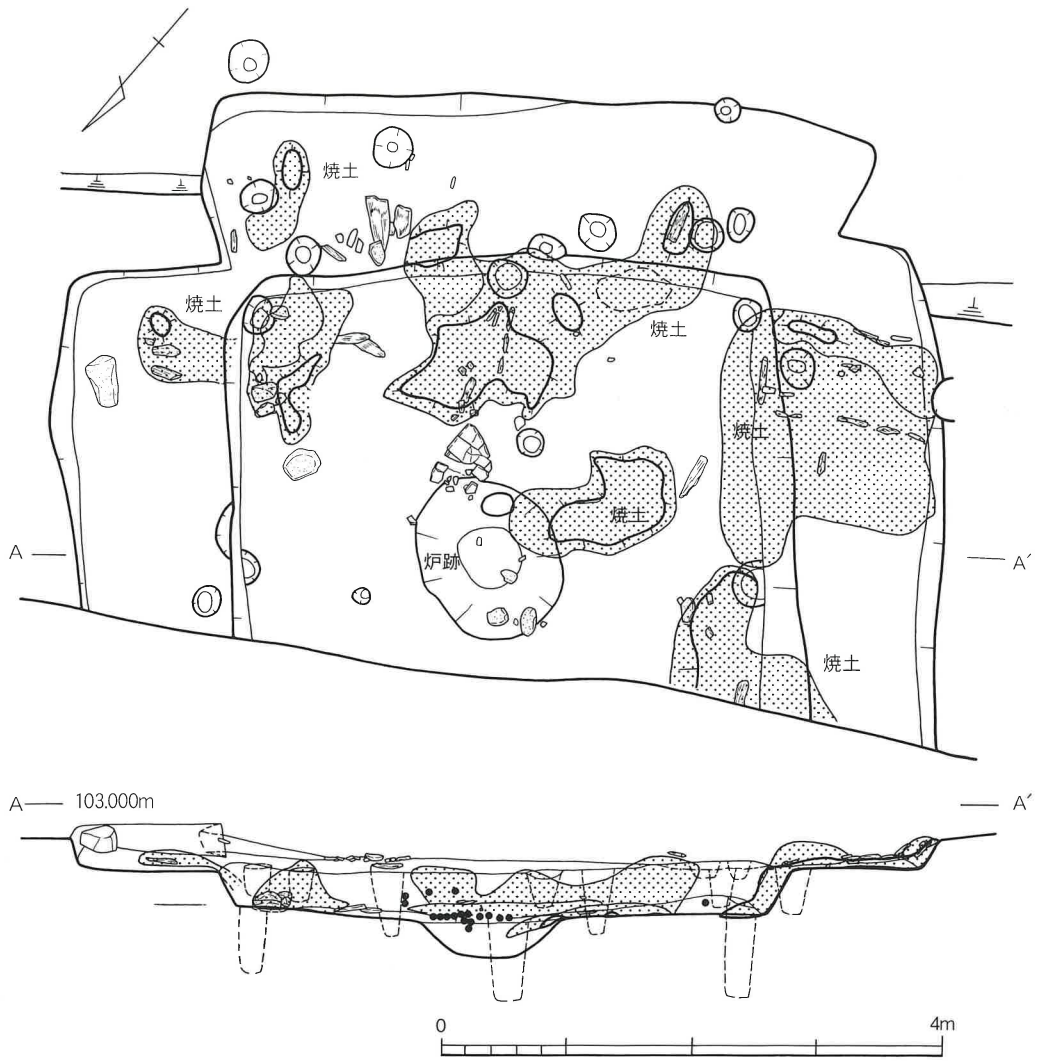
1は下城式の甕形土器である。口径の最大径は36cmである。口縁下に断面三角形の二条の刻み目突帯が廻っている。口縁部はやや窪み外側に傾斜している。表面は縦の刷毛目、内面はヘラで調整の削りと縦の磨きが確認できる。底部を欠損している。2は下城式の甕形土器である。口縁下に二条の低い三角形突帯が廻っている。表裏は横のヘラ磨き。3、4は平底の底部である。3は表裏撫で調整で底径7.2cm。4は表裏刷毛目に指頭痕のついた撫で調整で、底径は6.2~6.6cmである。1の下城式土器と同一個体である。

5は基部にやや削り込みのある磨製石鏃の略完形品である。先端を僅かに欠損しているが、最大長4.3cm、最大幅1.8cm、厚さ2mm、重さ2.2gを呈する。

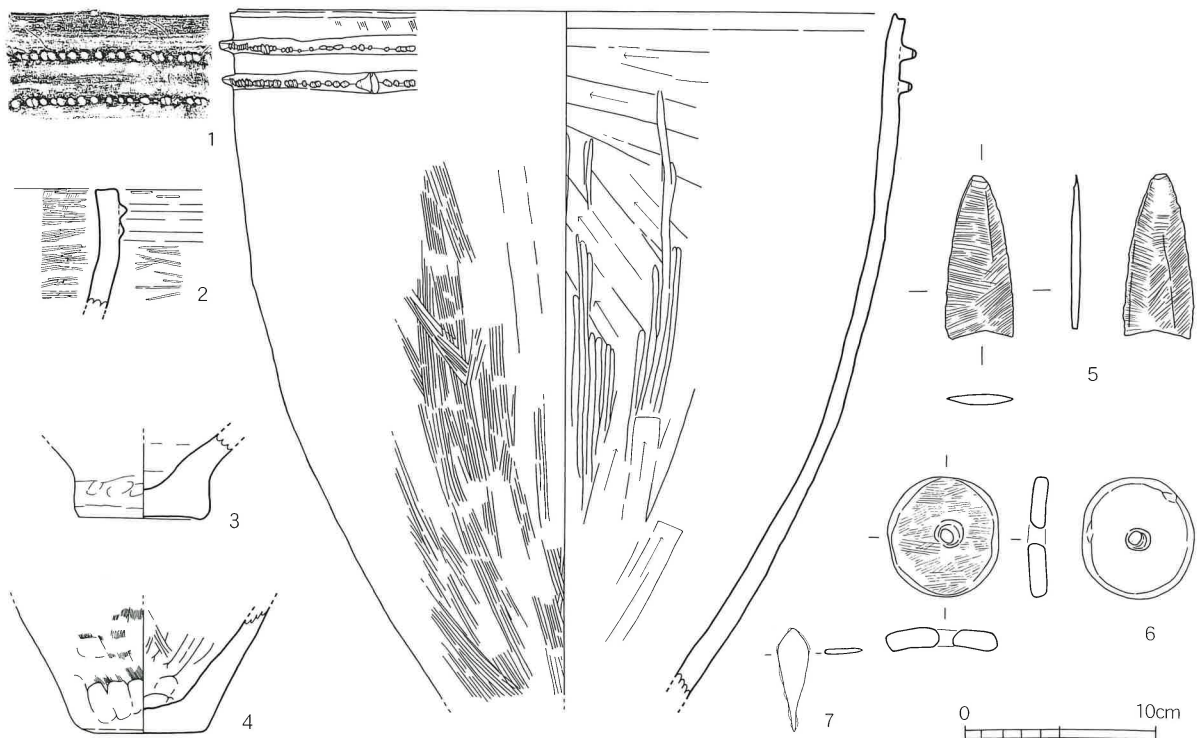
6は土器片加工品である。土器片の周縁を研磨して中央部に穿孔を施したものである。土器片を再利用した紡錘車と推測できる。直径6~6.4cm、土器片の厚さ0.8cm、穿孔径0.7cm、重さ43.1gである。

7は鉄鏃である。長さ5.5cm、幅1.7cm、厚さ2.2cm、重さ5.9gである。

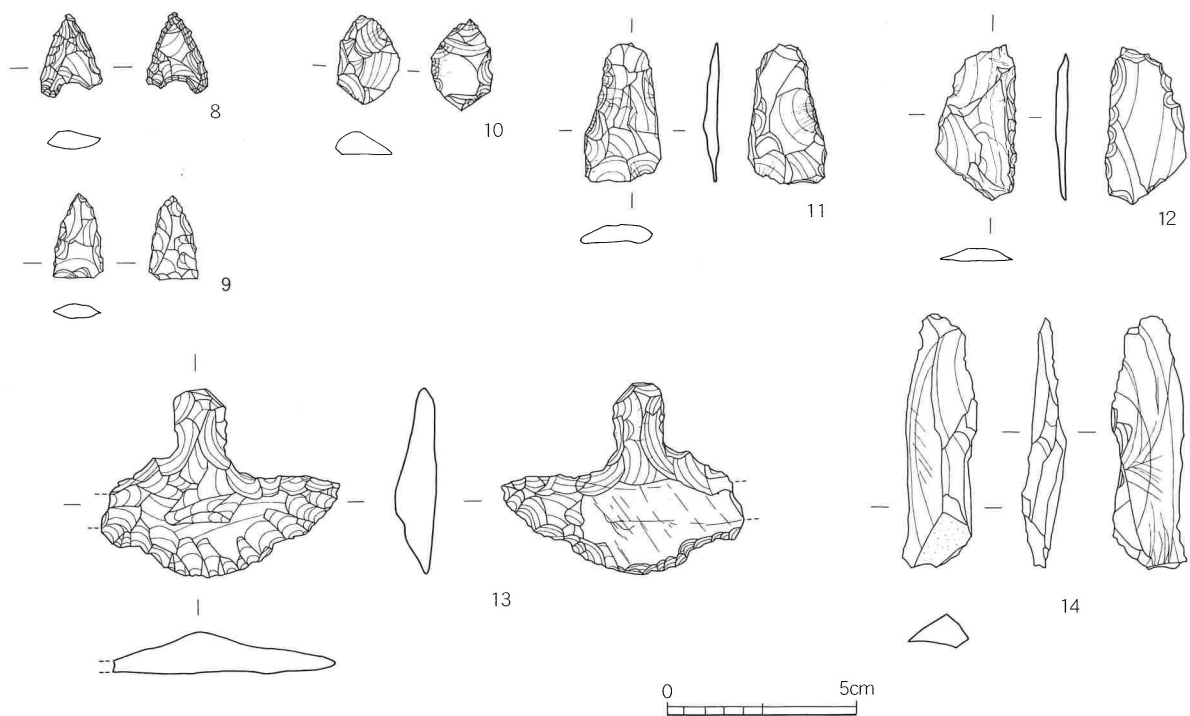
8は姫島産黒曜石の凹基式石鏃である。長さ2.1cm、幅1.6cm、厚さ0.5cm、重さ1gである。9は平基式石鏃である。長さ2.2cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重さ1gである。10は削器である。長さ1.9cm、幅1.6cm、厚さ0.6cm、重さ2gである。11は削器である。長さ3.7cm、幅2.1cm、厚さ0.4cm、重さ3.2gである。12は削器である。長さ9.1cm、幅2.1cm、厚さ0.3cm、重さ2.3gである。13は姫島産黒曜石の横長の石匙である。長さ5cm、幅6.1cm、厚さ1.1cm、重さ19.9gである。14は横長の剥片である。長さ6.7cm、幅1.6cm、厚さ0.8cm、重さ9.8gである。



第6图 折立遺跡2号竖穴実測図 (1/60)



第7图 折立遺跡2号竖穴出土遺物実測図1 (1/4)



第8図 折立遺跡2号竖穴出土遺物実測図2 (1/2)

### 3号竖穴 (第9図)

第1調査区の西北隅部に位置する隅丸方形の竖穴である。一部しか遺存していないが短軸部の一辺がやや張るものである。長軸を南北にとり、確認面から床面までは約40~50cmである。柱穴は定かではないが、柱穴の深さは床面から約80cmである。炉跡等は確認できなかった。

### 4号竖穴 (第9図)

第1調査区の西北隅部に位置する竖穴である。一部しか遺存していないが、歪な形態の竖穴である。長軸を南北にとり、確認面から床面までは約45cmである。柱穴は定かではない。

### 5号竖穴 (第9図)

第1調査区の西北隅部に位置する竖穴である。一部しか遺存していないが、短軸部の一辺がやや弧状に張るものである。確認面から床面までは約40~50cmである。

### 6号竖穴 (第9図)

第1調査区の西北隅部に位置する隅丸方形の竖穴である。半分が調査区の外に遺存している。長軸を南北にとり、短軸部の一辺がやや弧状に張るものである。確認面から床面までは約40cmである。竖穴内の柱穴は何本あるか定かではない。柱穴の深さは床面から約30~35cmである。炉跡等は確認できなかった。6号竖穴は1号掘立柱建物遺構に切られる関係にある。

### 7号竖穴 (第10図)

第1調査区の中央部の南壁に位置する隅丸方形プランの竖穴である。南側の大半は調査区外に遺存している。長軸か短軸かはわからないが、一辺は5.6mの規模である。確認面から床面までは約25cmである。竖穴内の柱穴は定かではない。

### 出土遺物 (第11図)

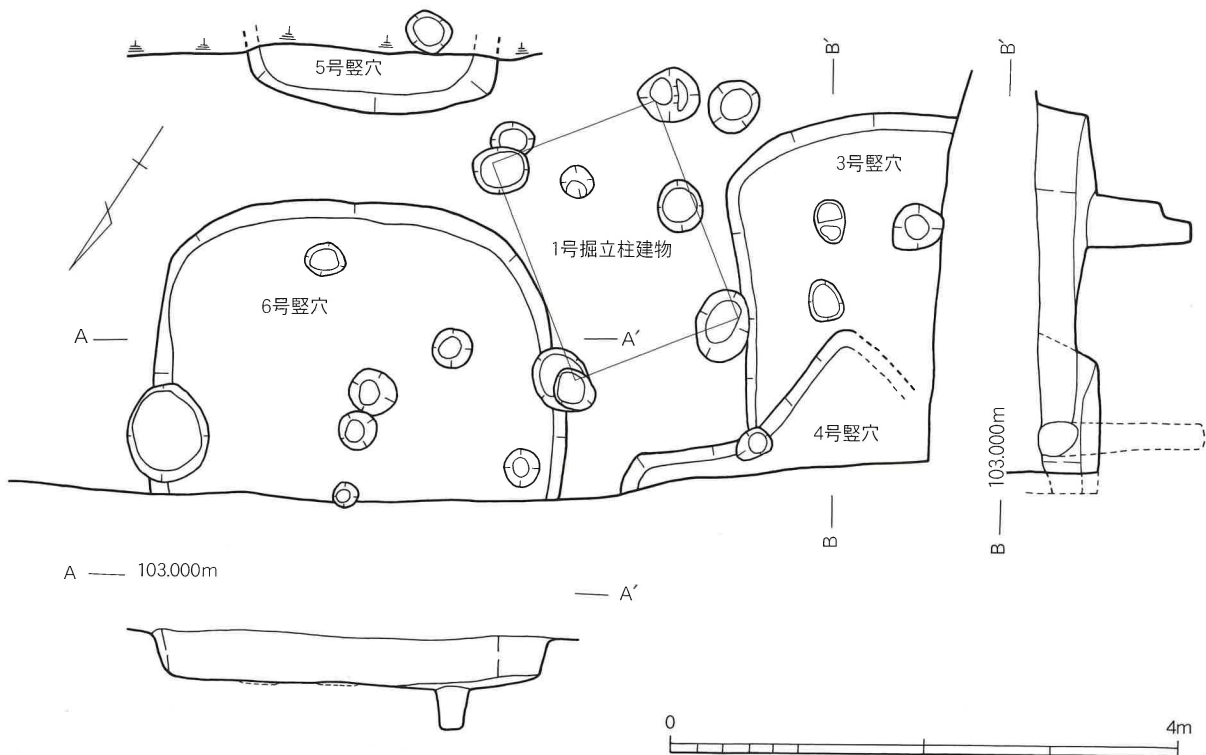
1は口縁部やや外反し胴部の張りのない甕形土器である。口径最大径は14.3cm、頸部径は12.5cm、胴部最大径は16cmである。表裏は撫で調整を施す。

### 8号竖穴 (第10図)

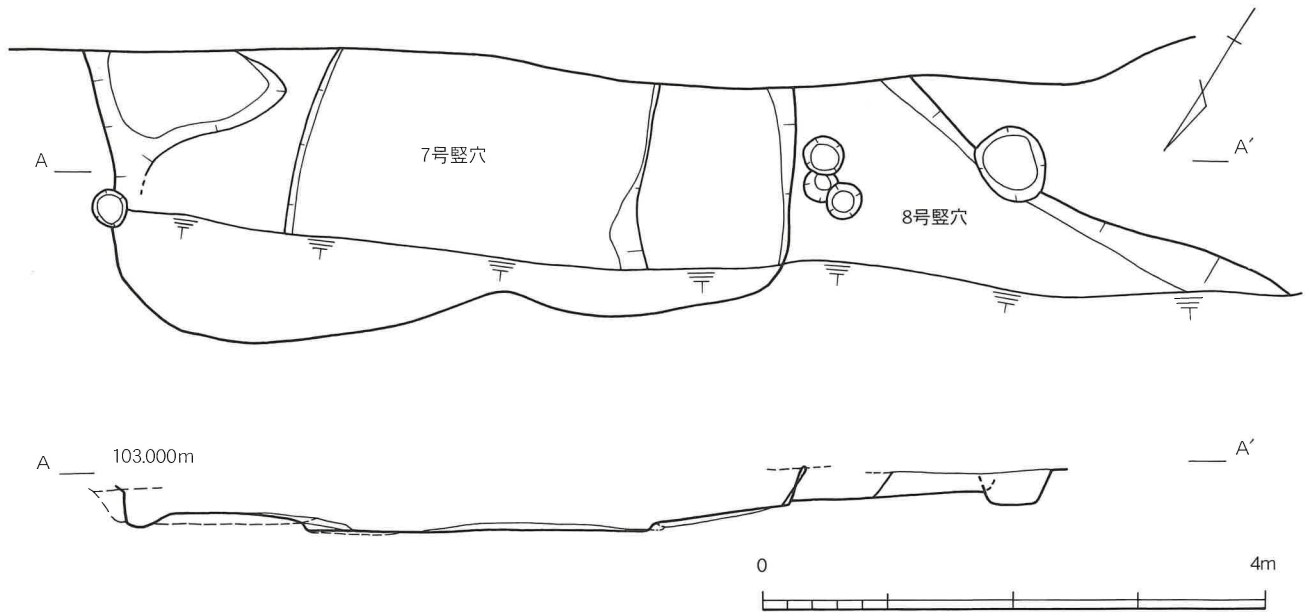
第1調査区の中央部の南壁に位置する隅丸方形プランの竖穴である。竖穴の南東隅部は調査区外に遺存している。7号竖穴と大きく重複している。

### 9号竖穴 (第12図)

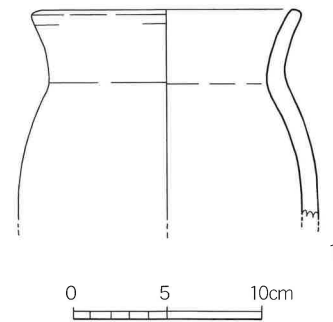
第1調査区の中央部東寄りの北壁に位置する隅丸方形プランの竖穴である。竖穴は一辺を残してほとんどが調査区外に遺存している。長軸か短軸かはわからないが、一辺は4.4mの規模である。確認面から床面までは約90cmである。竖穴内の覆土の堆積は周辺からの流れ込みの様相を呈する。10号竖穴を大きく切る関係にある。



第9図 折立遺跡3～6号竖穴、1号掘立柱建物実測図 (1/60)



第10図 折立遺跡7号、8号竖穴実測図 (1/60)



第11図 折立遺跡7号竖穴出土遺物実測図 (1/4)

### 10号竖穴 (第12図)

第1調査区の中央部東寄りの北壁に位置する隅丸長方形プランの竖穴である。竖穴は大半が調査区外に遺存している。長軸を東西にとるが長径は判らない。短径は約3mの規模である。確認面から床面までは約25cmである。柱穴の配置は規則性がないが、竖穴床面からの深さは約25cmである。9号竖穴に大きく切られる関係にある。

### 1号掘立柱建物遺構 (第9、13図)

第1調査区の西北隅部に位置する4本柱の掘立柱建物遺構である。長軸を南北にとり、柱穴の間隔は、長径1.9m、短径1.5mである。3号竖穴と6号竖穴に挟まれた位置に所在している。柱穴の深さは確認面から約20~30cmである。1号掘立柱建物遺構は6号竖穴を切る関係にある。

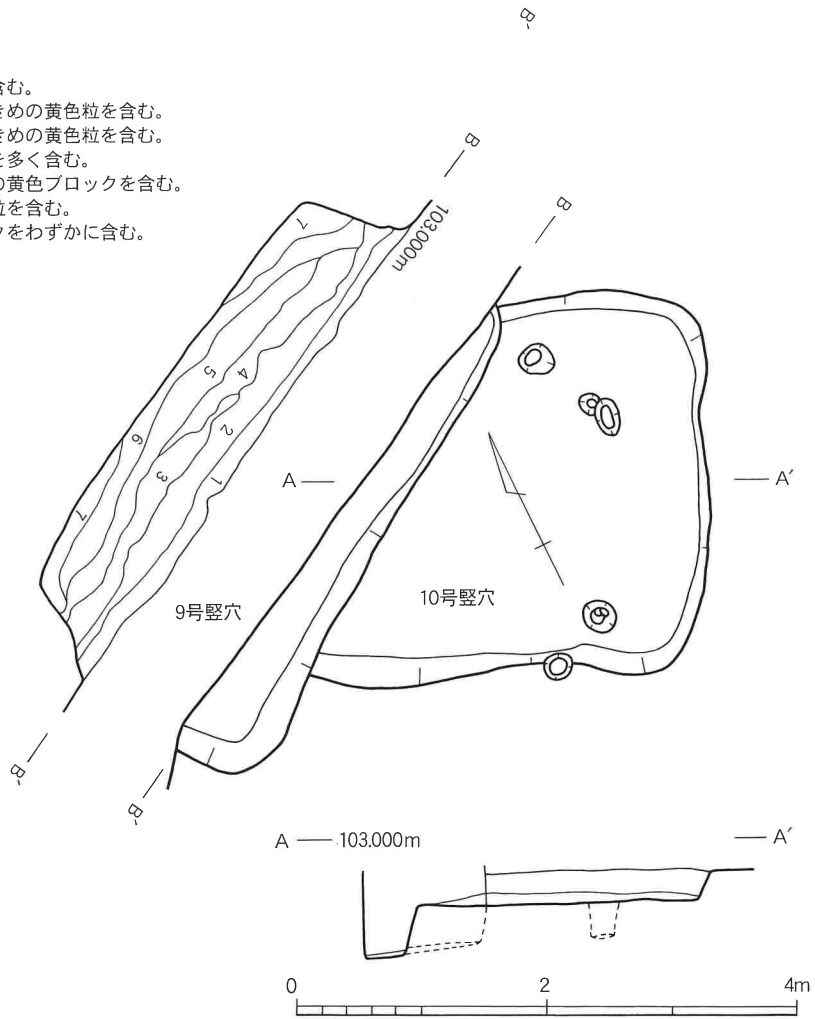
### 第1調査区出土遺物 (第14図)

1は黄褐色を呈する京焼風の高台付陶器碗である。高台径は5.8cmである。2は平底部である。表面に縦の刷毛目を施し、表裏には指頭圧痕が残っている。底径は7.4~7.8cmである。

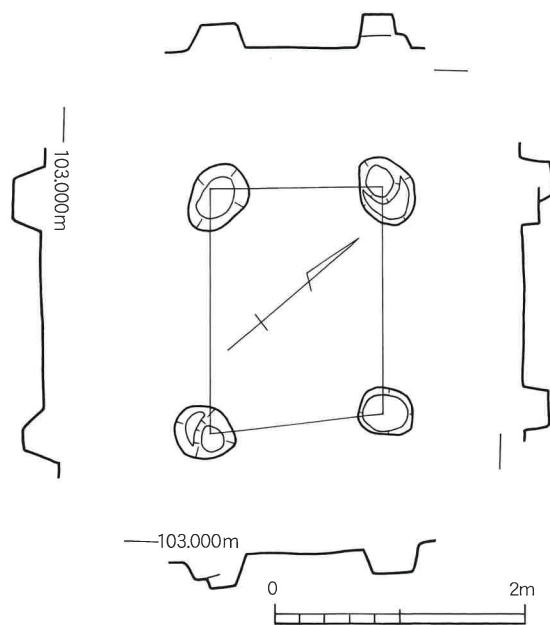
3は先端の尖った刺突具である。長さ17cm、幅0.7cm、厚さ0.4cm、重さ36gである。

4は磨製石鏃の破片である。基部と先端部を欠損している。長さ2.9cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ1.2gである。5はチャートの使用痕付剥片である。長さ2.5cm、幅2.6cm、厚さ0.8cm、重さ

- 1・・暗褐色土層。黄色粒を含む。
- 2・・淡暗褐色土層。やや大きめの黄色粒を含む。
- 3・・暗黄褐色土層。やや大きめの黄色粒を含む。
- 4・・明黄褐色土層。黄色粒を多く含む。
- 5・・暗黄褐色土層。大きめの黄色ブロックを含む。
- 6・・黒色土層。若干の黄色粒を含む。
- 7・・褐色土層。黄色ブロックをわずかに含む。

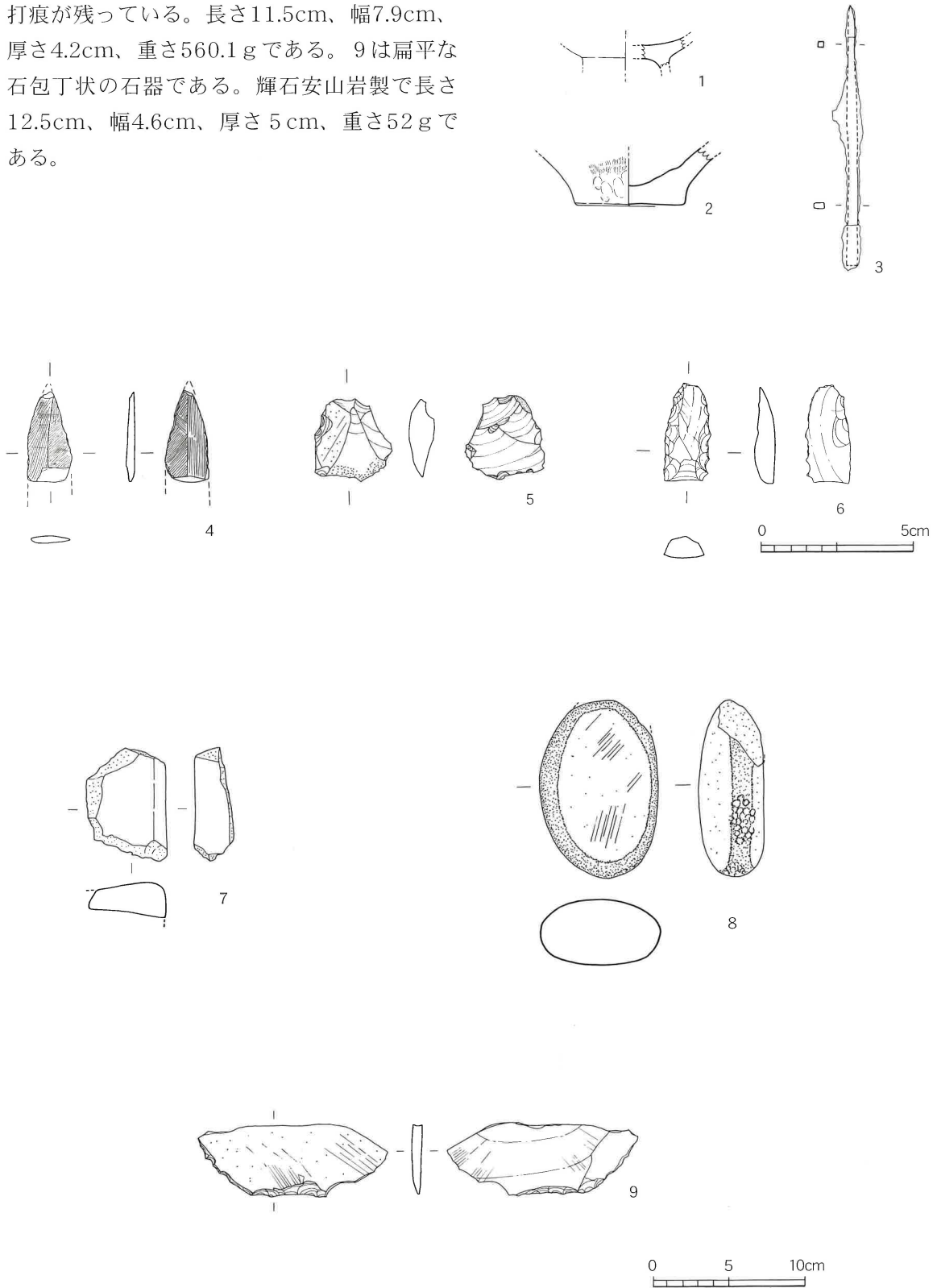


第12図 折立遺跡9号、10号竖穴実測図 (1/60)



第13図 折立遺跡1号掘立柱建物実測図 (1/60)

5.3gである。6は旧石器時代の流紋岩製の三稜尖頭器である。長さ3.2cm、幅1.5cm、厚さ0.7cm、重さ3.9gである。7は砂岩の砥石である。現状での長さ7.2cm、幅5.2cm、厚さ2.2cm、重さ115gである。8は楕円状の川原円礫を使用した磨石、敲石である。表面は研磨され、側辺部は敲打痕が残っている。長さ11.5cm、幅7.9cm、厚さ4.2cm、重さ560.1gである。9は扁平な石包丁状の石器である。輝石安山岩製で長さ12.5cm、幅4.6cm、厚さ5cm、重さ52gである。



第14図 折立遺跡第1調査区出土遺物実測図 (1/4、1/2)

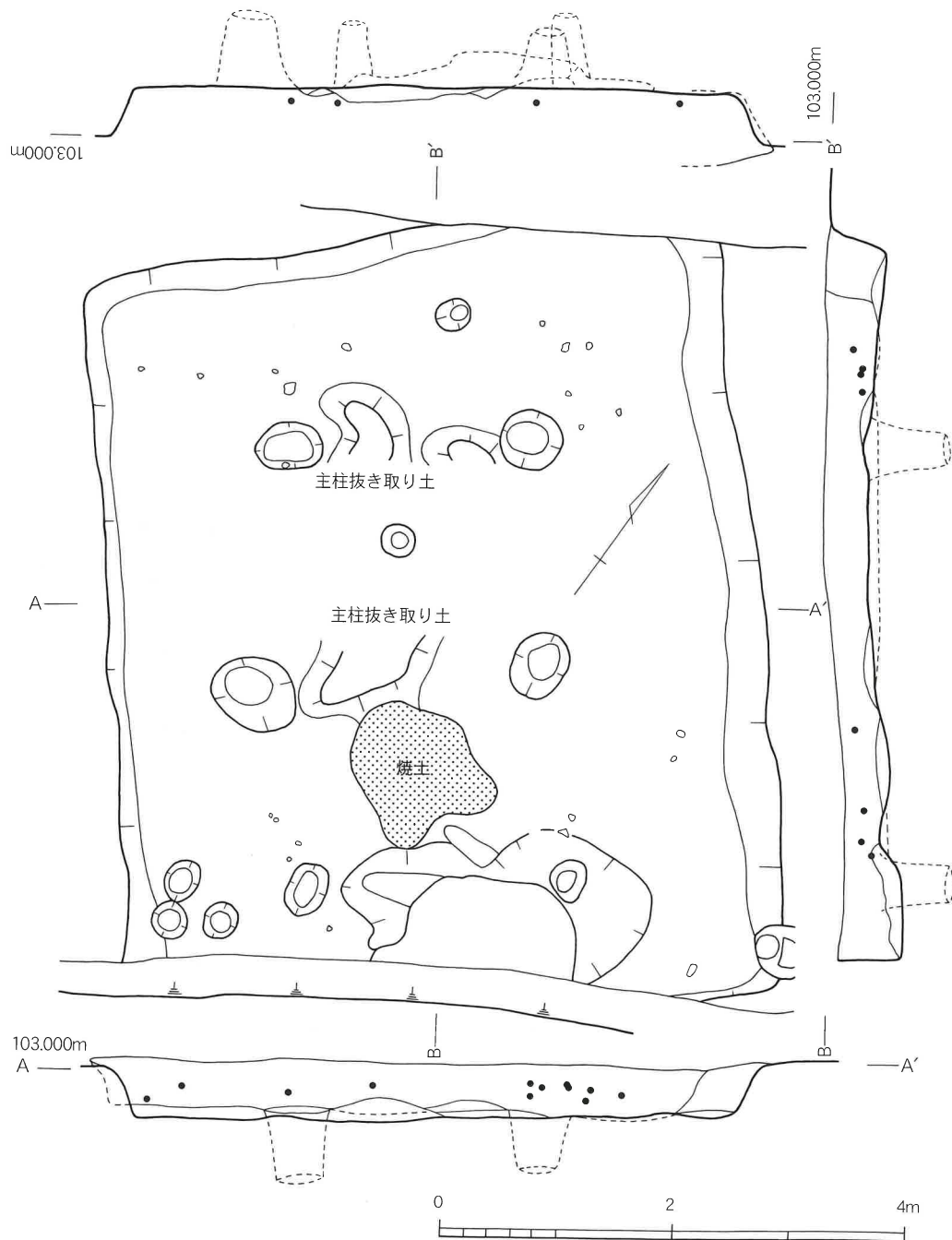


## 第2節 第2調査区

### 11号竪穴 (第15、16図)

第2調査区の中央部に位置する長方形プランの竪穴である。長軸を南北にとり、長径は7m、短径は5.7mである。確認面から床面までは約50cmである。長方形プランの中央部に6本主柱が位置している。柱穴の深さは床面から50~60cmである。柱穴の傍には柱の抜き取り痕跡の土がこんもりと堆積していた。覆土には少量の土器片が包含されていた。炉跡は焼土に炭化物の混じった南北1.3m、東西1mの範囲の地床炉である。

竪穴の南壁には長径2.6m、短径1.3mの歪な楕円状土坑が位置している。竪穴の床面から土坑の底面までは約20~30cmである。土坑の底面は平坦で径が約1.5mある。土坑内には小さな骨片が検出されている。土坑の上面には拳大の川原礫が並んで置かれていた。用途や機能は判然としない。



第15図 折立遺跡第11号竪穴実測図 (1/60)

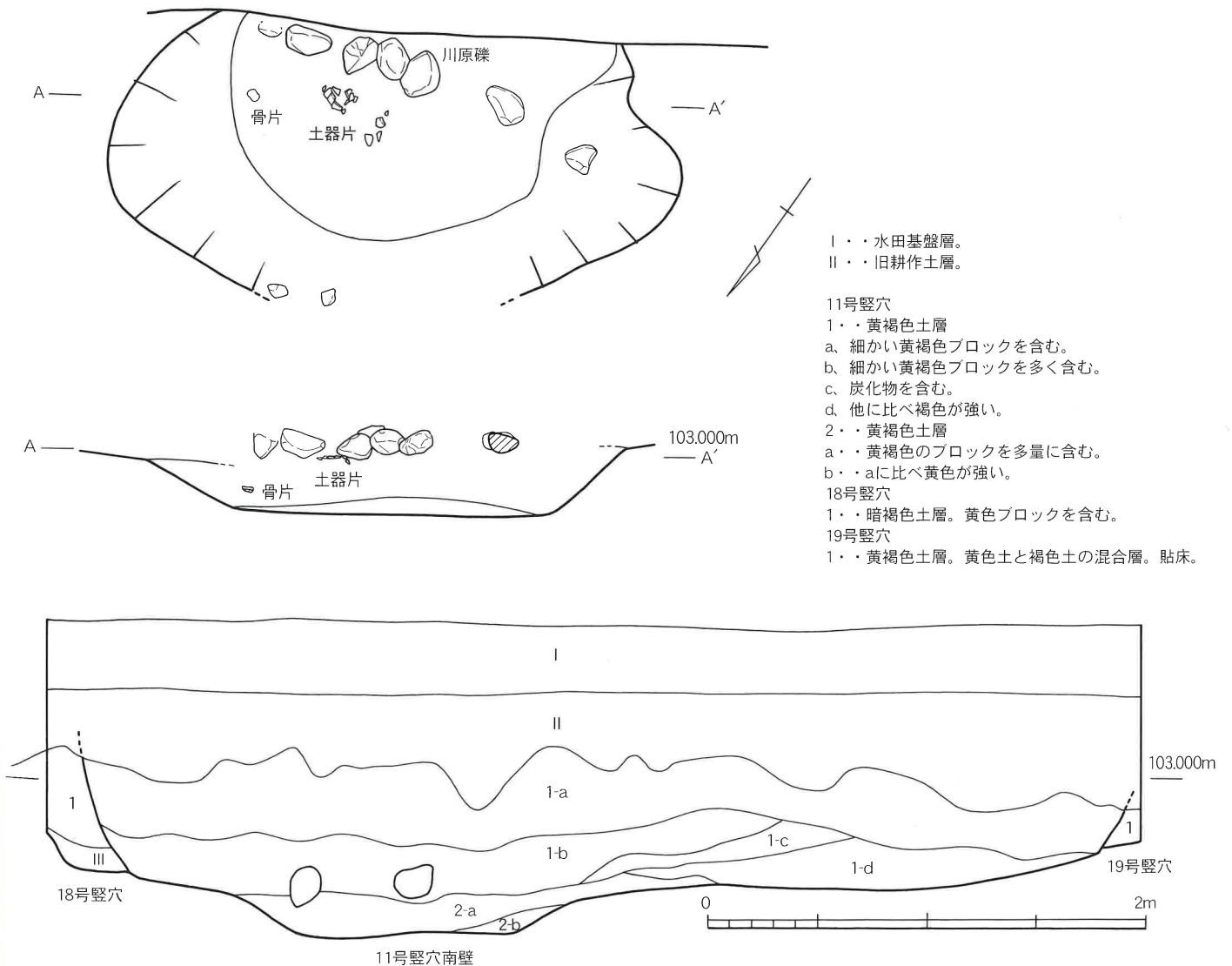
出土遺物（第17図）

1は口縁部を欠損した甕の頸部～胴部の破片である。表裏撫で調整で表面に煤が付着している。頸部径は16.2cm、胴部最大径は18.5cmである。

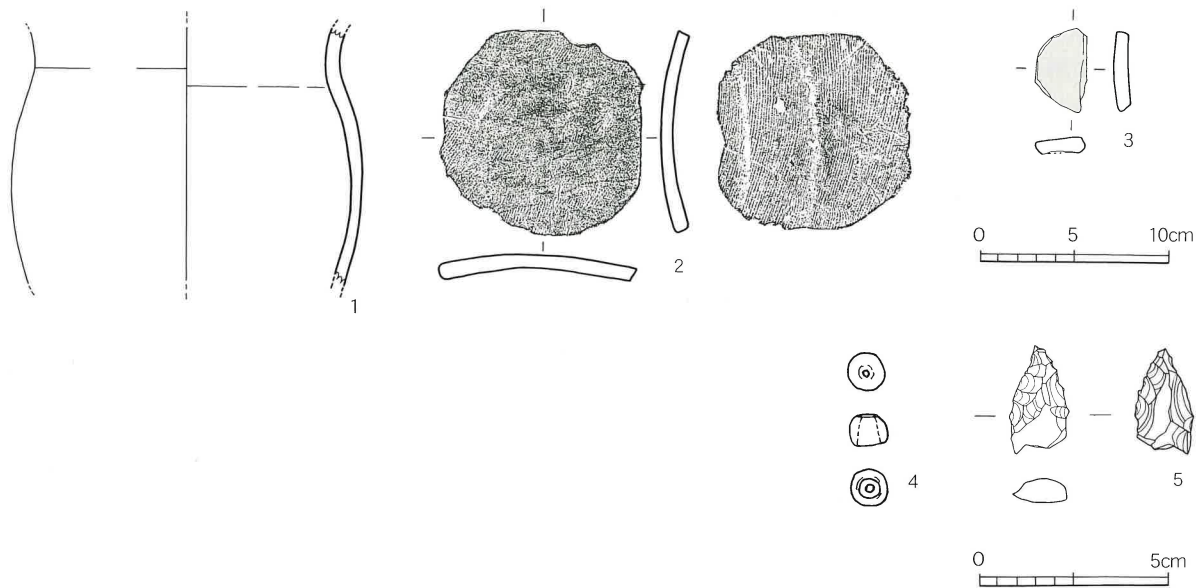
2は土器片を再利用した土器片加工品である。土器片の周縁を粗く研磨して略円形に整形したものである。直径10.6～10.9cm、土器片の厚さ0.6cm、重さ143.6gである。3は半月形をした丹塗土器片の加工品である。弧の部分は顕著な研磨が施され、弦の部分は打ち欠きである。長さ4.4cm、幅2.8cm、厚さ0.75cm、重さ10.3gである。

4は小玉である。玉の中央には直径0.2～0.6cmの穿孔がある。玉の直径1cm、長さ0.8cm、重さ1.5g。

5は石鏃である。基部は欠損している。現状の長さ2.6cm、幅1.5cm、厚さ0.6cm、重さ2.5gである。



第16図 折立遺跡11号竪穴内土坑実測図（1/30）



第17図 折立遺跡11号竪穴出土遺物実測図 (1/4、1/2)

### 12号竪穴 (第18図)

第2調査区の東端の北壁に位置する長方形プランの竪穴である。長軸を東西にとり、長径は5.2m、短径は3mである。確認面から床面までは約50cmである。長方形プランの中央部に小さな2本支柱が位置している。柱穴の深さは床面から20~30cmである。竪穴の南西には焼土が堆積していた。炉跡であろうか。竪穴の東壁には長径80cm、短径50cm、深さ10cmの歪な楕円状土坑が位置していた。覆土には少量の土器片が包含されていた。

### 出土遺物 (第19図)

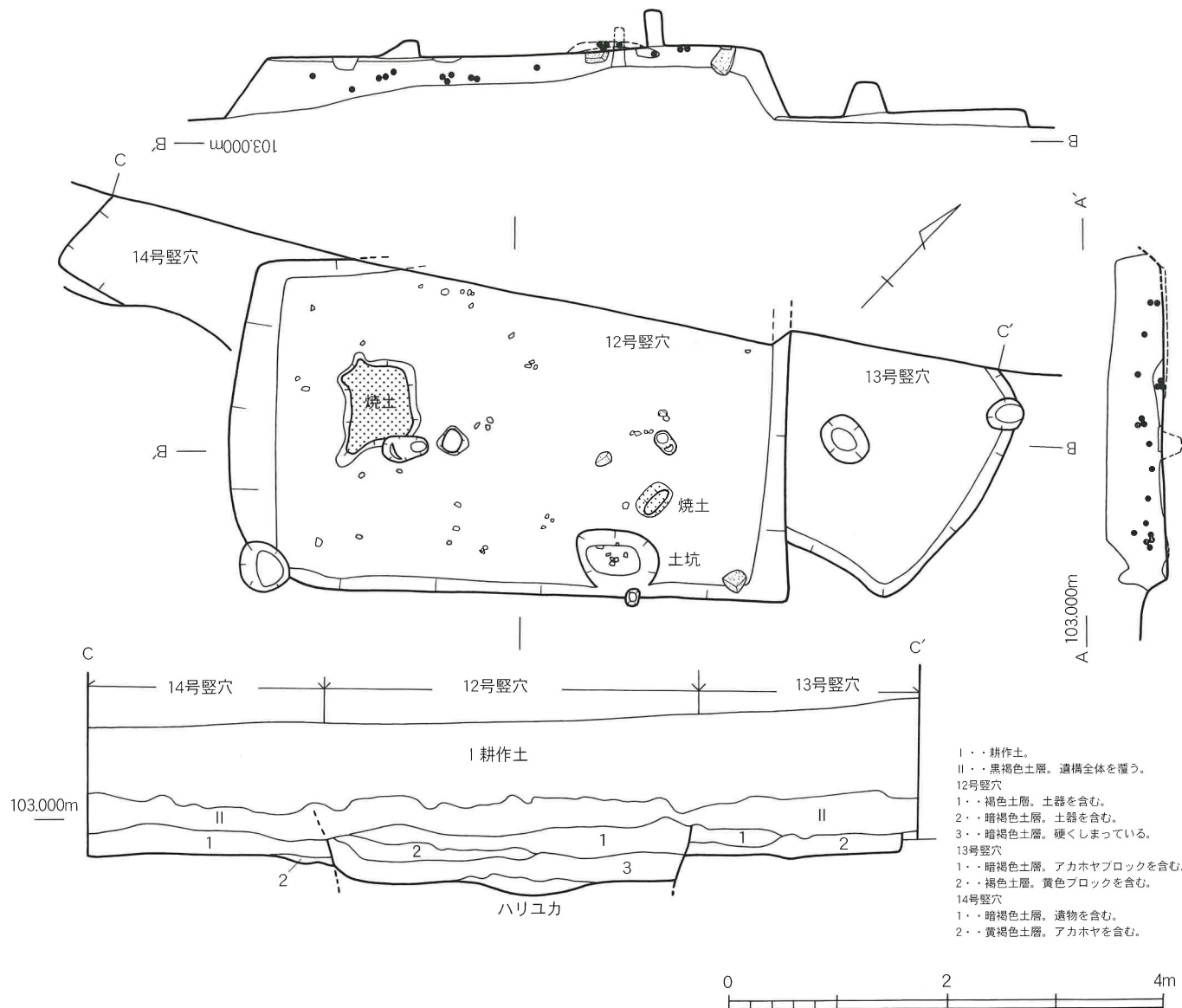
1は甕形土器の口縁部である。口縁は緩やかに外反し、口唇端部は丸く仕上げている。口径22.2cmで頸部径20.2cmである。表裏は刷毛目の上を撫で調整している。2は甕の底部である。底径5.6cm。表面は縦のヘラ磨き、内面は工具による撫で調整。

3~5は土器片を再利用した土器片加工品である。土器片の周縁を粗く打ち欠くか研磨して半月形や略円形に整形したものである。3は略半月形をした土器片加工品である。周囲は粗い研磨が施されている。長さ3.9cm、幅3.1cm、厚さ1cm、重さ14.6gである。4は周囲を打ち欠き略半円形に仕上げている。長さ4.7cm、幅4.2cm、厚さ0.9cm、重さ18.3gである。5は周囲を打ち欠き略円形に仕上げている。長さ4.8cm、幅4.5cm、厚さ1.1cm、重さ27.3gである。

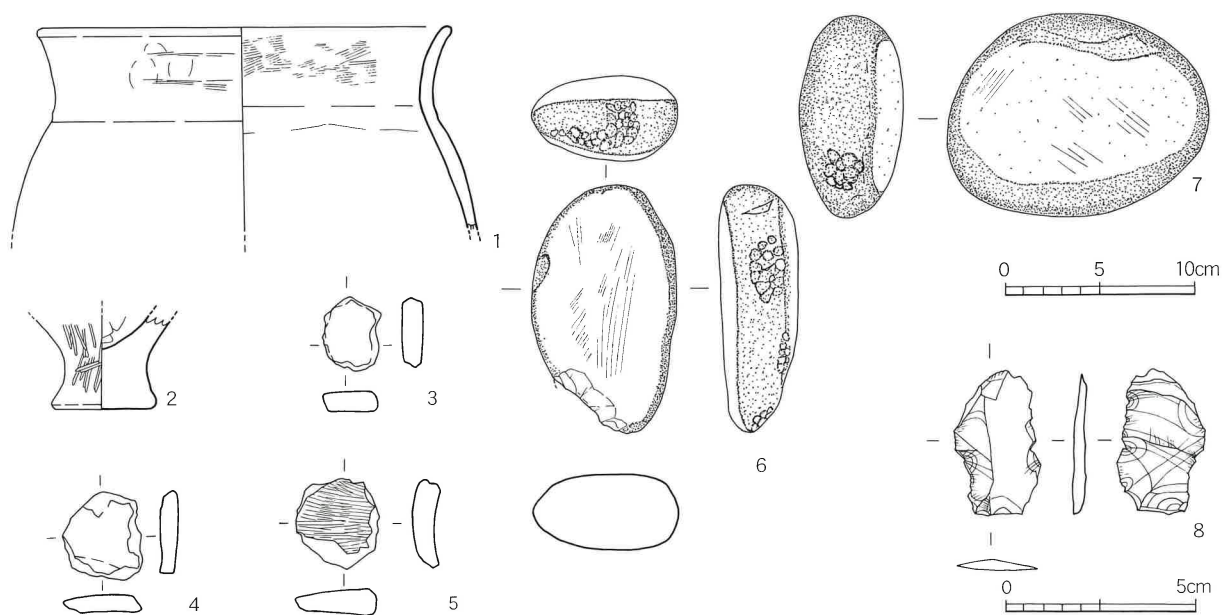
6は掌大の楕円状川原礫の磨石、敲石である。表裏面を磨石、長軸の両先端と側面の一部を敲石に使用。長さ13cm、幅7.7cm、厚さ3.9cm、重さ603.9gである。砂岩製。7は掌大の楕円状川原礫の磨石、敲石である。表面を磨石、側面の一部を敲石に使用。長さ13.7cm、幅10.6cm、厚さ5.5cm、重さ1098.9gである。砂岩製。8は使用痕のある縦長剥片である。長さ3.8cm、幅2.2cm、厚さ0.3cm、重さ3.2gである。チャート製。

### 13号竪穴 (第18図)

第2調査区の東端の北壁に位置する長方形プランの竪穴である。長軸を東西にとるが12号竪穴に切られており、長径は判らない。短径は2.4mである。確認面から床面までは約15cmである。柱穴の深さは床面から30cmである。



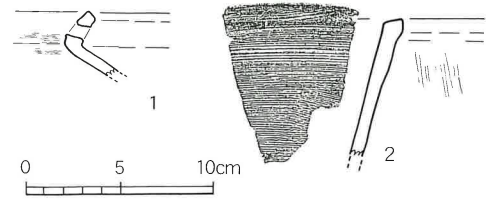
第18図 折立遺跡12~14号竖穴実測図 (1/60)



第19図 折立遺跡12号竖穴出土遺物実測図 (1/4、1/2)

### 14号竖穴（第18図）

第2調査区の東端の北壁に位置する方形プランの竖穴である。南西隅のコーナーのみの確認であり、詳細は判らない。



### 出土遺物（第20図）

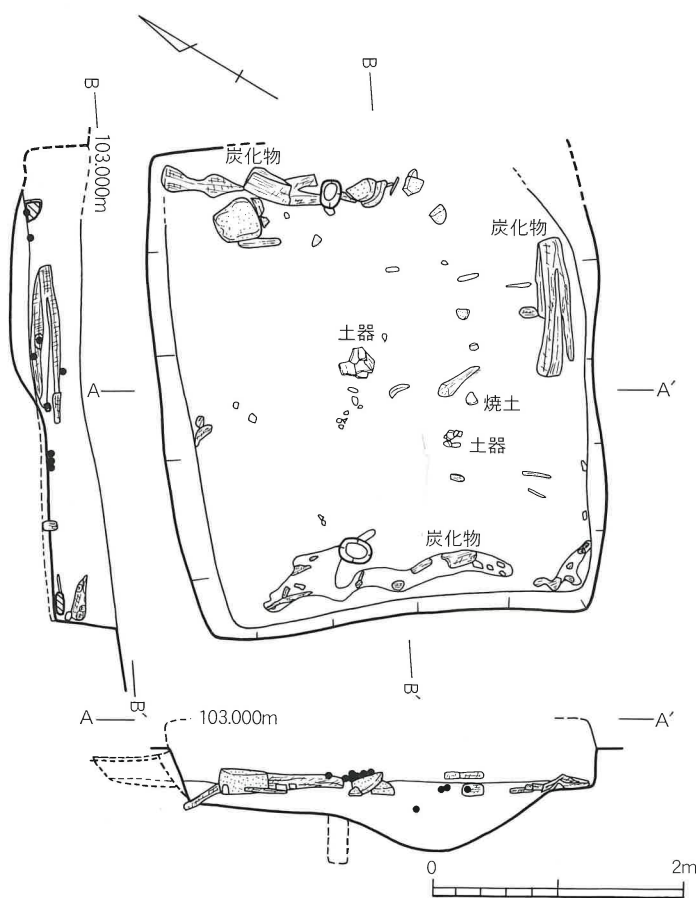
1は13号竖穴出土遺物である。口縁を「く」の字に曲げた鉢形土器である。穿孔している。

第20図 折立遺跡13(1)、14号(2)竖穴出土遺物実測図(1/4)

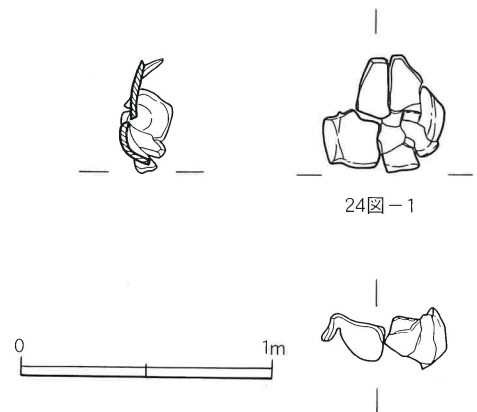
2は14号竖穴出土遺物である。中世の土鍋である。口縁部は肥厚し端部は平坦に収めている。内面は横刷毛、外面は縦刷毛の後撫で調整。外面に煤が付着している。

### 15号竖穴（第21図）

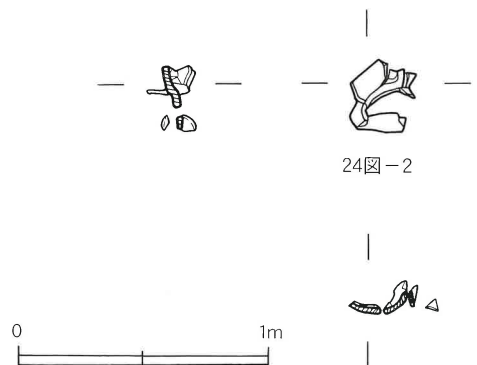
第2調査区の東端に位置する長方形プランの竖穴である。長軸を東西にとり、長径は3.9m、短径は3.6mである。確認面から床面までは約30~40cmであるが、竖穴の南側と東側では確認面から60~80cmの深さがある。長方形プランの短軸中央部付近に小さな2本主柱が位置している。柱穴の深さは床面から40cmである。竖穴の覆土には比較的大きな建築部材の炭化物や土器等が遺存しており、火災住居と推察できた。



第21図 折立遺跡15号竖穴実測図(1/60)



第22図 折立遺跡15号竖穴出土遺物(1/10)



第23図 折立遺跡15号竖穴出土遺物(1/10)

出土遺物（第22、23、24図）

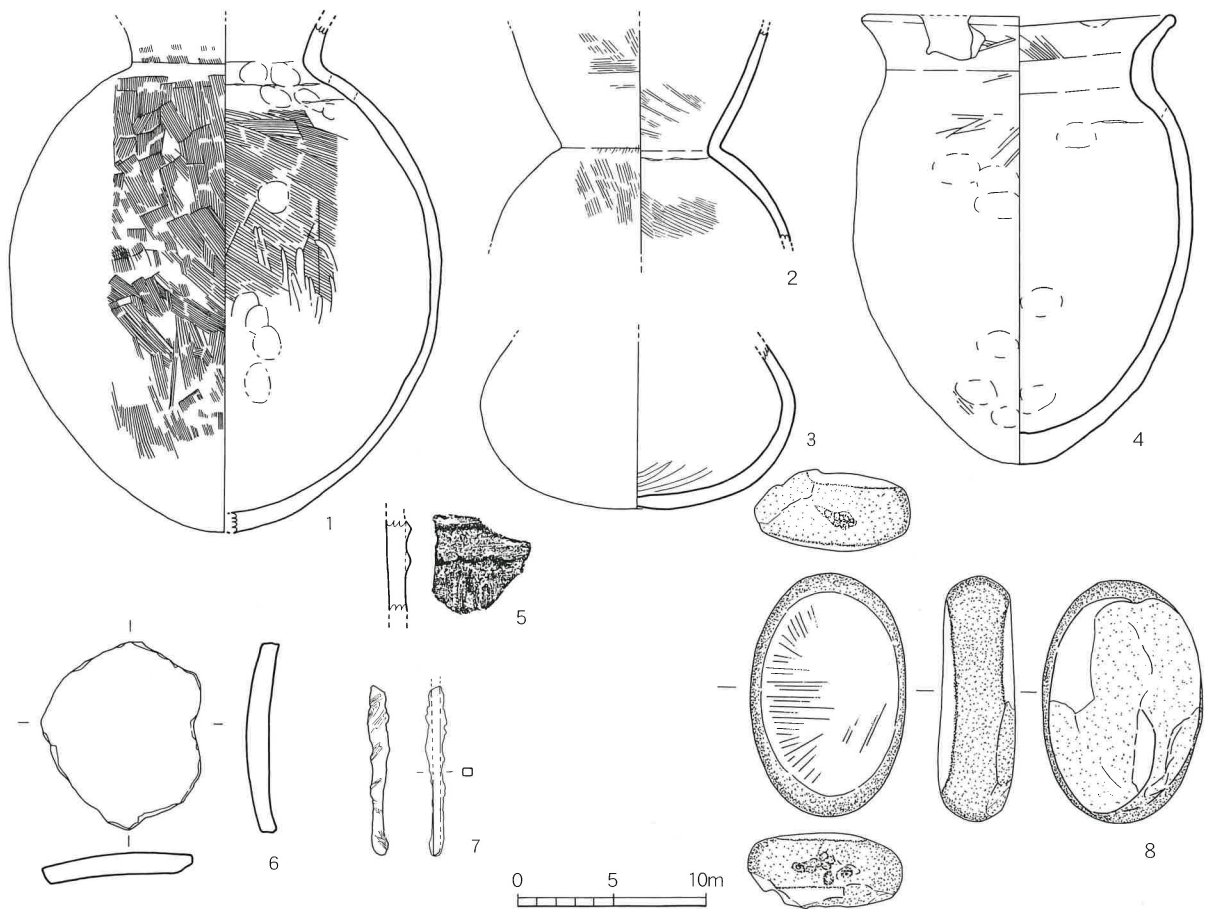
1は口縁部を欠損した壺の体部である。胴部が球形に誇張され、底部は丸底であるが底部器壁は厚い。表裏は刷毛目調整で内面に指頭痕やへら磨き、削り痕が残っている。頸部径は10cmで胴部最大径は23cmである。2は広口の壺である。頸部径は8.5cmで内湾しつつ大きく開く口縁部である。胴部は球形に丸く張る。表裏は刷毛目調整である。3は壺の体部である。胴部径は16.6cmで底部は丸く平らである。表裏は撫で調整で内面底部は施文工具による撫で調整。

4は甕形土器である。口縁部は外反し、胴部の張りがなく底部は尖り気味の丸底である。口径16.5cm、頸部14cm、胴部最大径17.8cm、器高23.6cmである。頸部と底部の器壁は厚い。表裏は刷毛目の後、指頭痕を残す撫で調整である。表面には煤、内面には焦げ目が残っている。5は甕形土器の胴部である。横に二条、縦に一条の断面三角突帯が施されている。

6は土器片加工品である。粗い研磨と打ち欠きによって略円形に整形されている。長さ10cm、幅8.5cm、厚さ1.2cm、重さ104.4gである。

7は棒状の鉄製品である。断面は角張った四角である。長さ8.9cm、幅0.6cm、厚さ0.4cm、重さ7.9gである。鉄鏝の基部であろうか。

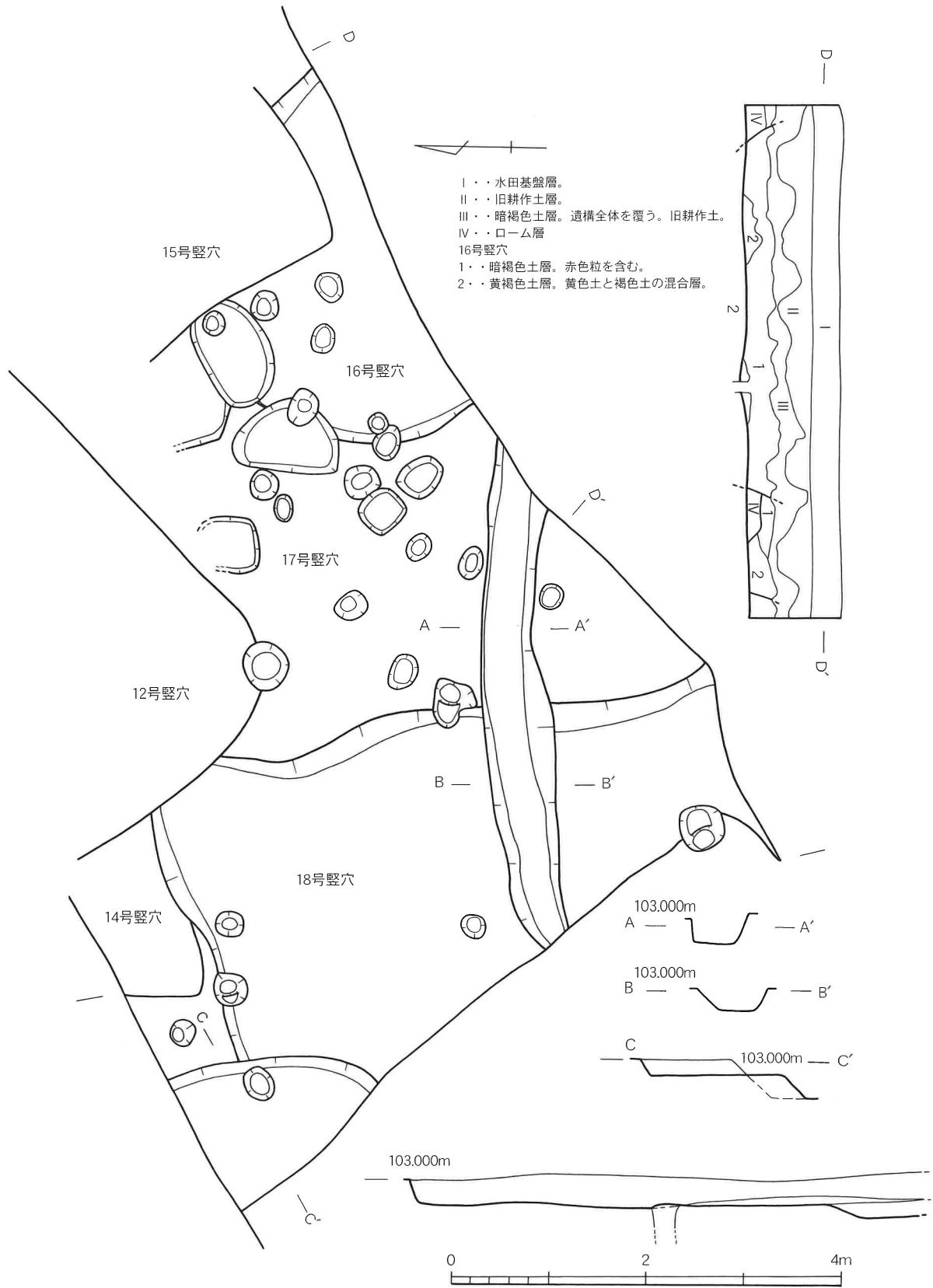
8は楕円状をした川原礫である。表裏は顕著な磨滅をしている。礫の両端部は敲打痕が残っている。長さ12.8cm、幅8.2cm、厚さ3.8cm、重さ638.7gである。



第24図 折立遺跡15号竪穴出土遺物実測図（1/4）

16号竖穴（第25図）

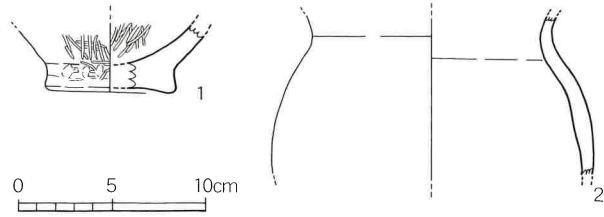
第2調査区の東端に位置する楕円形プランの竖穴である。長軸を東西にとり、長径は判らないが、短径は約3.7mである。確認面から床面までは約30~40cmであるが、柱穴等は判然としない。



第25図 折立遺跡16~18号竖穴実測図 (1/60)

### 17号竪穴（第25図）

第2調査区の東端に位置するが竪穴のプランは判らない。柱穴等は何本も確認できるが竪穴の柱穴は判然としない。竪穴を切って、東西に長く溝状遺構が確認できた。溝状遺構は確認面幅50～70cm、底部幅は30～40cm、深さ25～30cmを呈する。



第26図 折立遺跡17(1)、18号(2)竪穴出土遺物実測図（1/4）

### 出土遺物（第26図-1）

17号竪穴から平底の底部が出土している。底径7cmで表裏へラ磨き調整。

### 18号竪穴（第25図）

第2調査区の東端に位置する方形プランの竪穴である。竪穴の柱穴は判然としない。竪穴プランも曲線を呈しており規模は確認できない。17号竪穴から続く、東西に長い溝状遺構が確認できた。

### 出土遺物（第26図-2）

18号竪穴から外反口縁の甕形土器の頸部から胴部の破片が出土している。頸部径12.7cm、胴部最大径17cmである。表裏撫で調整。表面に煤が付着している。

### 19号竪穴（第27図）

第2調査区の中央部に位置する方形プランの竪穴である。長軸を東西にとり、長径は7.5m、短径は7.4mの略方形である。確認面から床面までは約20～40cmである。長方形プランの中央部に小さな5本柱が位置しているが本来6本と推測できる。11号竪穴と20号竪穴とに切られる関係にある。

### 出土遺物（第28図）

1は外反口縁部の甕形土器である。表裏は刷毛目調整を施す。口径13.2cm、頸部径10cmである。

2は砥石である。欠損面を除く5面を使用している。現状で長さ5.6cm、幅4.3cm、厚さ1.5cm、重さ68.7gである。頁岩製。3は安山岩製の石皿である。扁平な自然礫の中央部が心持ち窪んだ状態であり使用痕を残している。長さ22.7cm、幅16.1cm、厚さ5.3cm、重さ2900gである。

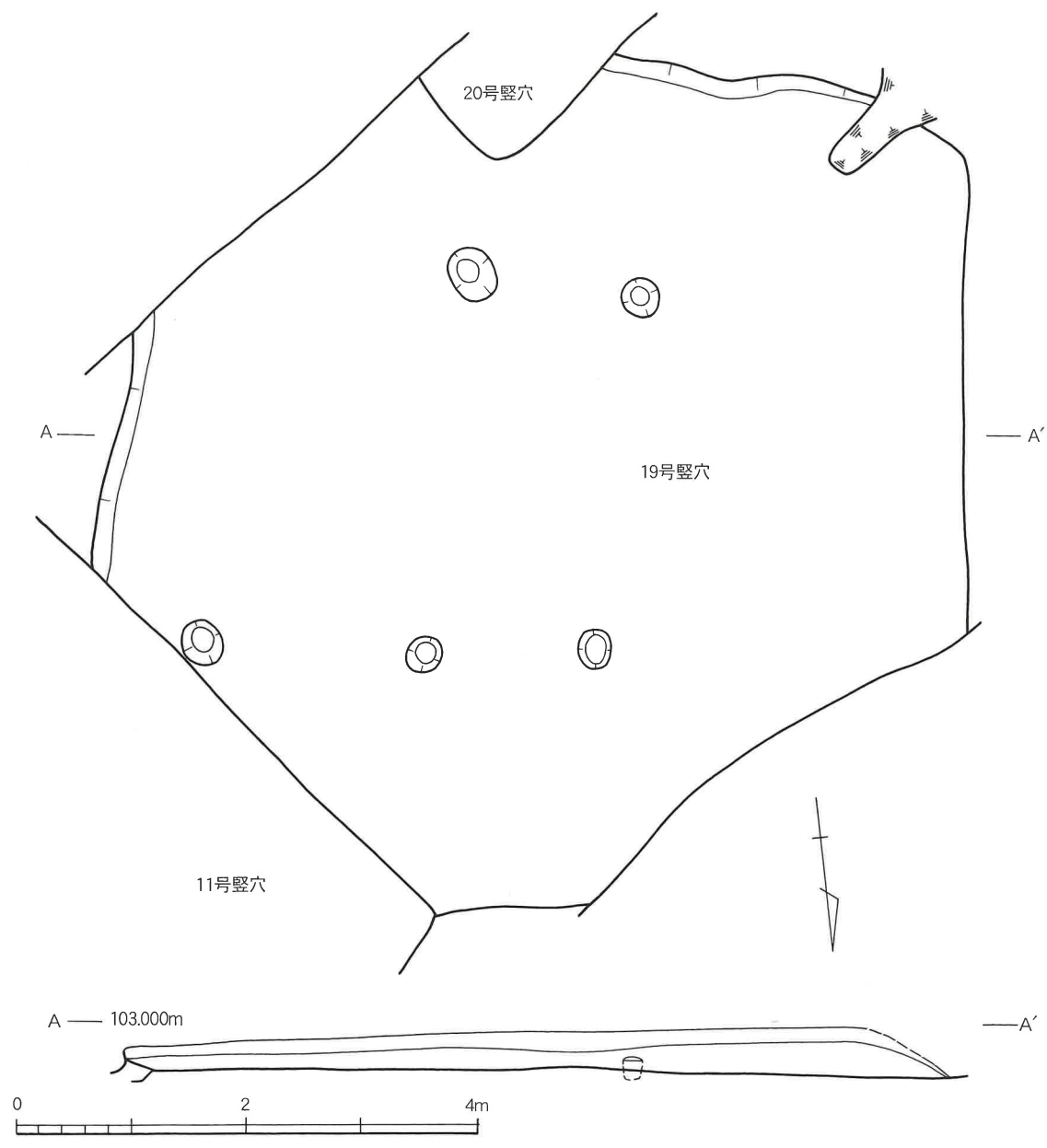
### 20号竪穴（第29図）

第2調査区の中央部の南壁に位置する方形プランの竪穴である。大半は調査区外に位置している。竪穴の北西隅と北東隅の二箇所のコナリーが検出されている。確認できる一辺は約4mであり方形を呈する。竪穴の中央部には一本の柱穴が検出されている。竪穴の確認面から床面までは約20cmである。

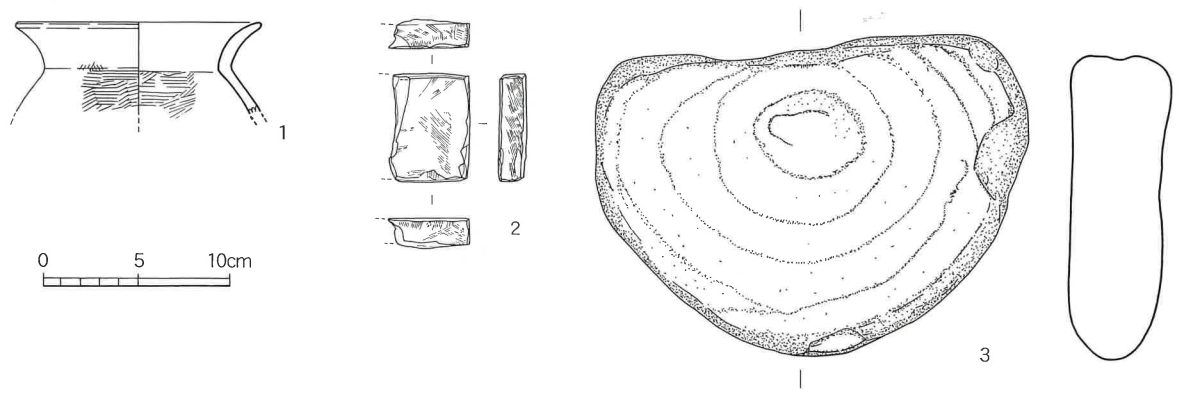
### 21号竪穴（第30図）

第2調査区の中央部のやや西に位置する方形プランの竪穴である。竪穴の北西隅のコナリーが検出されている。確認できる一辺は約4.1mであり方形を呈する。竪穴内には何本かの柱穴が検出されているが判然としない。竪穴の確認面から床面までは約15～20cmである。

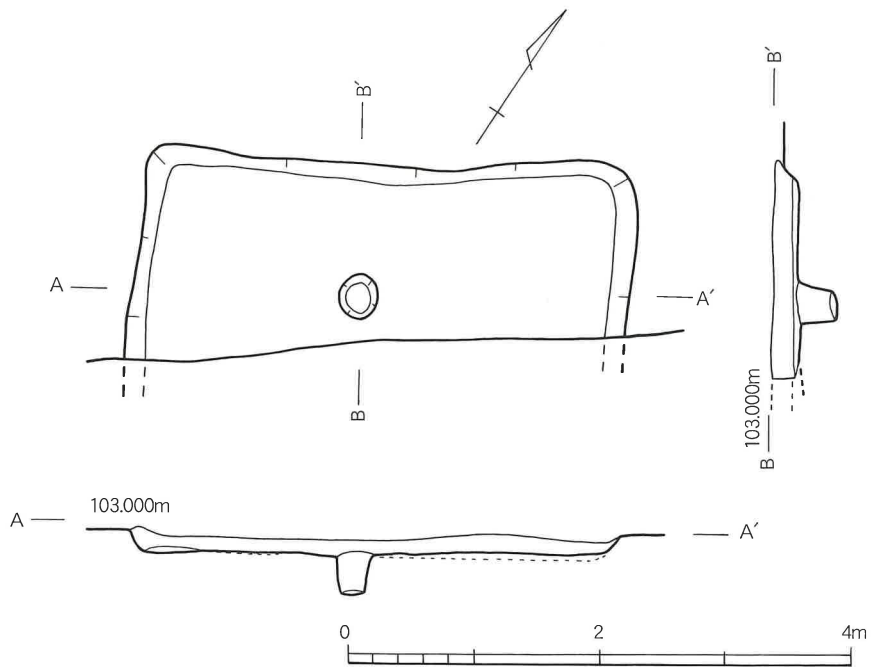




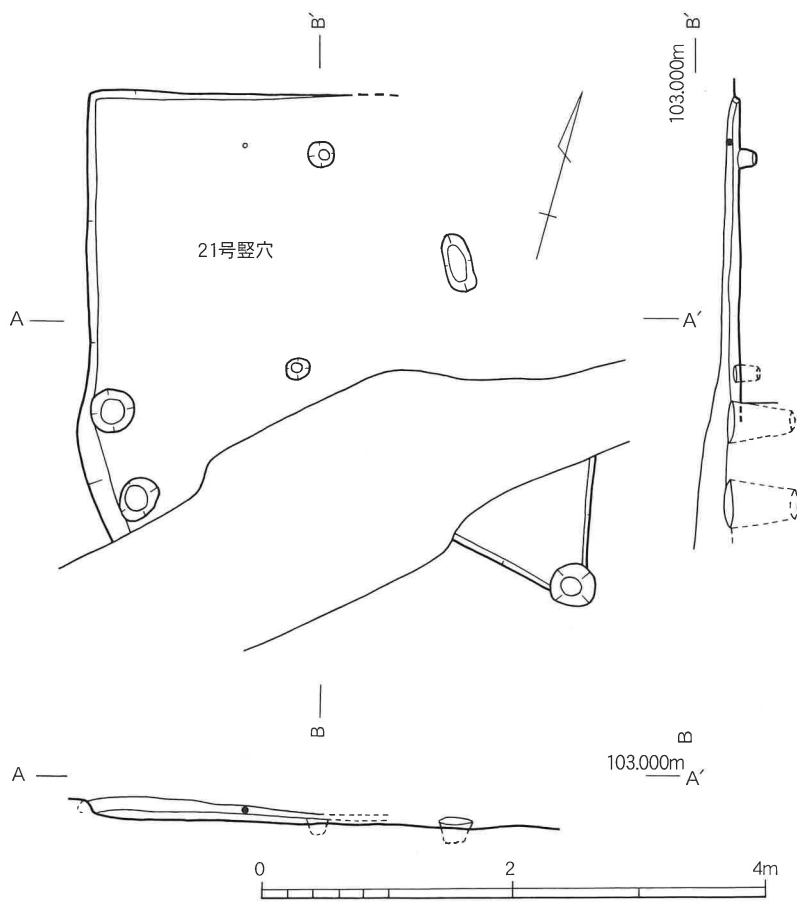
第27图 折立遺跡19号竖穴実測図 (1/60)



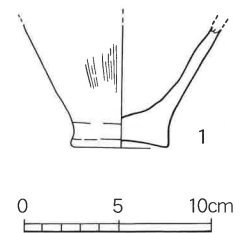
第28图 折立遺跡19号竖穴出土遺物実測図 (1/4)



第29图 折立遺跡20号竖穴実測図 (1/60)



第30图 折立遺跡21号竖穴実測図 (1/60)



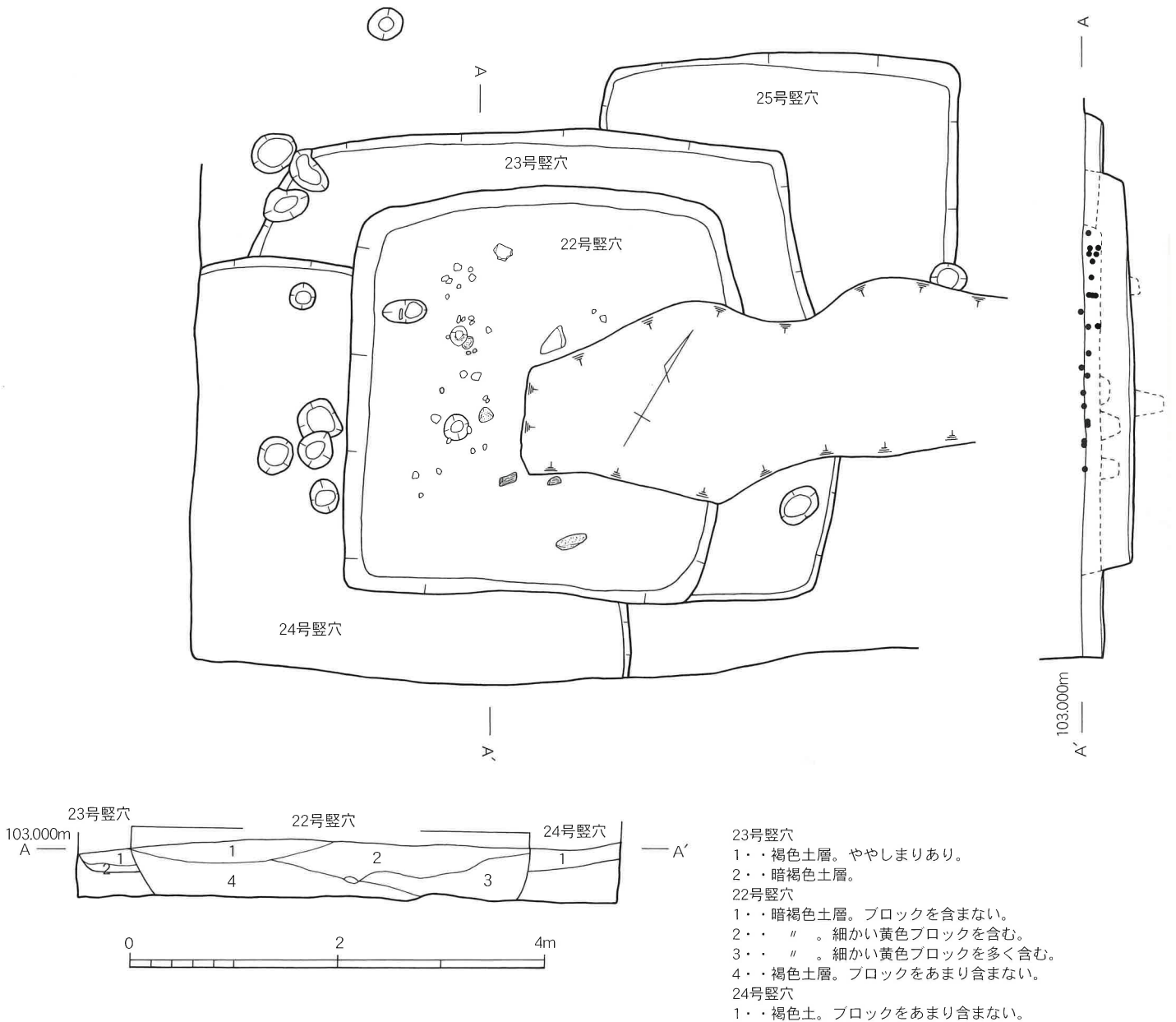
第31图 折立遺跡21号竖穴出土遺物実測図 (1/4)

出土遺物（第31図）

1は底部の破片である。表面は刷毛目調整に撫で調整。内面は撫で調整で焦げが付着している。やや上げ底の平底である。底部径5.3cm。

22号竪穴（第32図）

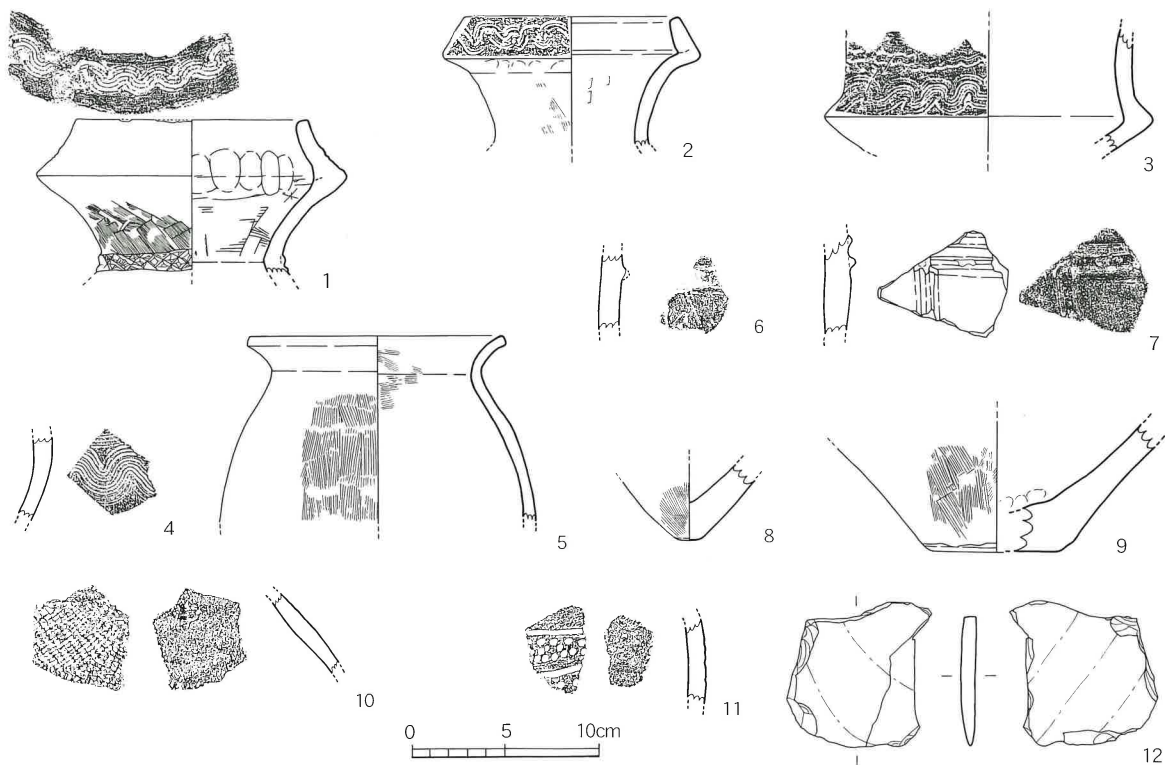
第2調査区の西端に位置する長方形プランの竪穴である。長軸を南北にとり、長径は4m、短径は3.8mの略方形である。確認面から床面までは約50cmである。長方形プランの中央部西寄りに2本の柱穴が位置しているが、本来4本主柱と推測できる。23号竪穴と24号竪穴を切る関係にある。



第32図 折立遺跡22～25号竪穴実測図（1/60）

### 出土遺物（第33図）

1は壺形土器の複合口縁部である。表面には一条の櫛描波状文が廻る。頸部の突帯には斜め格子目文が施文されている。表面は刷毛目調整、内面は指頭痕を残す撫で調整を施す。口径12.4cm、口縁最大径16.6cm、頸部径10cmである。2は壺形土器の複合口縁部である。複合部の立ち上がりはやや低く、頸部までがやや長い。表面には一条の櫛描波状文が廻る。表面は刷毛目調整、内面は撫で調整を施す。口径11.6cm、口縁最大径13.8cm、頸部径8.2cmである。3は壺形土器の複合口縁部である。複合部の立ち上がりは垂直に高い。表面には変化した二条の櫛描波状文が廻る。表裏面は撫で調整を施す。口縁最大径17.6cmである。4は甕の上半部である。上部に横走櫛描、下部に櫛描波状文が施文されている。5は外反口縁の甕形土器である。表裏面は刷毛目調整、内面は撫で調整を施す。口径13.4cm、口縁最大径13.8cm、頸部径11.1cm、胴部最大径16.7cmである。6、7は断面三角形の突帯文を施文する甕形土器である。7は縦一条、横二条に施文されている。表裏撫で調整。8、9は底部である。8は甕形土器の尖底に近く、表面刷毛目、内面撫で調整。9は壺形土器の平底である。底径6.6cm。表面刷毛目、内面撫で調整。10、11は縄文土器である。10は格子目のような縄文施文。11は区画線内列点文土器である。12は扁平打製石斧である。長さ6.9cm、幅6.1cm、厚さ0.7cm、重さ62.3gである。



第33図 折立遺跡22号竪穴出土遺物実測図（1/4）

### 23号竪穴（第32図）

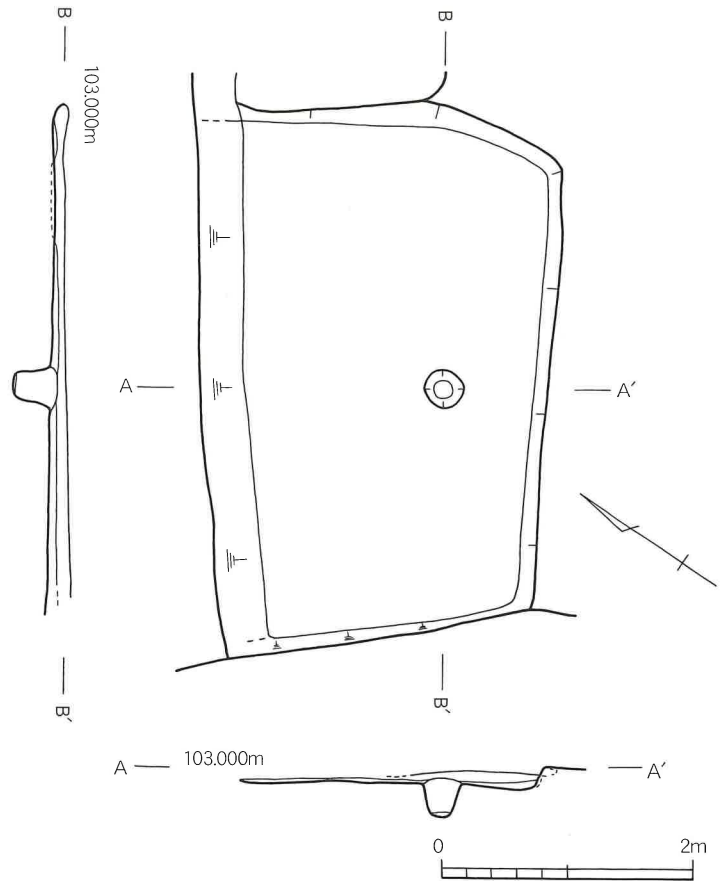
第2調査区の西端に位置する長方形プランの竪穴である。長軸を東西にとり、長径は約5.3m、短径は4.4mの長方形である。確認面から床面までは約20cmであるが柱穴は判らない。23号竪穴の中央部は22号竪穴、24号竪穴に切られている。

### 24号竪穴（第32図）

第2調査区の西端に位置する竪穴である。胴張りの竪穴である。平面プランや柱穴も判らない。22号竪穴に切られる関係にある。

25号竪穴（第32図）

第2調査区の西端に位置する方形プランの竪穴である。長軸か短軸か判らないが一辺の長さは3.5mである。柱穴も判らない。22号竪穴、23号竪穴に切られる関係にある。



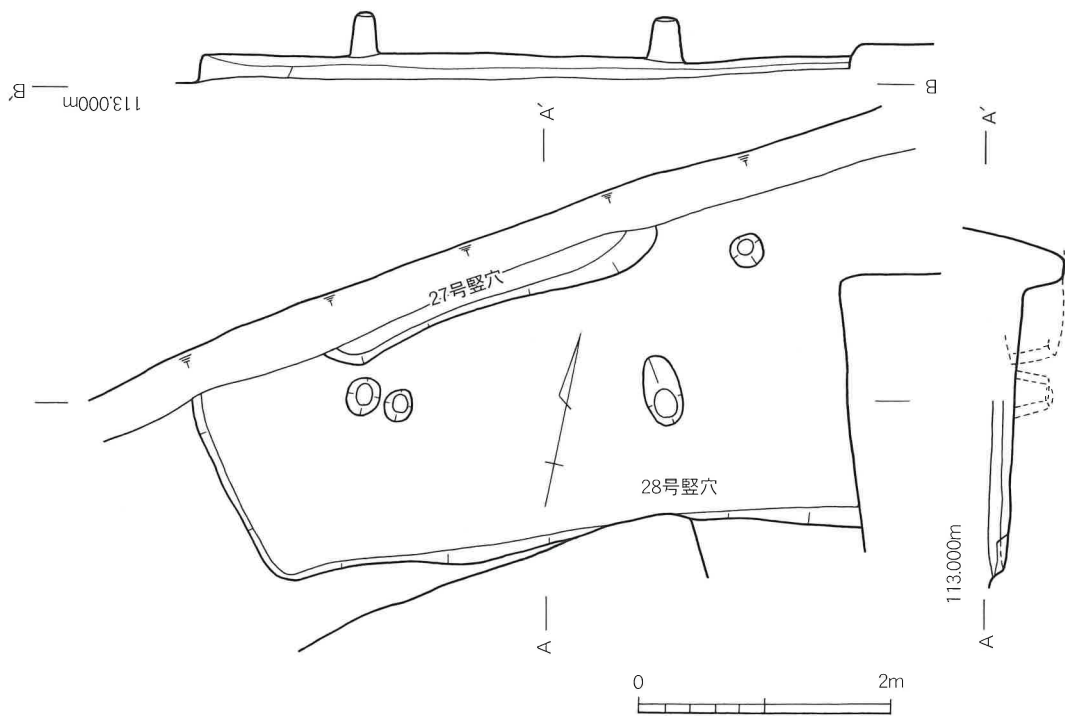
26号竪穴（第34図）

第2調査区の西端の北壁側に位置する方形プランの竪穴である。長軸か短軸か判らないが一辺の長さは4.3mである。柱穴は竪穴の中央南に一本確認されている。

27号竪穴（第35図）

第2調査区の西端の北壁側に位置する方形プランの竪穴である。長軸か短軸か判らないが一辺の長さは4.3mである。柱穴は竪穴の中央南に一本確認されている。

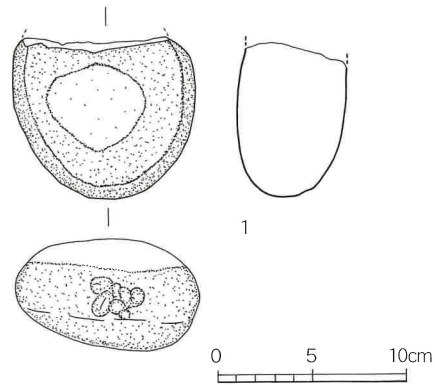
第34図 折立遺跡26号竪穴実測図（1/60）



第35図 折立遺跡27、28号竪穴実測図（1/60）

### 出土遺物（第36図）

1は円形の川原石を利用した磨石・敲石である。平坦面を磨石に側片端部を敲石に使用している。一部欠損している。現状での長さ8.6cm、幅9.7cm、厚さ5.6cm、重さ660gである。



### 28号竪穴（第35図）

第2調査区の西端の北壁側に位置する方形プランの竪穴である。竪穴の南西コーナーを確認している。柱穴は数本確認されているが、竪穴の南壁に沿う2本がこの竪穴の支柱の一部であろう。

第36図 折立遺跡27号竪穴出土遺物実測図（1/4）

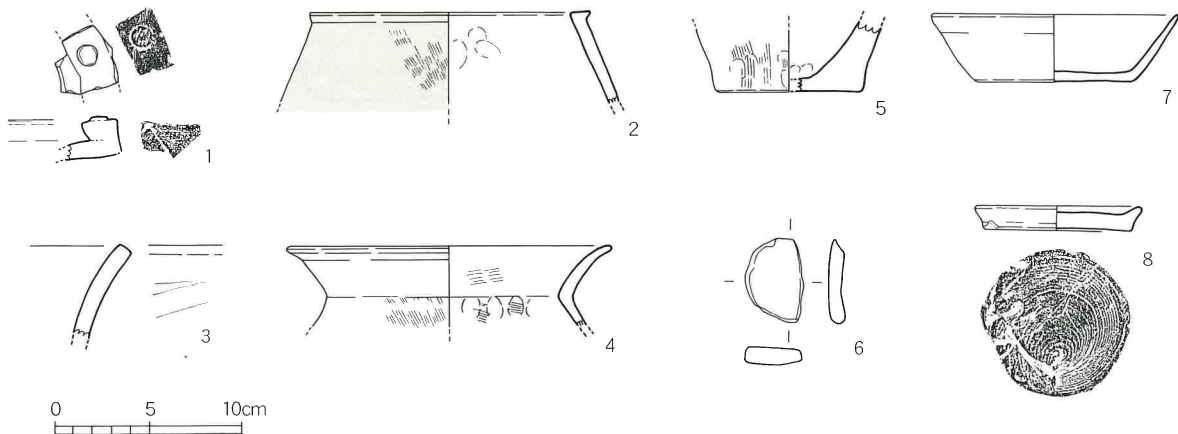
### 第2調査区出土遺物（第37図）

1は立ち上がりの低い壺形土器の複合口縁部である。広い口唇部には円形浮文、外側にはヘラ状工具による連続山形文が刻まれている。2は内傾する口縁部の甕形土器である。口唇部は突帯状に張出している。表面は斜め刷毛目、内面は指頭痕のついた撫で調整。表面は丹塗である。3は甕形土器の外反口縁部である。表裏は刷毛目調整で内面は指頭による撫で調整。口径17.3cm、頸部径13cmである。4は表裏撫で調整した甕形土器の口縁部。5は平底の底部である。表面は刷毛目、底の表面と内面は撫で調整。底径は7.6cmである。

6は半月形した土器片加工品である。周囲は顕著な研磨痕を残している。長さ4.4cm、幅3.1cm、厚さ0.7cm、重さ11.2gである。

7は須恵器の坏である。口縁部は底部から直線的に斜めに延びる。口径13cm、底径8.2cm、器高3.6cmである。表裏撫で調整で底部は回転ヘラ切りである。

8は土師器の皿である。口縁部は底部から僅かに延びる。口径8.9cm、底径7.9cm、器高1.4cmである。表裏撫で調整で底部は回転糸切りである。

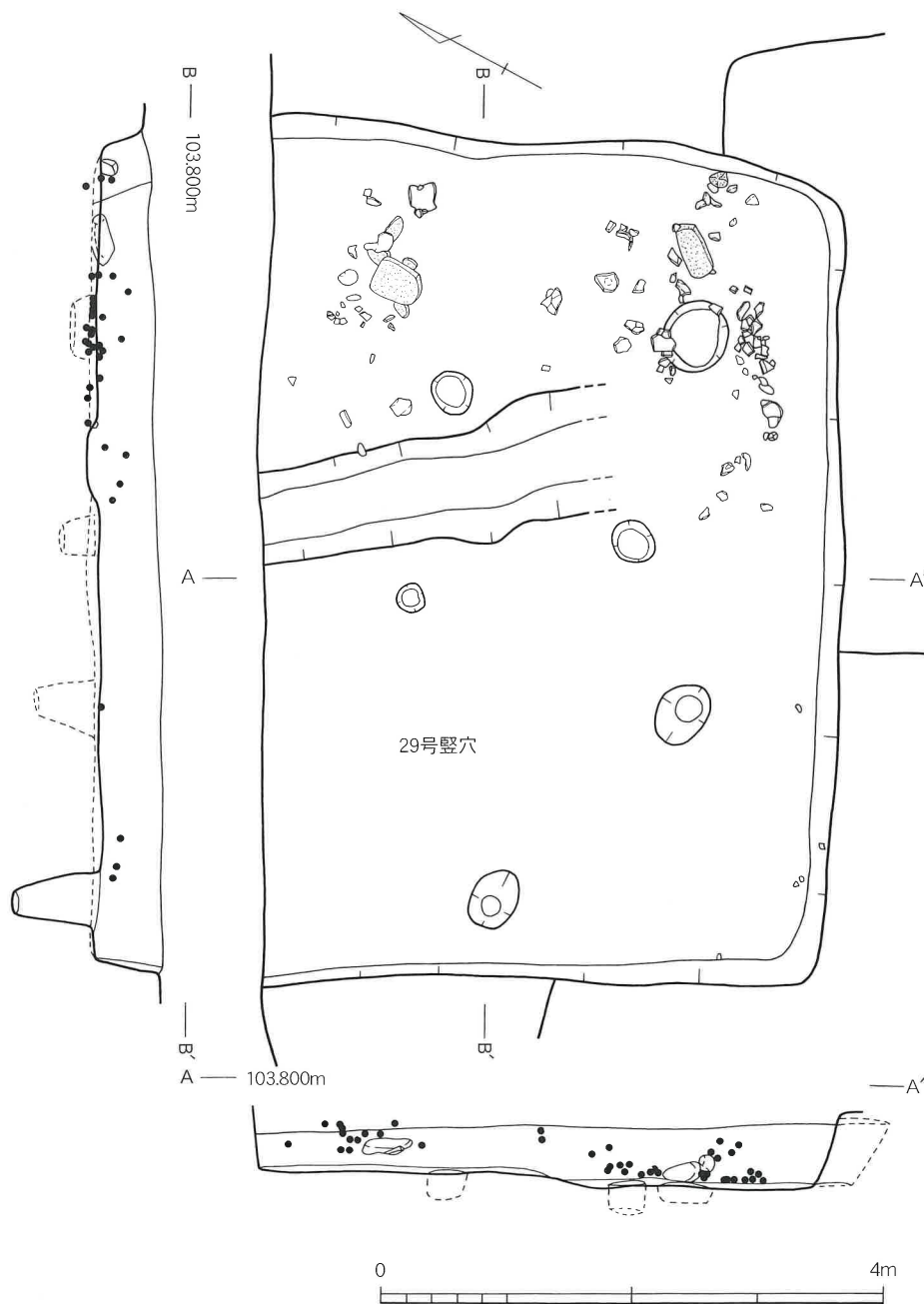


第37図 百枝折立遺跡第2調査区出土遺物実測図（1/4）

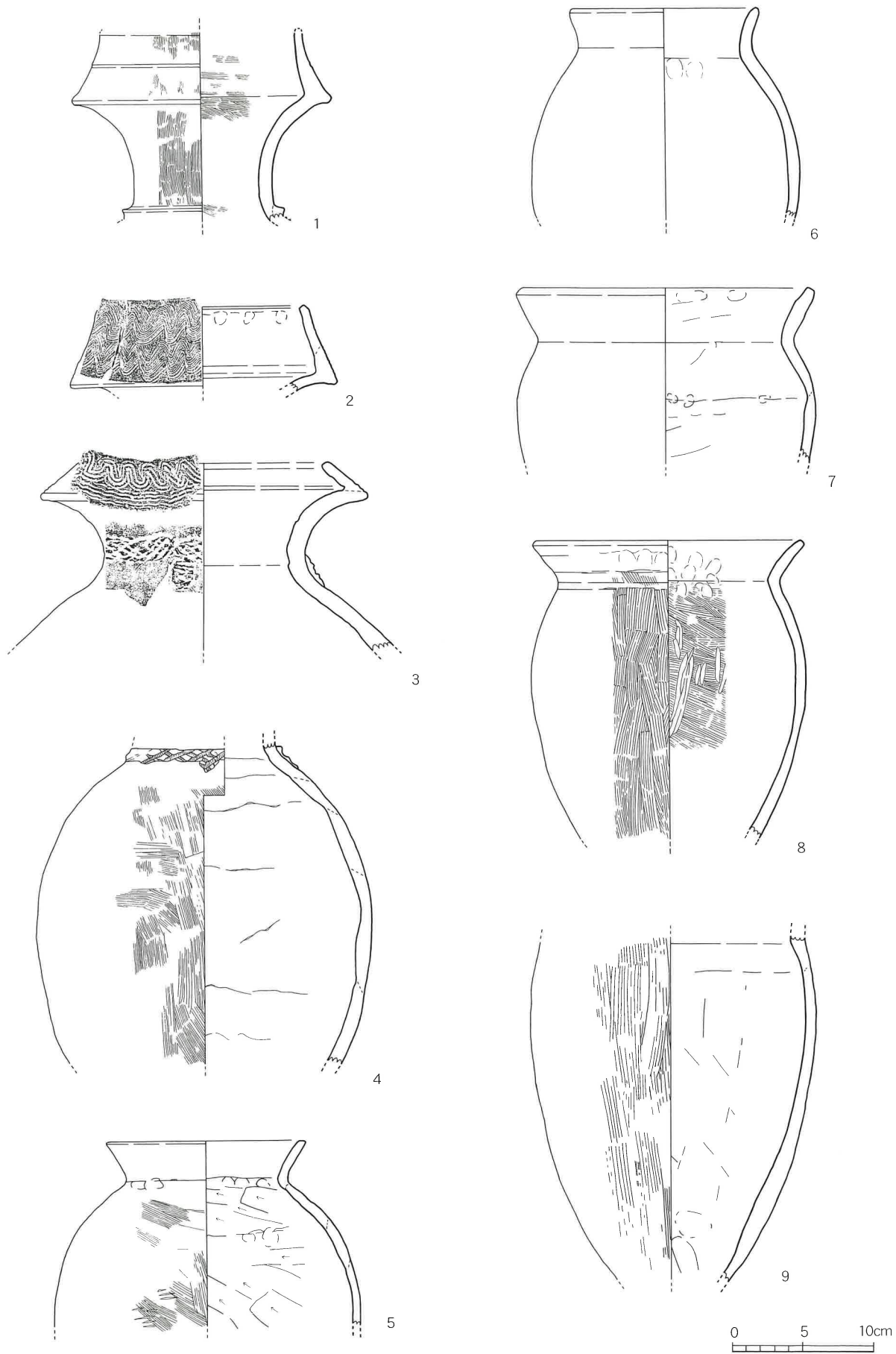
### 第3節 第3調査区

#### 29号竪穴 (第38図)

第3調査区の西端の北壁に位置する長方形プランの竪穴である。北半部は調査区外に遺存している。長軸か短軸か判らないが、一辺は6.5~6.9mである。確認面から床面までは約30~50cmである。竪穴の内側には何本かの柱穴が遺存しているが、竪穴に伴う柱穴を確認できない。覆土には数多くの土器片が包含されていた。炉跡等は確認できなかった。竪穴中央部には溝状遺構が切り合い関係を保って遺存している。

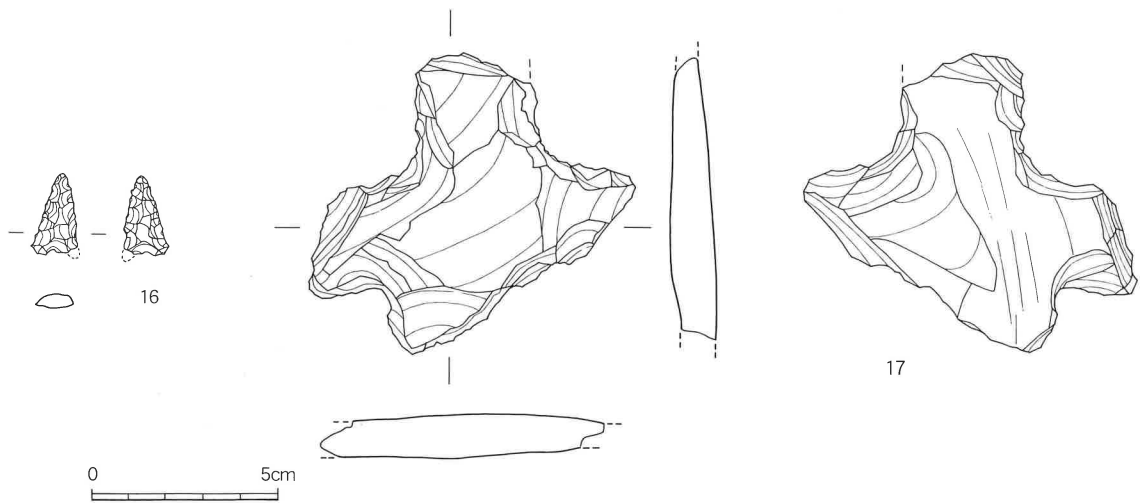
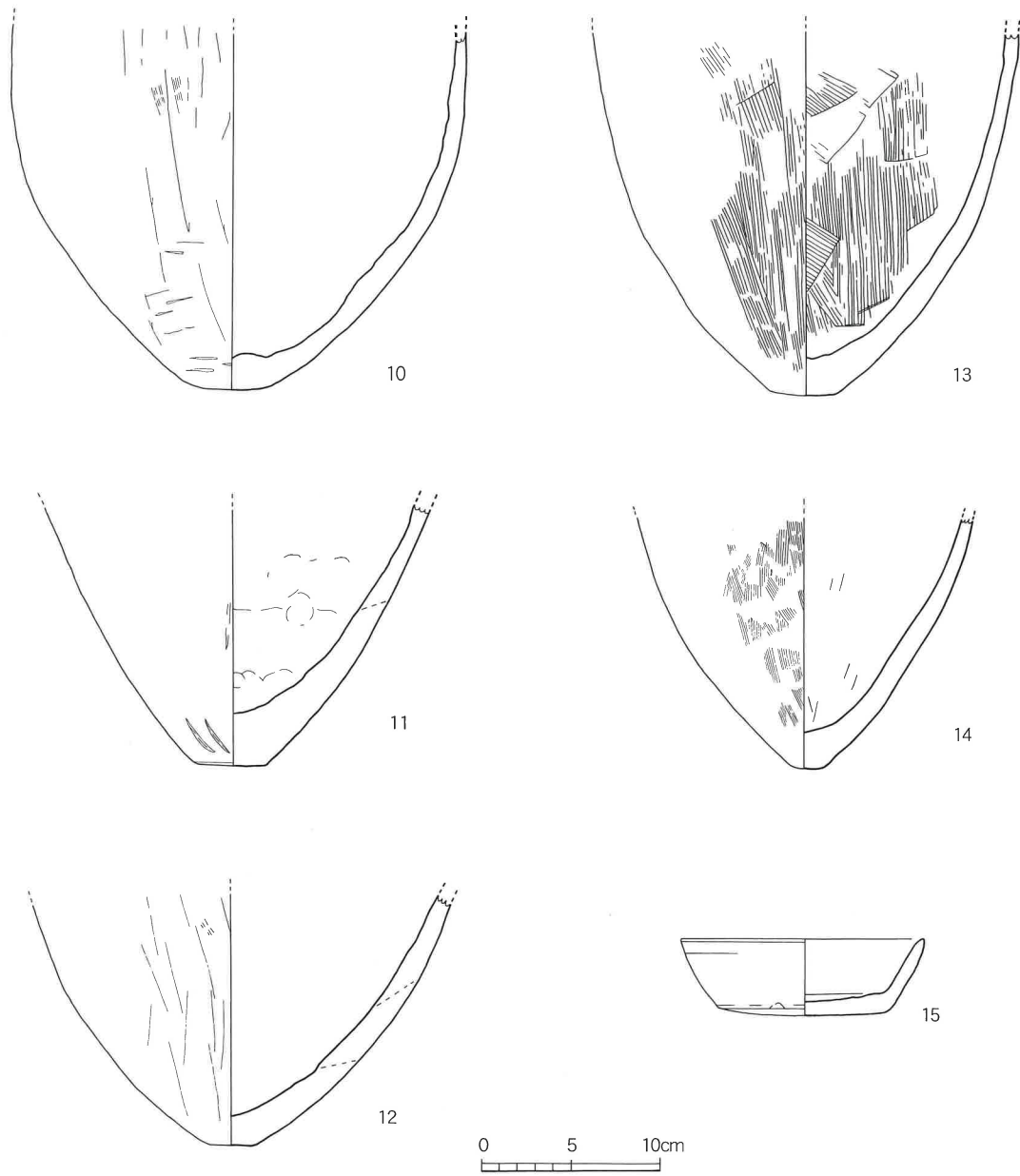


第38図 折立遺跡29号竪穴実測図 (1/60)



第39图 折立遺跡29号竖穴出土遺物実測図1 (1/4)





第40图 折立遺跡29号竖穴出土遺物実測図2 (1/4、1/2)

### 出土遺物（第39、40図）

1～3は複合口縁の壺形土器である。1は「く」の字の口縁部である。外側には一条の沈線が廻っている。頸部には断面三角突帯が一条確認できる。表面は縦、内面は横の刷毛目調整。口径14.5cm、口縁屈曲部の最大径18.6cm、頸部径9.9cmである。2は櫛描波状文が上下2段に施文されている。内面は横撫でで指頭痕を残す。口径14.8cm、口縁屈曲部の最大径19.1cmである。3は口縁部が低く立ち上がるもので、外側には波状と小波状の二条の櫛描波状文が廻っている。頸部には斜め格子文の突帯が一条ネクタイ状に確認できる。表裏ともに撫で調整。内面には指頭痕を残すが剥離が顕著である。口径17cm、口縁屈曲部の最大径23.4cm、頸部径19.3cmである。4は頸部～胴部の破片である。頸部の帯状突帯に斜め格子目文を施す。頸部径は10cmで胴部最大径は24cmである。表面は刷毛目調整。5～8は甕形土器の口縁部である。5は断面「く」の字に屈折し、胴部が球形に誇張された甕形土器である。口唇を平坦に撫で調整。表面は刷毛目調整、内面はヘラ削りが顕著である。口径14.3cm、頸部径11.6cm、胴部最大径22cmである。6は緩い外反口縁で表裏は撫で調整。口径13.4cm、頸部径12.3cm、胴部最大径19cmである。7は口縁部の器壁がやや肥厚する外反口縁の甕である。表裏は撫で調整を施す。口径21.2cm、頸部径18.2cm、胴部最大径21.2cmである。8は大きく外反する口縁部である。口縁部の表裏は指頭状圧痕の残る撫で調整。表裏は刷毛目調整で内面に部分的な磨きが入る。口径19.3cm、頸部径15.7cm、胴部最大径19.5cmである。9は甕の胴部である。表面は縦の刷毛目、内面は縦の撫で調整。胴部最大径は20.4cmである。10～14は胴部～底部の破片である。10は胴部最大径12.8cmで、底径3.4cmの丸平底である。表面に一部タタキ痕跡が残るが施文工具で撫で調整している。11は尖底に近い底径3.8cmの平底である。表面に一部タタキ痕跡が残るが表裏撫で調整。12は尖底に近い底径2.4cmの底部である。表面は施文工具で撫で調整している。内面は剥離痕が認められるが撫で調整。13は尖底に近い丸底で底径3.2cmである。底部の器壁は厚く表裏は刷毛目調整。14は尖底部である。表面は縦の刷毛目調整、内面は工具による撫で調整を施す。内面には焦げが付着している。

15は土師器の坏である。口縁部は丸みを帯びた底部から斜めに立上る。口唇部は尖り気味である。口径13.6cm、底径9.7cm、器高4.2cmである。底部は回転ヘラ切りである。

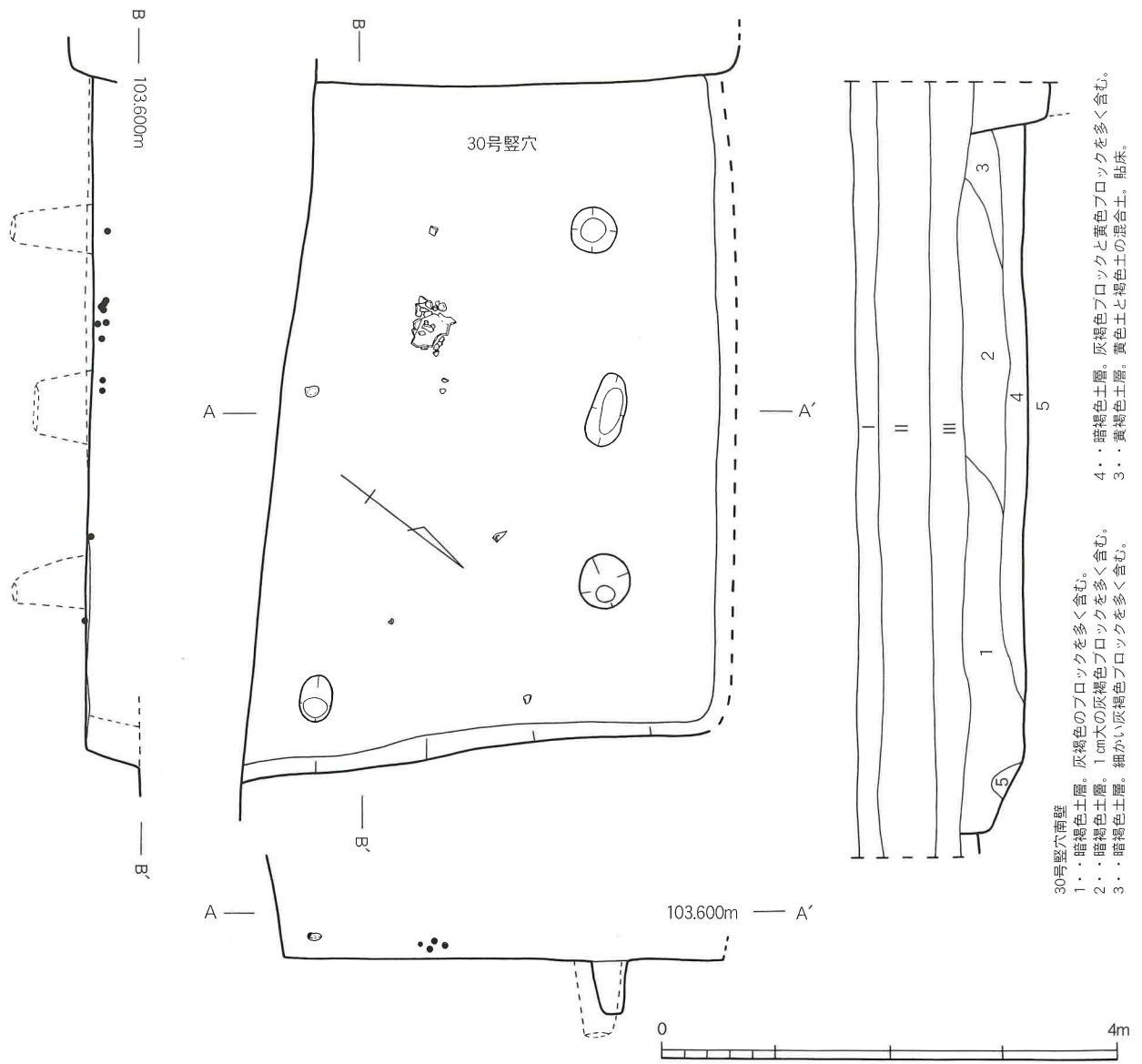
16は姫島産黒曜石の凹基式石鏃である。鏃の耳は両方欠損している。長さ2cm、幅1cm、厚さ0.4cm、重さ0.6gである。17は結晶片岩製の十字形石器である。長さ7.5cm、幅8.1cm、厚さ1.1cm、重さ72.6gである。

### 30号竪穴（第41図）

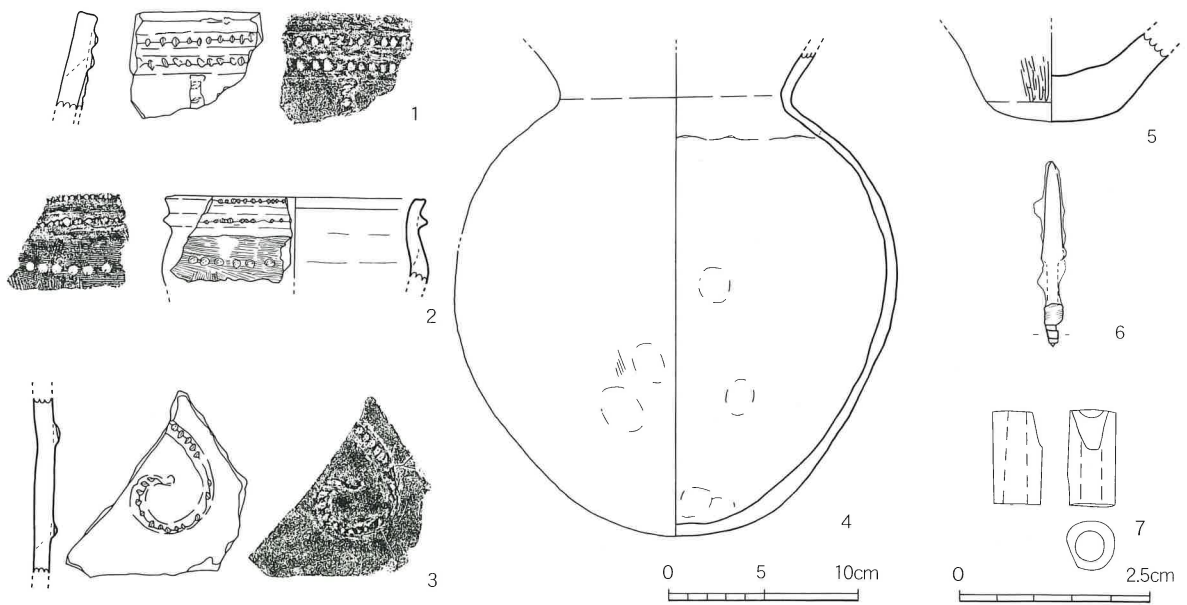
第3調査区の西端の南壁に位置する方形プランの竪穴である。南半分は調査区外に遺存している。確認面から床面までは約50cmである。竪穴の内側には何本かの柱穴が遺存しているが、竪穴の北壁に沿う三本の柱穴がこれに伴うものであろう。炉跡等は確認できなかった。竪穴中央部には壺形土器が潰れた状態で検出された。

### 出土遺物（第42、43、44図）

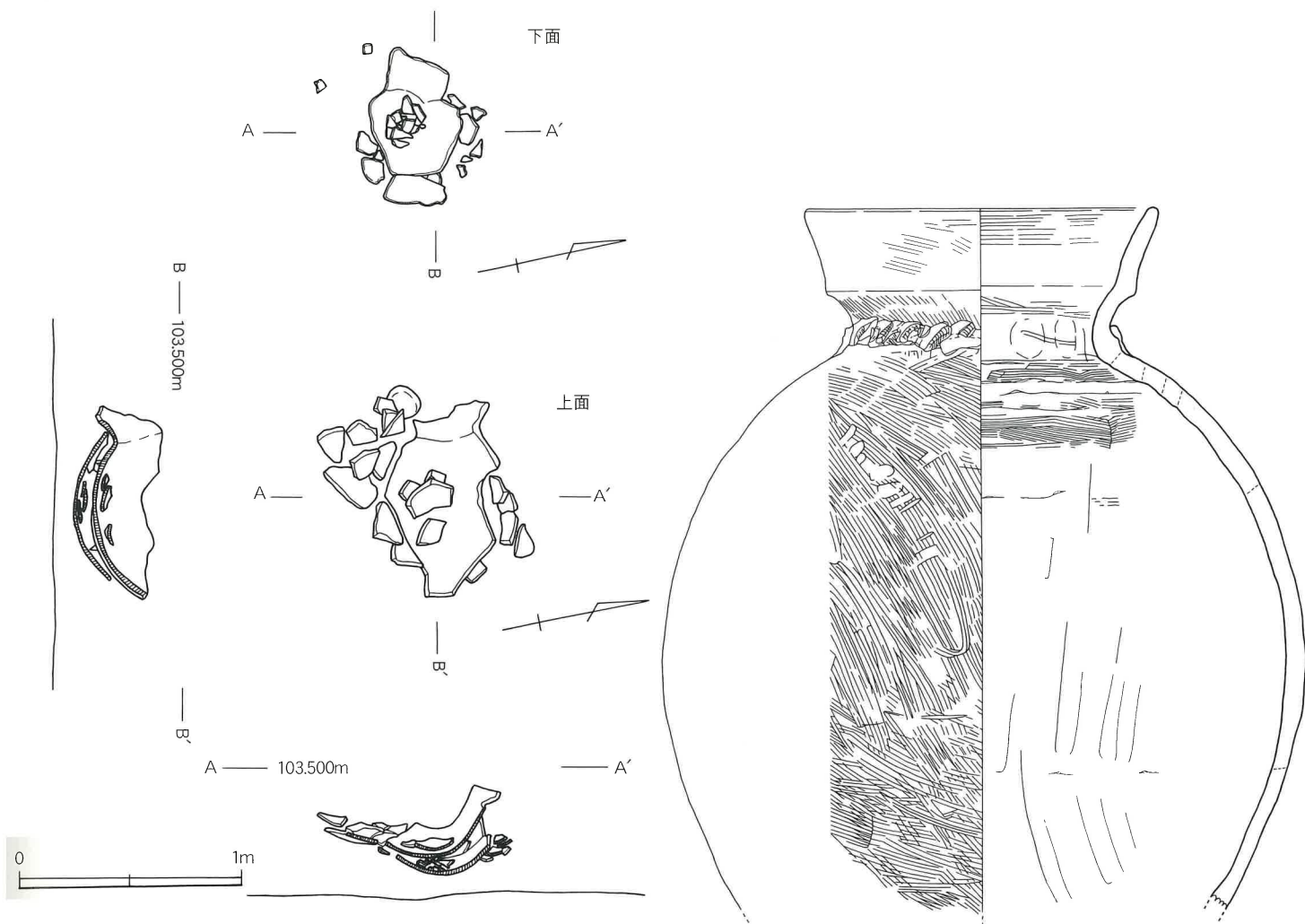
1は甕形土器の口縁部である。口縁下に二条の刻目突帯が横走り、縦に一条の刻目突帯が施されている。2は口径14cmで胴部最大径14.2cmの鉢形土器である。口唇外部に刻目を施し、口縁下に一条の刻目突帯が横走る。胴部は刷毛目調整し、竹管の刺突文が廻っている。3は刻目突帯文を蔓草のように巻いた文様である。4は外反する口縁部の先端を欠損した甕である。頸部径12.6cm、胴部最大径23.5cmである。丸底を呈し、表裏撫で調整で表面に煤が付着している。



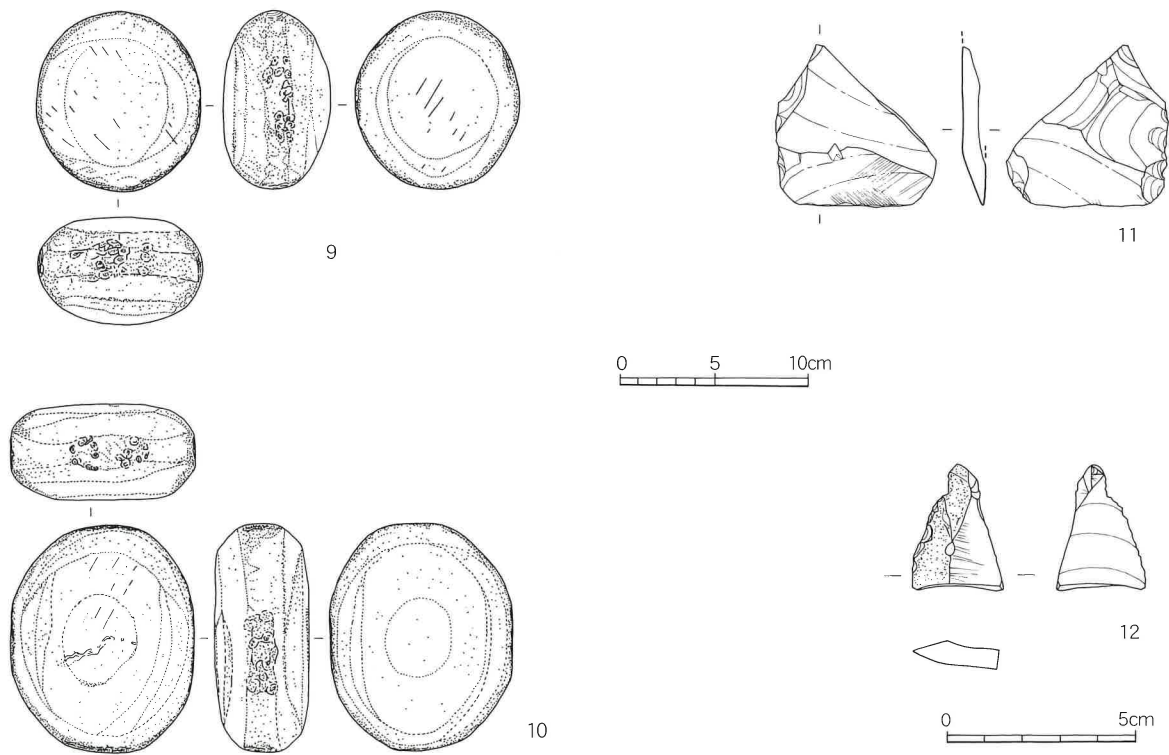
第41図 折立遺跡30号竪穴実測図 (1/60)



第42図 折立遺跡30号竪穴出土遺物実測図1 (1/4、1/2)



第43图 折立遺跡30号竖穴出土遺物(8) (1/10)



第44图 折立遺跡30号竖穴出土遺物実測図2 (1/4、1/2)

5は丸底部である。

6は鉄鏝である。基部付近に木質部が残っている。長さ9.7cm、幅1.4cm、厚さ0.5cm、重さ19.6gである。

7は碧玉製の管玉である。長さ1.3cm、幅0.6cm、重さ0.8gである。穿孔の直径は0.4cmである。

8は複合口縁部の壺形土器である。外反口縁が複合部で外に大きく開く形態で、頸部の突帯に斜めの刻み目をいれる。胴部は球形に張る。表面は平行タタキ刷毛目調整、内面は刷毛目と工具による縦撫で調整。口径20.2cm、頸部径15.3cm、胴部最大径38cmである。

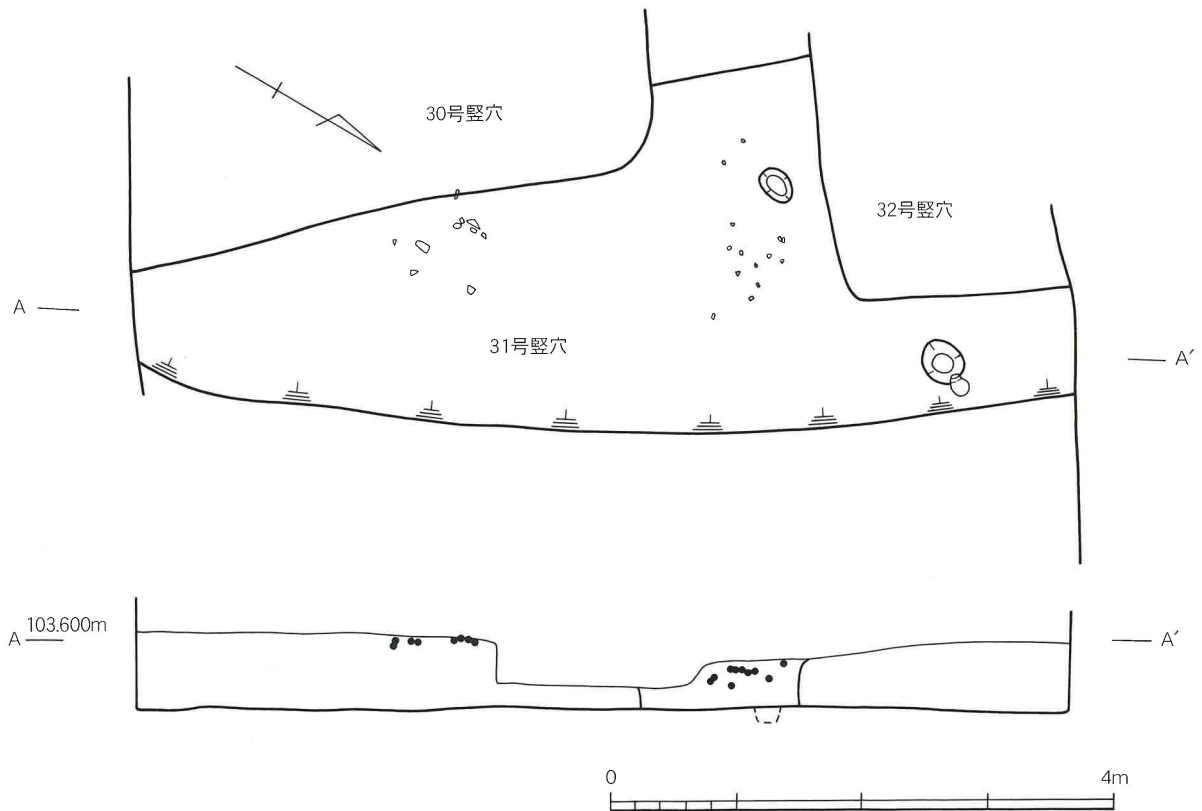
11、12は丸い川原礫を利用した磨石、敲石である。表裏両面を磨石として使用し、側辺の周囲を敲石として使用している。11は長さ9.4cm、幅7.7cm、厚さ5.7cm、重さ685.4gである。砂岩製。12は長さ11.9cm、幅9.8cm、厚さ5cm、重さ994.8gである。輝石安山岩製。13は輝石安山岩の石包丁形石器である。刃部に使用擦痕や刃毀れが確認できる。長さ8.4cm、幅8.4cm、厚さ8cm、重さ91.1gである。14は使用痕の確認できる剥片である。長さ3.2cm、幅2.3cm、厚さ0.7cm、重さ4.9gである。

### 31号竪穴（第45図）

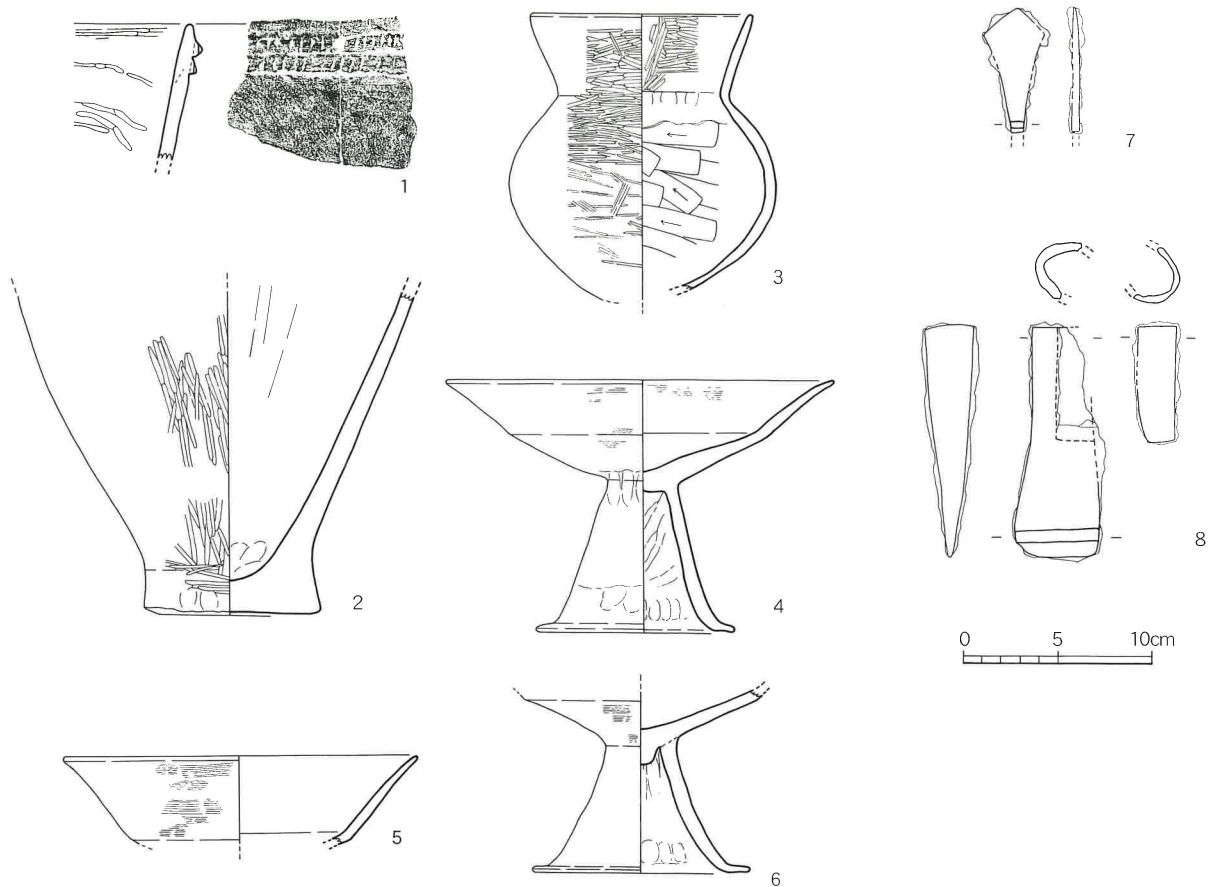
第3調査区の西端近くに位置するが、竪穴プランも柱穴も判然としない。しかし、覆土に遺物が包含されており何らかの遺構内であろう。

### 出土遺物（第46図）

1は甕形土器の口縁部である。口唇端部は丸く収める。二条の刻目突帯文を施文。表裏はヘラ磨きの痕跡。2は胴部～底部の破片である。表面はヘラ磨きで内面は撫で調整。底9.6cm。3は広口の壺である。表面は横刷毛目後ヘラ磨き、内面はヘラ削りとヘラ磨きで調整している。口径11.9cm、



第45図 折立遺跡31号竪穴実測図 (1/60)



第46図 折立遺跡31号竪穴出土遺物実測図 (1/4)

頸部径9.1cm、胴部最大径14.2cmである。4は高坏である。坏部は表裏横刷毛目調整の後に撫で調整。脚部はヘラ削り後撫で調整。坏部は口径20.7cm、屈折点13.9cm、脚部付け根3.8cm、脚部最大径10.5cmである。

5、6は高坏の同一個体である。口径19cmで体部の屈折部径は12cm、脚部付け根で径3.8cm、脚部最大径11.6cmで器高は13.5cmである。体部の表面は横刷毛目調整で内部は撫で調整。脚部表面はヘラ削り後撫で調整。

7は鉄鏃である。長さ6.6cm、最大幅3.3cm、厚さ0.4cm、重さ19.6gである。

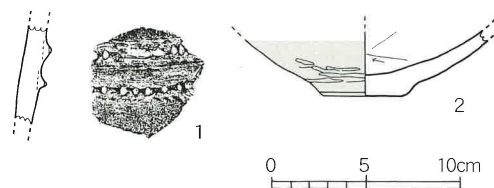
8は袋状の鉄斧である。長さ12.6cm、最大幅4.5cm、袋部の厚さ0.7cm、重さ343.6gである。

### 32号竪穴 (第48図)

第3調査区の西端近くの北壁に位置する方形竪穴であるが半分は調査区外に遺存している。竪穴の南西と南東コーナーを残す竪穴で、一辺は4.2mである。確認面から床面までは30cmである。柱穴は判然としない。

### 出土遺物 (第47図)

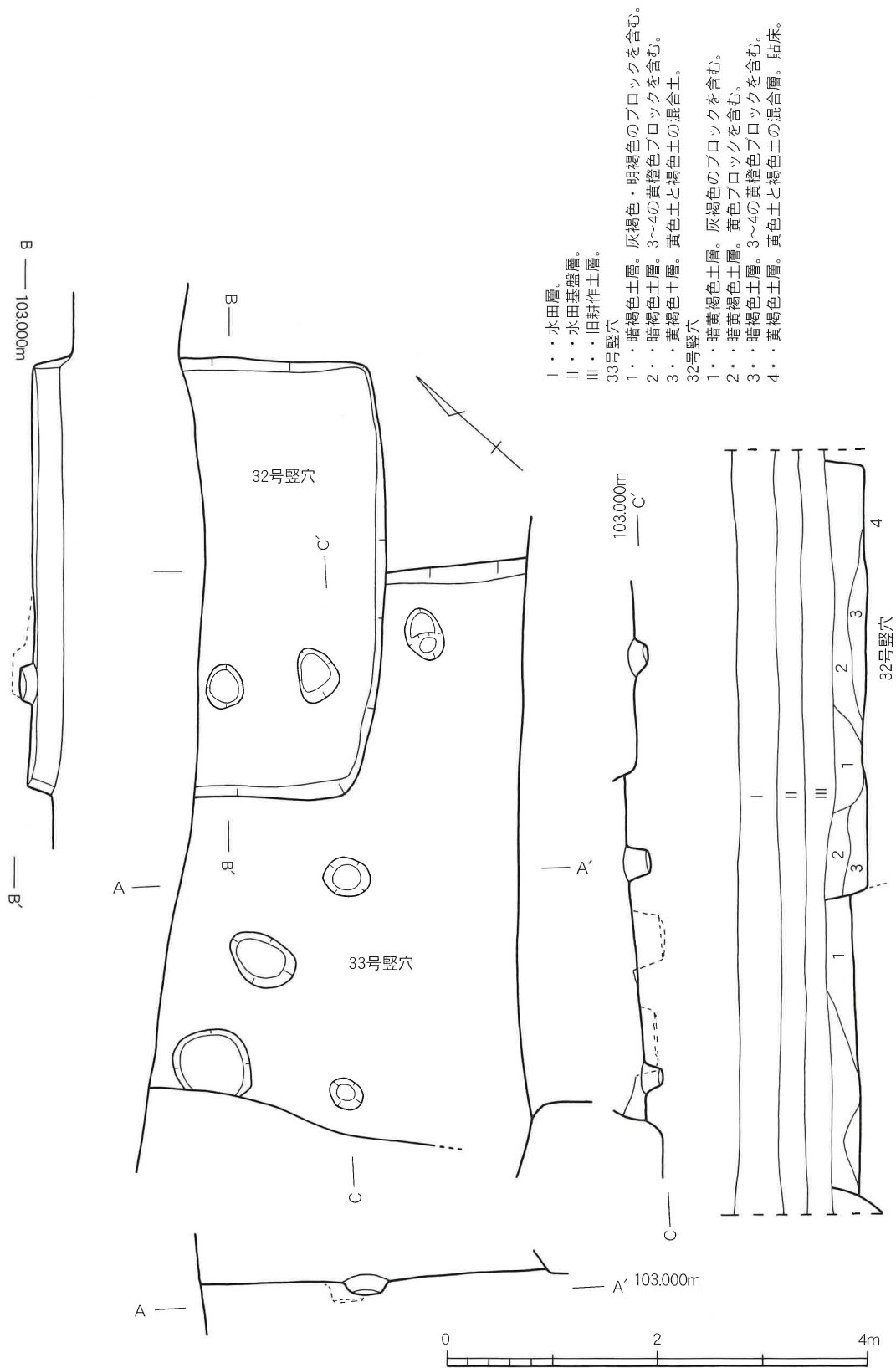
1は甕形土器の口縁部付近の破片である。二条の刻目突帯が施文されている。2は壺形土器の底部である。底径4.9cmである。表面はヘラ磨きと撫で調整、内面はヘラ削りと撫で調整。外面は丹塗りである。



第47図 折立遺跡32号竪穴出土遺物実測図 (1/4)

33号竖穴（第48図）

第3調査区の西端近くの北壁に位置するが、竖穴のプランも柱穴も判然としない。



第48図 折立遺跡32、33号竖穴実測図（1/60）

### 34号竪穴（第49図）

第3調査区の中央部に位置する長方形プランの竪穴である。長軸を東西にとり、長径約6.4～7m、短径約5mを呈する。確認面から竪穴床面までは約50cmである。支柱穴は竪穴の北壁に沿う3本に対応する6本であろう。中央部には径1.6mの焼土炉が位置している。

### 出土遺物（第50図）

1は下城式土器の甕形土器である。口縁下に一条の刻目突帯文が廻る。表面は撫で調整、内面はヘラ磨き調整。口径16cmである。2は不安定な平底部である。表面ヘラ磨きや撫で調整。内面は指頭痕を残す。底径5.5cm。3は略完形の甕形土器である。口縁部は大きく緩やかに外反し、胴部はやや張り気味で丸底にいたる。表裏は撫で調整。口径14.2cm、頸部径11cm、胴部最大径17.1cm、器高20.7cmである。煤が付着し全体的に二次被熱している。4は口縁部が大きく緩やかに外反する甕である。表面撫で調整、内面ヘラ削り後撫で調整。口径19.1cm、頸部径14cmである。5は口縁部の一部を欠損した長胴の甕である。表面撫で調整、内面施文工具の撫で調整。頸部径12cm、胴部最大径23cmである。4と同一個体であろう。

6、7は結晶片岩製の砥石である。表裏面と側面を使用し研磨痕跡が顕著である。6は長さ5.6cm、幅3.2cm、厚さ1.3cm、重さ61.2gである。7の表面は色調が変化してツルツルしている。長さ19.4cm、幅12+ $\alpha$ cm、厚さ2.3～2.9cm、重さ1200gである。8は半分欠損した磨石・敲石である。表裏面が磨滅し側頂部は痘痕状になっている。9は半分欠損した磨石である。表裏面が磨滅している。10は砂岩製の砥石である。長さ22.4cm、幅8.4cm、厚さ7.4cm、重さ2000gである。

### 35号竪穴（第49図）

第3調査区の中央部に位置する長方形プランの竪穴である。34号竪穴に大きく切られている。長軸を東西にとり、長径約7.6～8m、短径約4.3mを呈する。確認面から竪穴床面までは約50cmである。支柱穴は判らない。

### 出土遺物（第51図）

1は壺の胴部片である。幅広の突帯中央部を凹線にして二条突帯のように施文している。表面は斜め刷毛目にヘラ磨き、内面は撫で調整。2の口縁部は「く」の字を呈し、口唇は撫で調整で外に心持ち張り出す。器壁は薄く、表面は刷毛目、内面はヘラ削り。表面の肩部に一条の沈線が廻っている。

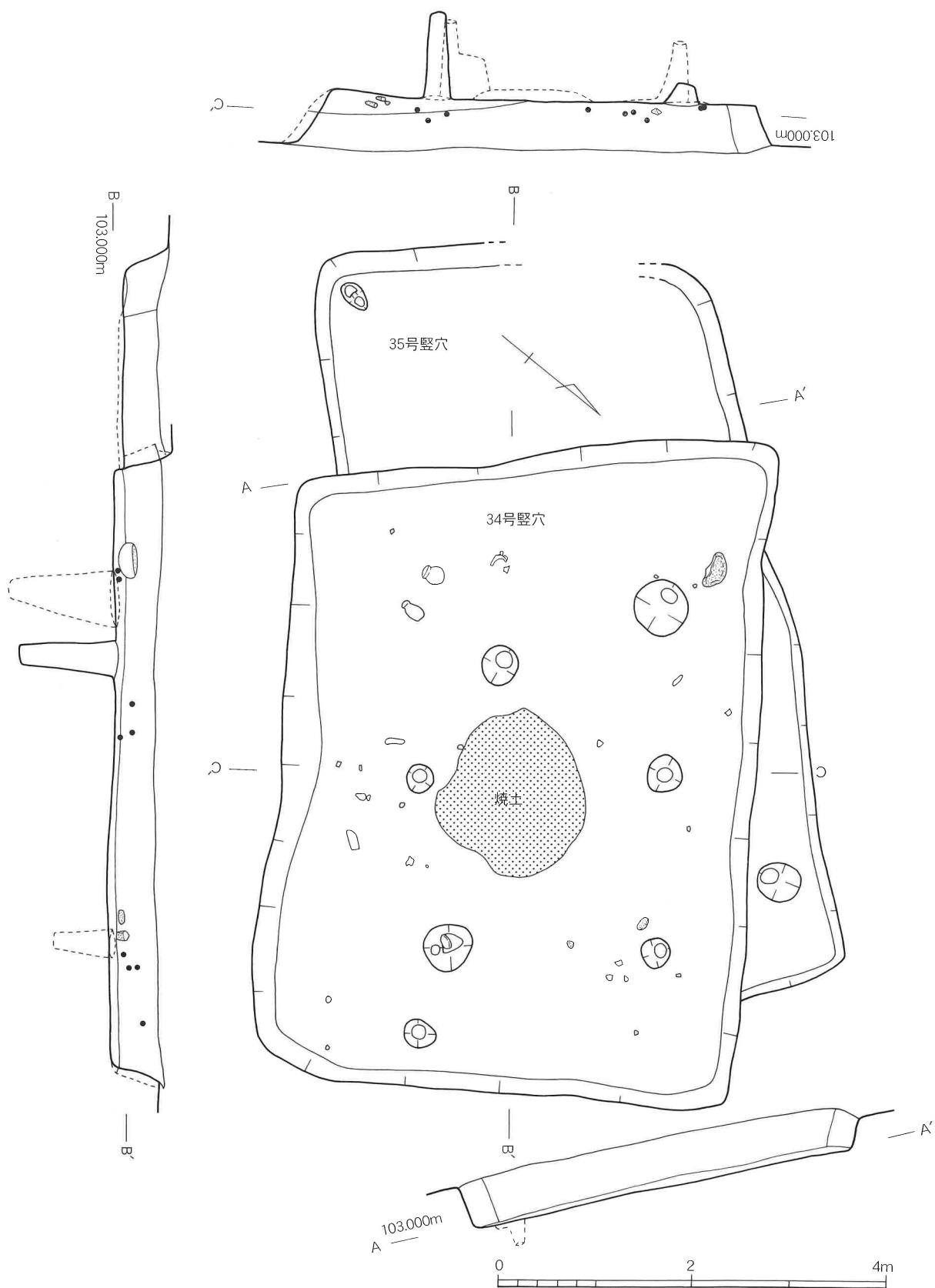
### 36号竪穴（第52図）

第3調査区の西端部の南壁に位置する方形竪穴であるが半分は調査区外に遺存している。竪穴の北東コーナー付近と西壁の一部を確認している。竪穴の一辺は7.4～8mである。確認面から床面までは50cmである。柱穴は判然としない。竪穴の南壁には焼土の炉跡が遺存していた。

### 出土遺物（第53図）

1は甕である。口唇と口縁直下に刻目突帯文を施文、胴部にも刻目突帯の曲線文を施文する。表裏撫で調整。2は下城式土器である。口縁直下に刻目突帯文を施文する。表面は縦刷毛目文、表裏撫で調整。3、4は複合口縁の壺形土器である。3は上下二段に櫛描波状文を施文する。口縁最大径は22.2cmである。口縁部に縦、横のベルト状に赤色顔料を施す。4は一段に櫛描波状文を施文する。5は壺の口縁部である。表裏撫で調整。口径17.3cm、口縁屈折点で16.1cm、頸部14.7cmである。6は緩やかに外反する甕形土器。口縁部の器壁は薄い。表裏刷毛目痕で内面は一部撫で調整。口径16.3cm、頸部13.2cm、胴部最大径13.3cmである。7は表裏丹塗りの高坏の口縁部である。表裏撫で調整後ヘラ研磨の調整。8は器壁の薄い甕の口縁部である。口唇撫で調整で内側に心

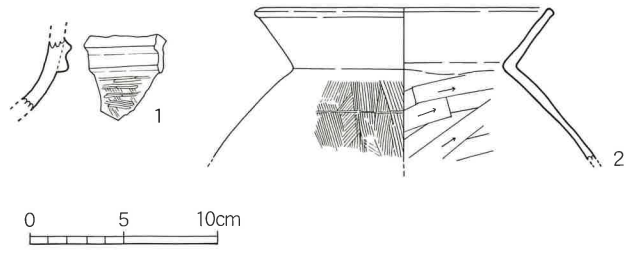




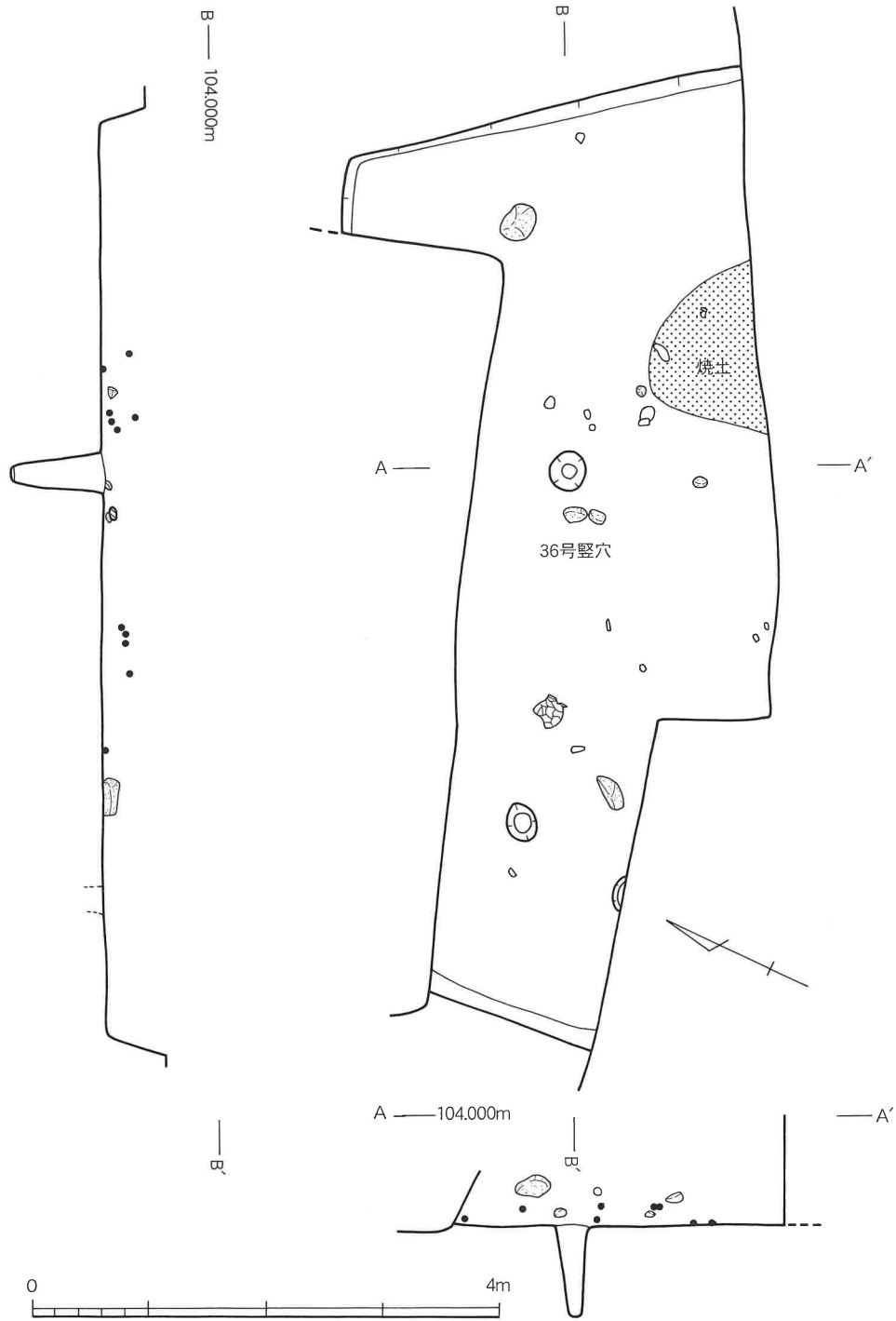
第49図 折立遺跡34、35号竪穴実測図 (1/60)



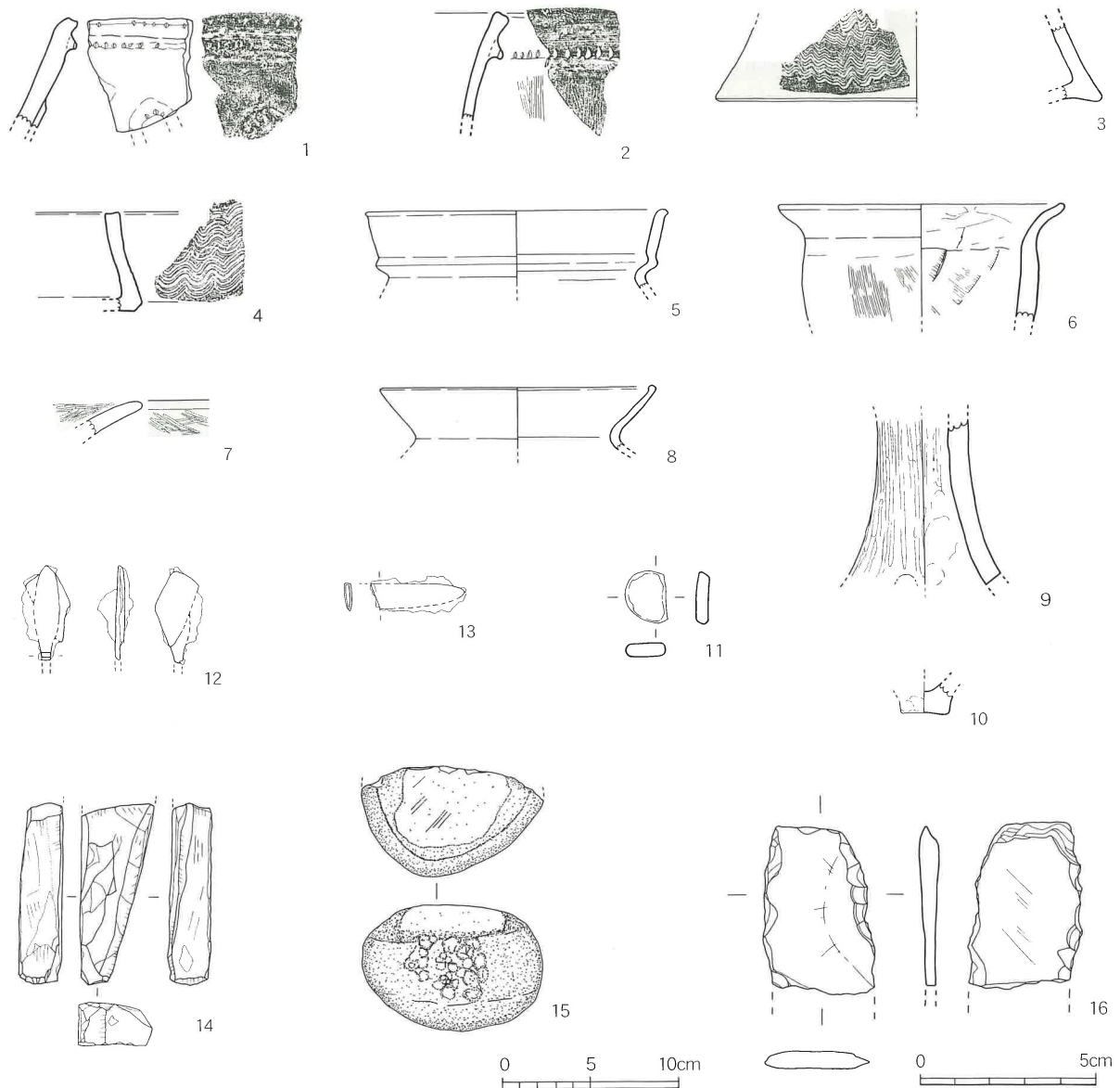
第50图 折立遺跡34号竪穴出土遺物実測図 (1/4)



第51图 折立遺跡35号竖穴出土遺物実測図 (1/4)



第52图 折立遺跡36号竖穴実測図 (1/60)



第53図 折立遺跡36号竪穴出土遺物実測図 (1/4、1/2)

持ち張出る。表裏撫で調整。口径15.9cm、頸部径11.6cm。9は高坏の脚部である。表面縦方向のヘラ磨き、内面絞り痕跡。脚下方部に円形透かし有り。10は底径2.5cmの平底である。

11は半月形の土器片加工品である。弦は粗く弧は顕著な研磨。長さ3cm、幅2.4cm、厚さ0.7cm、重さ6.5g。

12、13は鉄製品である。12は柳葉形の鉄鏃である。長さ $5.3 + \alpha$ 、幅1.4cm、厚さ0.3cm、重さ $13.9 + \alpha g$ 。2枚が重なり、錆付いている。13は刀子の先端部である。長さ $5.4 + \alpha$ 、幅1.5cm、厚さ0.4cm、重さ $10.6 + \alpha g$ 。

14は砥石である。片面と側面を使用している。長さ $10.3 + \alpha$ 、幅4.1cm、厚さ2.5cm、重さ $130.3 + \alpha g$ 。15は半分欠損した輝石安山岩質の磨石・敲石である。長さ $6.2 + \alpha$ 、幅10.2cm、厚さ7.1cm、重さ $5420 + \alpha g$ 。16は扁平打製石斧の基部である。横長剥片で周縁に加工痕跡。泥質片岩で長さ $4.7 + \alpha$ 、幅3.1cm、厚さ0.6cm、重さ $10.8 + \alpha g$ 。

### 37号竖穴（第54図）

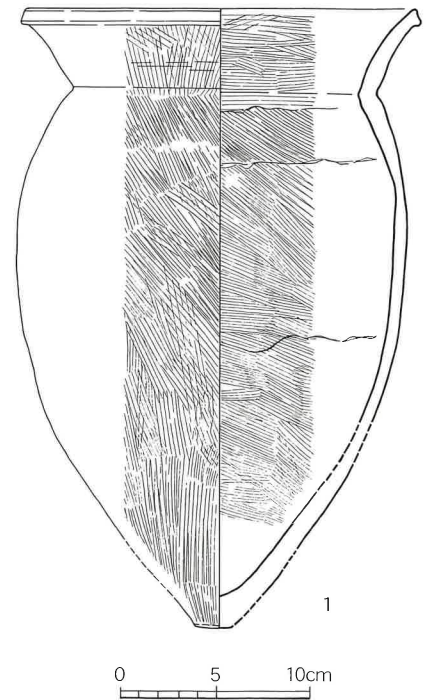
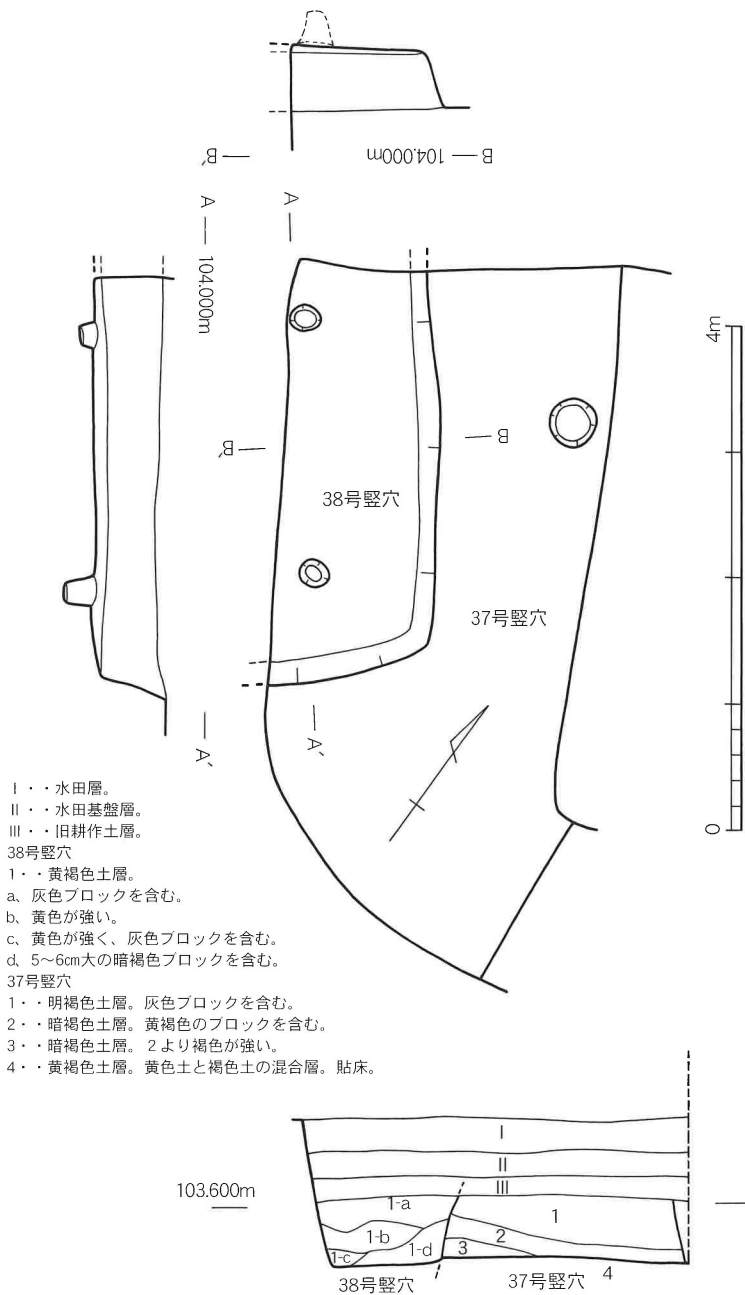
第3調査区の西端部に位置する竖穴であるが半分は調査区外に遺存している。竖穴プランや柱穴は判然としない。

### 出土遺物（第55図）

1は口縁断面「く」の字で胴部は張らず底部が尖底に近い甕形土器である。表裏刷毛目調整。口径21.2cm、頸部16cm、胴部最大径20.7cm、底部径2.2cmである。

### 38号竖穴（第54図）

第3調査区の西端部に位置する竖穴であるが半分以上は調査区外に遺存している。竖穴の南東コーナーを確認している。柱穴は2本対で出土しているが浅く判然としない。37号竖穴を切る関係にある。

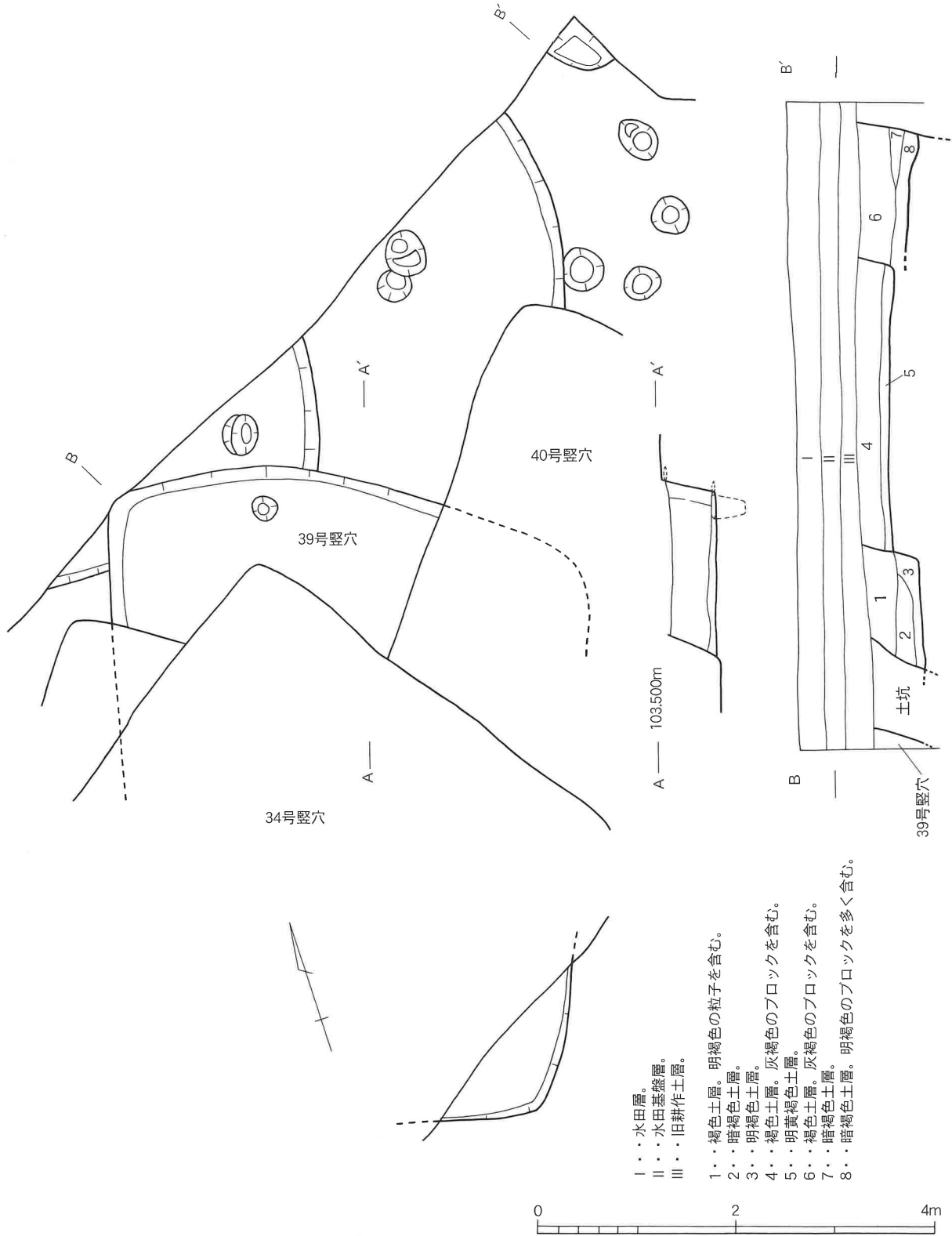


第55図 折立遺跡37号竖穴出土遺物実測図（1/4）

第54図 折立遺跡37、38号竖穴実測図（1/60）

39号竖穴（第56図）

第3調査区の中央部に位置する長方形プランの竖穴であるが34号、40号竖穴に切られている。プランを復元すると長軸を南北に取り、長径約6.5m、短径約5m程度である。確認面から床面までは約50cmである。

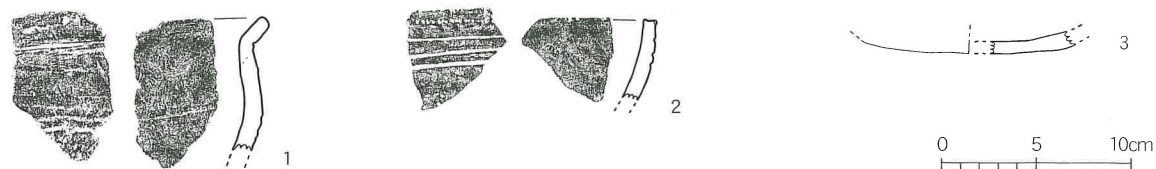


第56図 折立遺跡39号竖穴実測図 (1/60)

出土遺物（第57図）

1、2は縄文土器である。1は口縁部が小さく外反する鉢形土器である。頸部と胴部に細線が廻っている。表裏撫で磨き。2は口唇外側に刻目を持つ鉢形土器で三条の沈線が廻っている。表裏横のヘラ磨き。

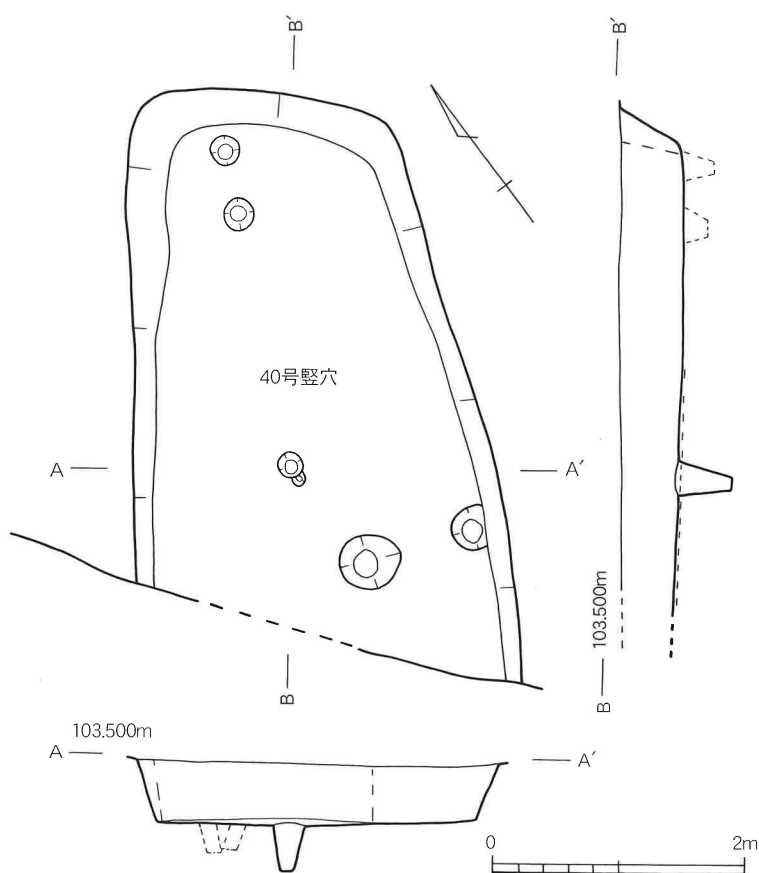
3は古代の坏の底部である。底部は回転ヘラ切りで底部径11.3cmである。



第57図 折立遺跡39号竪穴出土遺物実測図（1/4）

40号竪穴（第58図）

第3調査区の中央部に位置する細長い歪な竪穴であり、34号竪穴に切られている。長軸を南北に取り、長径約4.5m+ $\alpha$ 、短径約2.2~3m程度である。確認面から床面までは約50cmである。



第58図 折立遺跡40号竪穴実測図（1/60）

#### 41号竪穴（第59図）

第3調査区の中央部に位置する長方形プランの竪穴であり、竪穴南壁は調査区外に位置している。長軸を東西に取り、長径約6m、短径約4.5～5.5m程度である。確認面から床面までは約50～60cmである。竪穴の中央部には攪乱がある。

#### 出土遺物（第60図）

1は口縁部の一部を欠損した複合口縁の壺である。口外側に櫛描波状文が見られ、頸部には一条の突帯が廻る。屈折部の径は15.2cm、頸部径は10.4cmである。表裏撫で調整。

2は半月形の土器片加工品である。全周囲を研磨して整形している。長さ3.6cm、幅2.4cm、厚さ0.9cm、重さ10.4g。

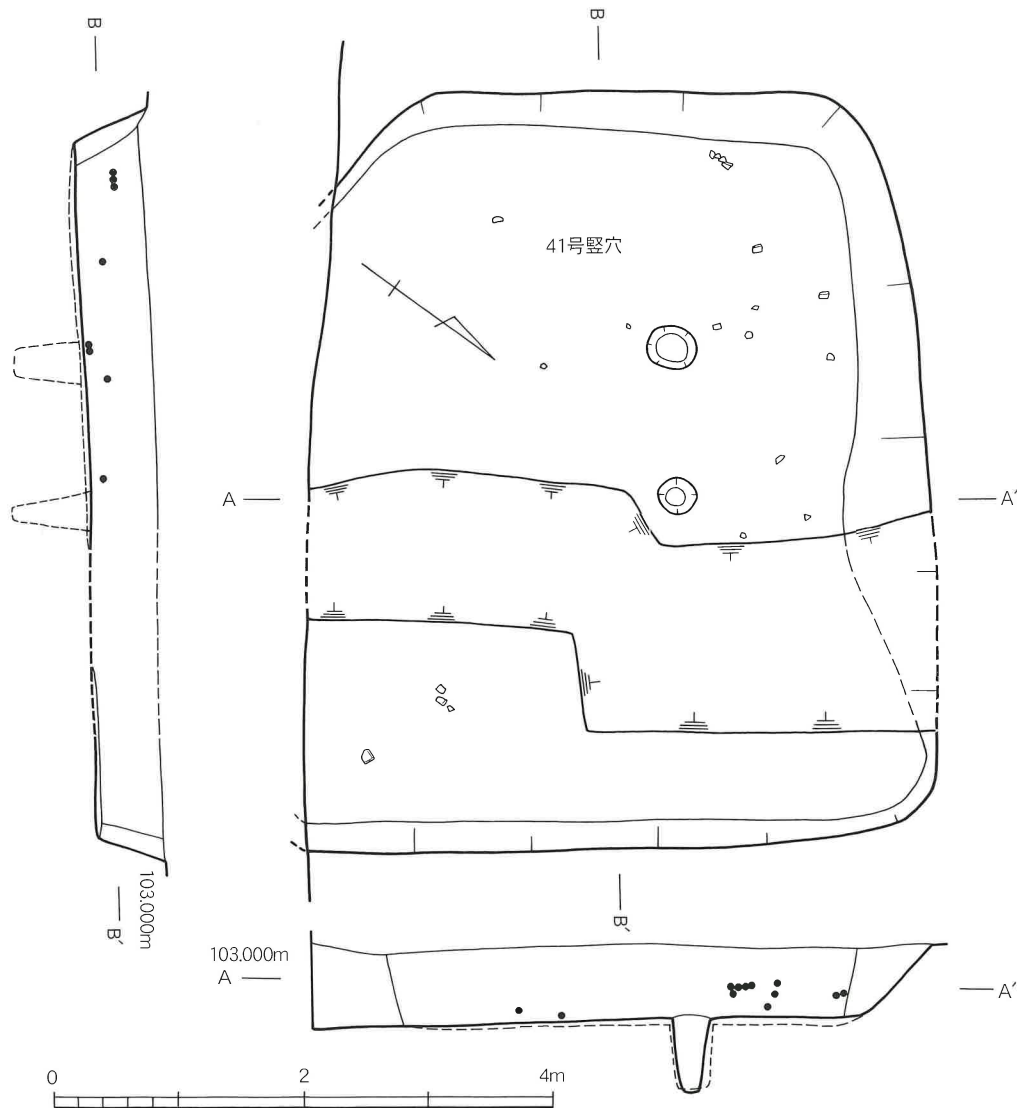
3は鉄器の刀子である。長さ $6.4 + \alpha$ cm、幅0.5～1cm、厚さ0.25cm、重さ $5.5 + \alpha$ g。

4は線条痕の付いた棒状の石である。長さ $4.6 + \alpha$ cm、幅2.1cm、厚さ0.5cm、重さ $17.8 + \alpha$ g。

5は黒曜石製の異形石器である。石匙の掴みの部分にしては大きすぎる。

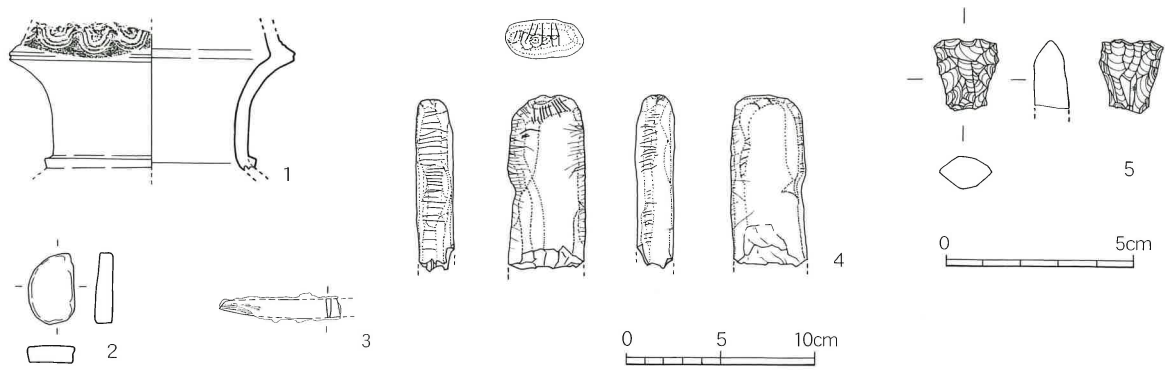
#### 42号竪穴（第61図）

第3調査区の東端部に位置する方形プランの竪穴である。竪穴の北東コーナーを確認している。



第59図 折立遺跡41号竪穴実測図 (1/60)





第60図 折立遺跡41号竪穴出土遺物実測図 (1/4、1/2)

確認面から床面までは約1~10cmである。竪穴の南西部には立ち上がりがない。これに伴う柱穴も判然としない。

**出土遺物 (第62図-1)**

1は鉄器である。長さ $4.7 + \alpha$  cm、幅約0.8cm、厚さ0.3cm、重さ $11.9 + \alpha$  g。

**43号竪穴 (第61図)**

第3調査区の東端部の北壁に位置する方形プランの竪穴である。竪穴のほとんどが調査区外に遺存している。竪穴の南東と南西コーナーを確認している。竪穴の一辺は約6.5mである。

**出土遺物 (第62図-2)**

1はチャート製の凹基式石鏃である。長さ1.3cm、幅約1.5cm、厚さ0.3cm、重さ0.6g。

**44号竪穴 (第61図)**

第3調査区の東端部の南壁に位置する。竪穴プランや柱穴は判然としない。

**出土遺物 (第62図-3)**

1は高坏の脚部であろう。表裏撫で調整。脚部最大径は16.2cmである。

**45号竪穴 (第61図)**

第3調査区の東端部に位置する方形プランの竪穴である。竪穴の西コーナーが確認できるのみで、竪穴の規模や柱穴は判然としない。

**出土遺物 (第62図-4, 5)**

4は甕の平底部である。表裏撫で調整。底径8.9cm。

5は鉄器である。刀子であろうか。長さ $15.2 + \alpha$  cm、幅約1.1cm、厚さ0.3~0.5cm、重さ $35.2 + \alpha$  g。

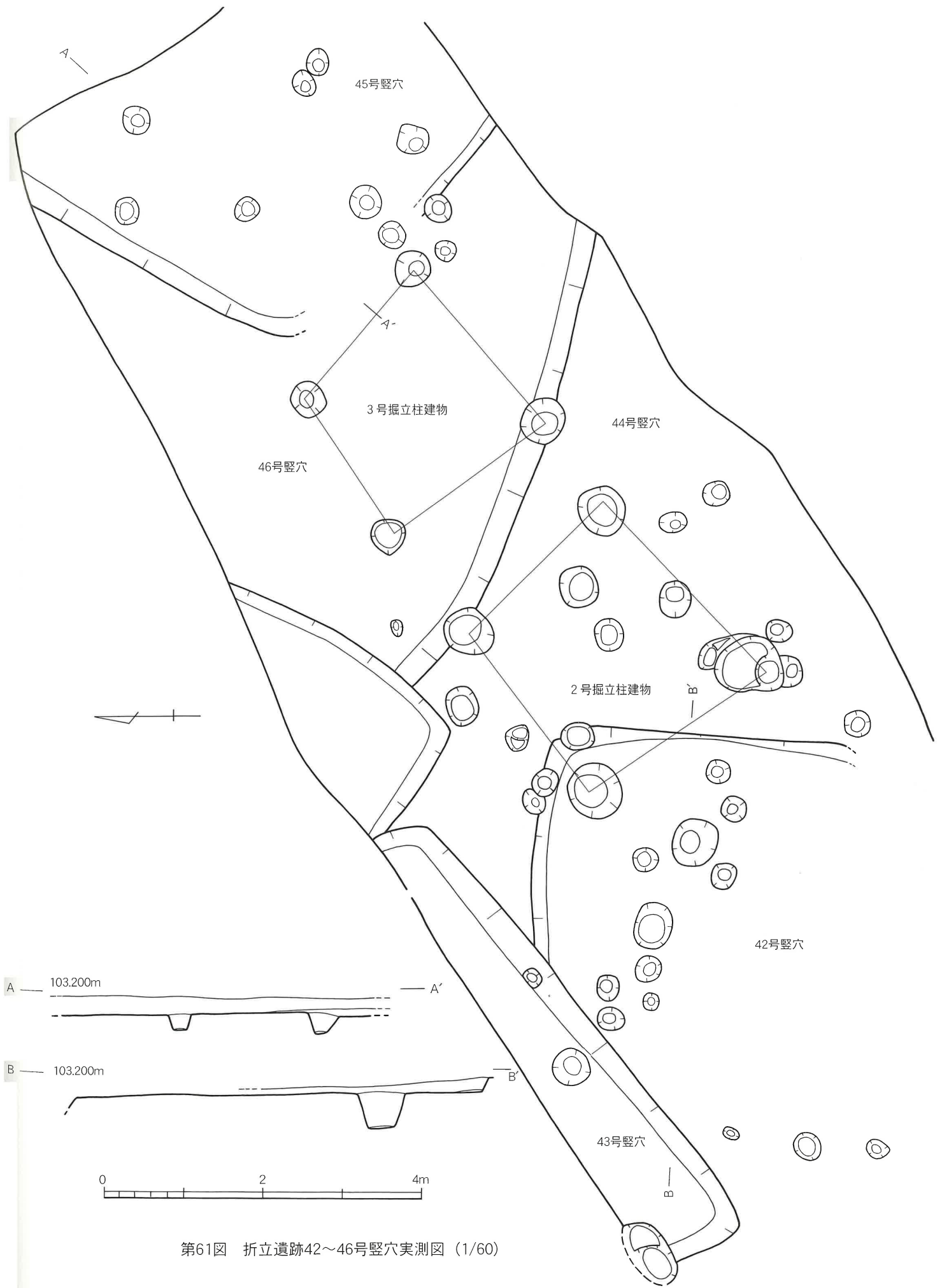
**46号竪穴 (第61図)**

第3調査区の東端部に位置する。竪穴プランや柱穴は判然としない。

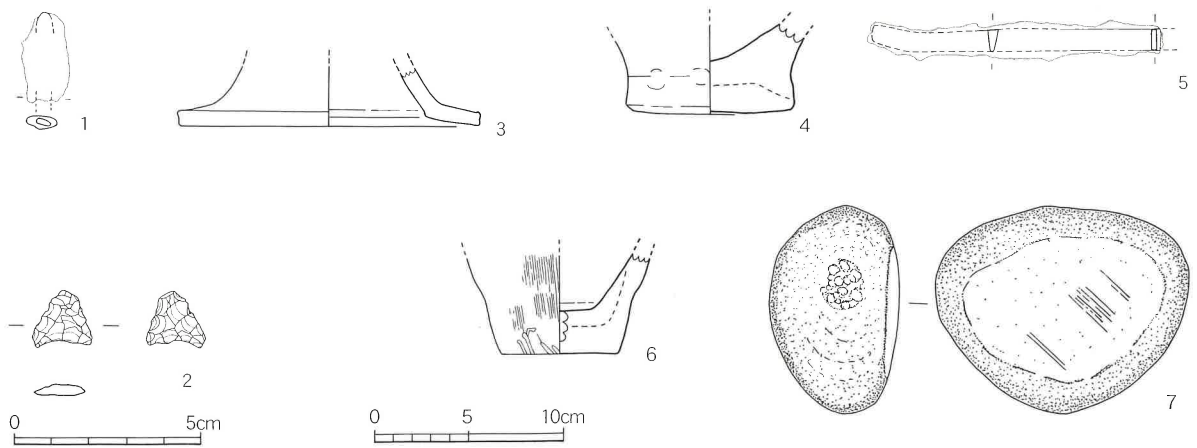
**出土遺物 (第62図-6, 7)**

6は平底部である。表面は縦刷毛目後へラ磨き。内面撫で調整。底径6.4cm。

7は川原礫を利用した安山岩製の磨石・敲石である。長さ13.3cm、幅約10.9cm、厚さ6.9cm、重さ1100g。



第61図 折立遺跡42~46号竖穴実測図 (1/60)



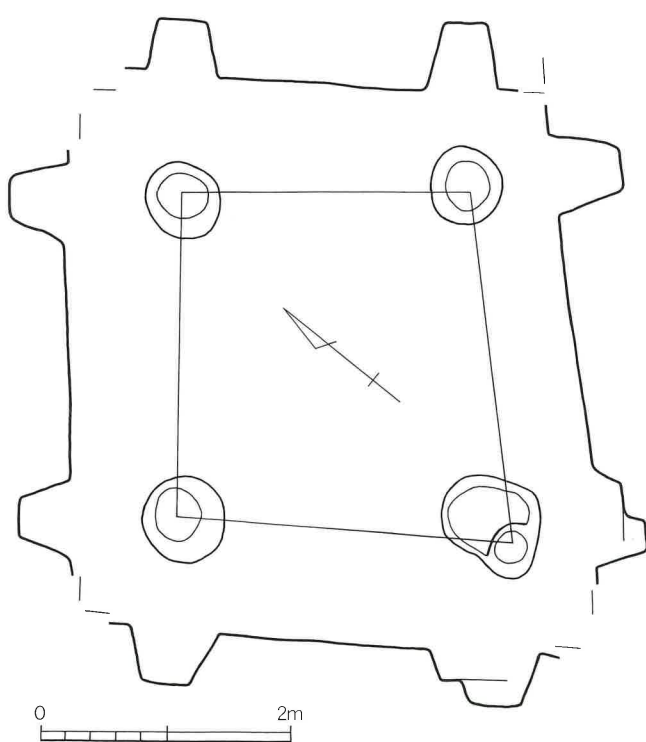
第62図 折立遺跡42号(1)、43号(2)、44号(3)、45号(4、5)、46号(6、7)号竪穴出土遺物実測図(1/4、1/2)

### 2号掘立柱建物遺構(第63図)

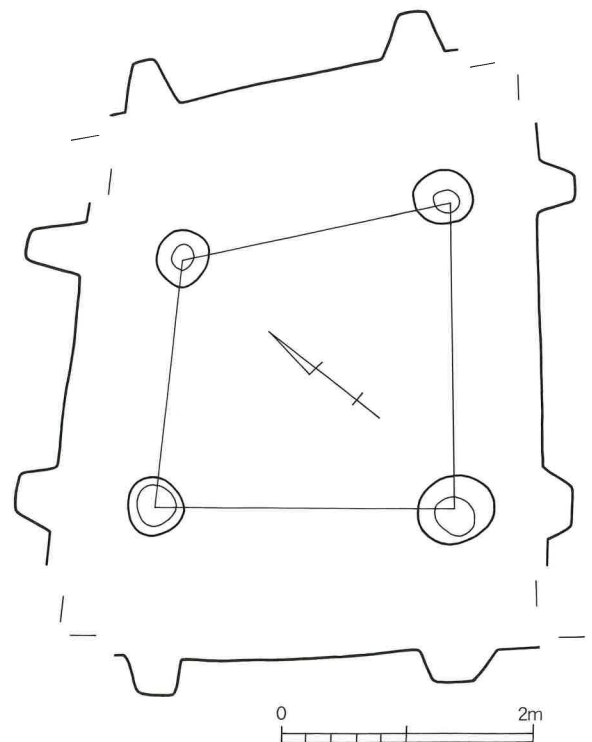
第3調査区の北東隅部に位置する4本柱の掘立柱建物遺構である。柱穴の間隔は、東西径2.6～2.8m、南北径2.3～2.7mである。柱穴の深さは確認面から約50cmである。先後関係は判らないが42号竪穴と43号竪穴と重複する関係にある。3号掘立柱建物遺構とは並列した並び倉の様相がある。

### 3号掘立柱建物遺構(第64図)

第3調査区の北東隅部に位置する4本柱の掘立柱建物遺構である。柱穴の間隔は、東西径2～2.4m、南北径2.2～2.4mである。柱穴の深さは確認面から約25～50cmである。先後関係は判らないが46号竪穴と重複する関係にある。2号掘立柱建物遺構とは並列した並び倉の様相がある。



第63図 折立遺跡2号掘立柱建物遺構(1/60)

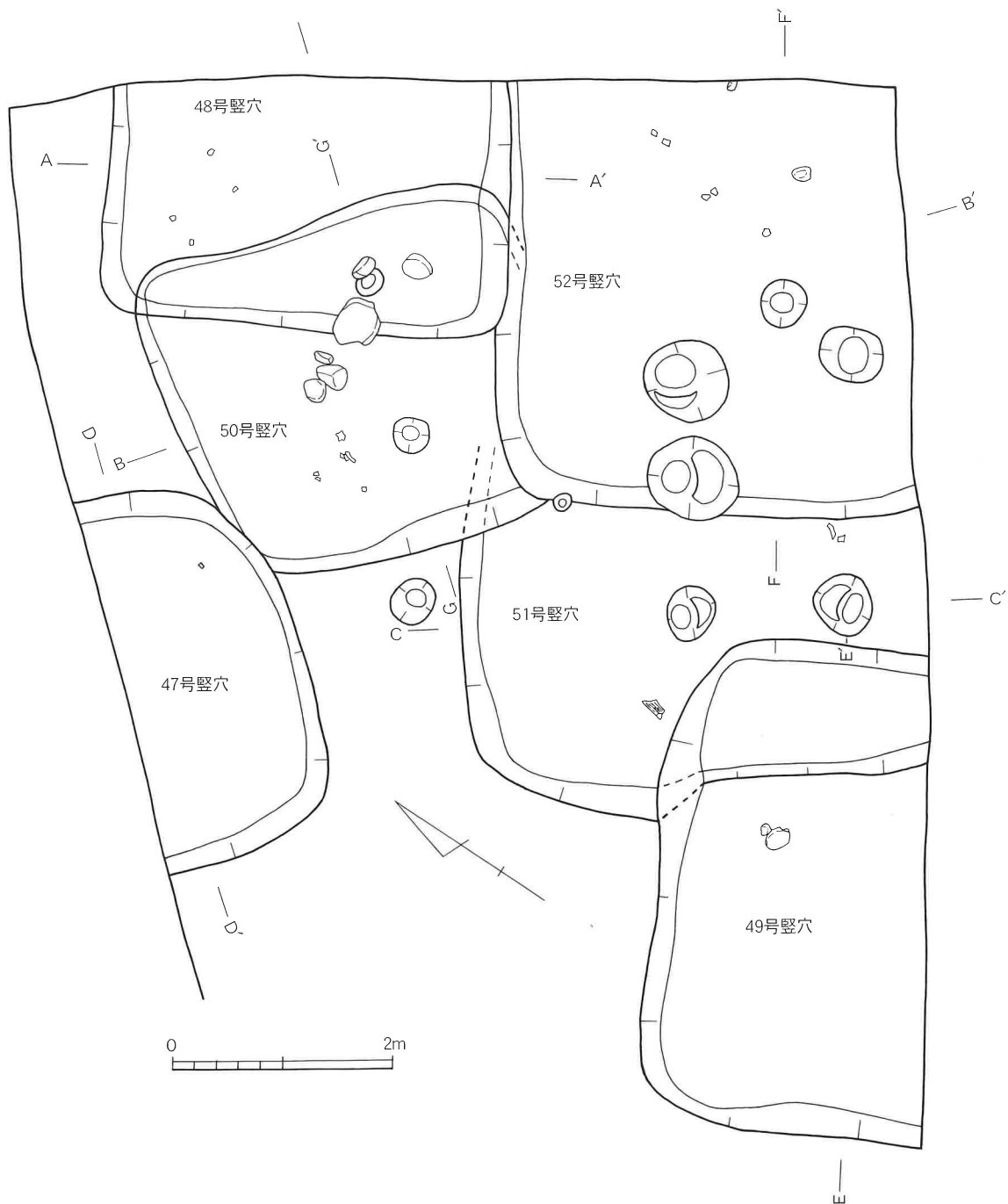


第64図 折立遺跡3号掘立柱建物遺構(1/60)

## 第4節 第4調査区

### 47号竪穴（第65、66図）

調査区の東端の北壁に位置する隅丸方形か、あるいは楕円状竪穴である。長軸か短径か判らないが一辺の長さは約3.5mである。確認面から床面までの深さは約35cmである。遺物の出土はない。



第65図 折立遺跡47~52号竪穴実測図 (1/60)

#### 48号竪穴（第65、66図）

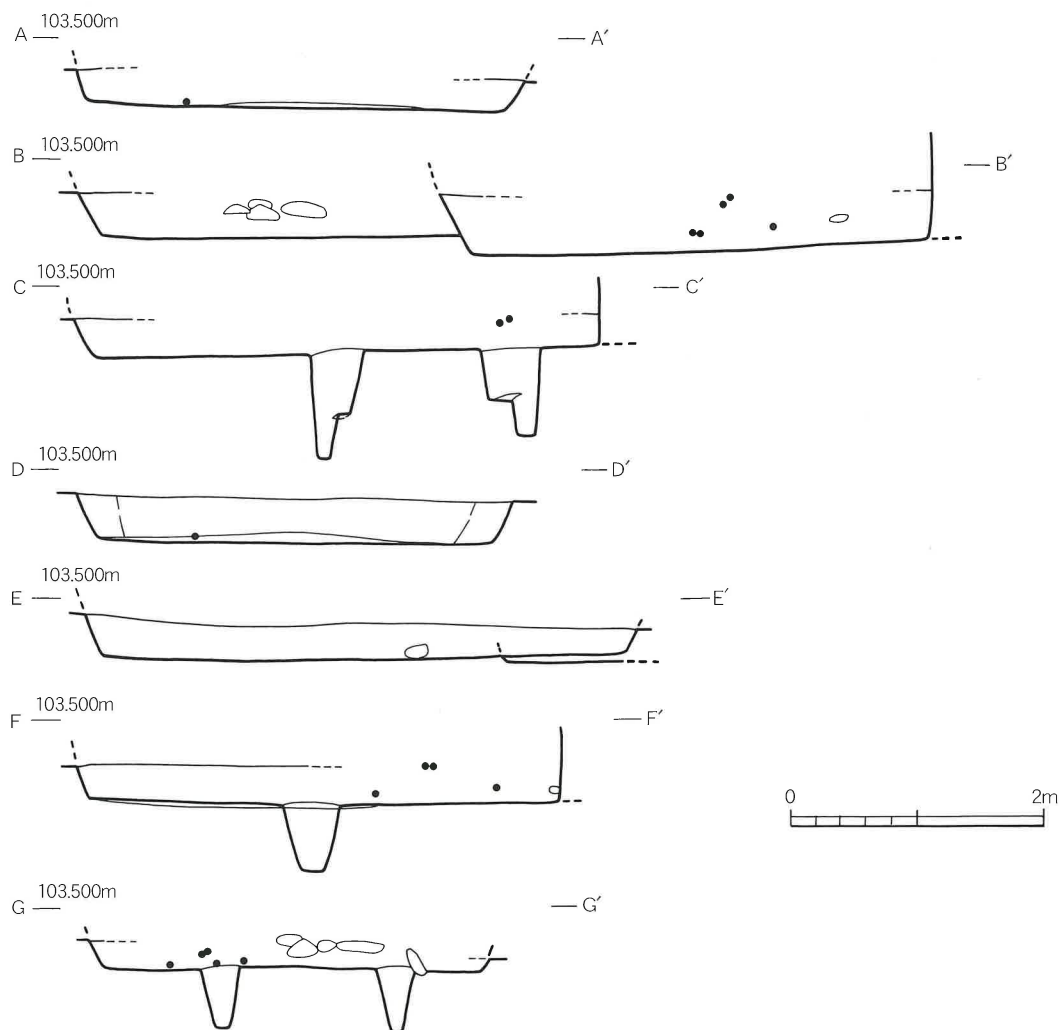
調査区の東端に位置する方形プランの竪穴である。竪穴の長軸か短径かは判らないが一辺の長さは約3.7mである。確認面から床面までの深さは約25cmである。遺物の出土はない。50号竪穴と切り合い関係にある。遺物の出土はない。

#### 49号竪穴（第65、66図）

調査区の東端に位置する方形プランの竪穴である。竪穴の南半分は調査区外に遺存している。竪穴の長軸か短径かは判らないが一辺の長さは約4.5mである。確認面から床面までの深さは約35cmである。51号竪穴と切り合い関係にある。

#### 出土遺物（第67図-1~5）

1は複合口縁の壺形土器の口縁部である。上下二条に櫛描波状文を施文している。2は複合口縁の壺形土器の頸部である。頸部径は10.4cmで頸部には刻目突帯が廻っている。表裏刷毛目調整。3は高環の脚部である。脚部径は5.1cmで表面撫で調整にヘラ磨き。内面撫でとヘラ削り。4は甕形土器である。表面撫で調整、内面は工具による撫で調整。口径32.4cm、頸部径29.7cm、胴部最大径33.4cm。5は川原礫を利用した輝石安山岩製の磨石・敲石である。半分欠損している。長さ $8 + \alpha$  cm、幅約11.5cm、厚さ6.8cm、重さ $942.4 + \alpha$  g。



第66図 折立遺跡47~52号竪穴断面図 (1/60)

#### 50号竪穴（第65、66図）

調査区の東端に位置する方形プランの竪穴である。竪穴は長径約3.6m、短径3.2mの長方形プランで、確認面から床面までの深さは35cmである。48号、51号、52号竪穴と切り合い関係にある。

#### 出土遺物（第67図-6~8）

6は口縁部が大きく外反し、胴部が球形に誇張される甕である。表面縦の刷毛目調整、内面は撫で調整。口径22.8cm、頸部径16.6cm。7、8は半月形の土器片加工品である。弦は打ち欠き、弧は粗い研磨で整形している。7は長さ6.1cm、幅4.8cm、厚さ1.5cm、重さ50.4g。8は弧状の両端にノッチを持つものである。長さ6.9cm、幅4.4cm、厚さ1cm、重さ38.2g。

#### 51号竪穴（第65、66図）

調査区の東端に位置する方形プランの竪穴である。竪穴は北西コーナーを確認できる。確認面から床面までの深さは30cmである。竪穴の西端には焼土や炭化物が纏まった炉跡が遺存している。49号、50号、52号竪穴と切り合い関係にある。

#### 出土遺物（第67図-9~12）

9は壺の複合口縁部である。櫛描波状文を施文する。10は半月形の土器片加工品である。全周囲を研磨して整形している。長さ4.1cm、幅2.5cm、厚さ0.8cm、重さ10.7g。11は壺の頸部から胴部である。頸部に刻目突帯文を施し、表面は刷毛目調整、内面は撫で調整で指頭痕。胴部は長く張りが無い。頸部径9cm、胴部最大径25cm。12はチャート製の凹基式石鏃である。鋸歯状鏃である。長さ2.4cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重さ1g。

#### 52号竪穴（第65、66図）

調査区の東端に位置する方形プランの竪穴である。竪穴は北西コーナーを確認できる。確認面から床面までの深さは30cmである。48号、50号、51号竪穴と切り合い関係にある。

#### 出土遺物（第67図-13）

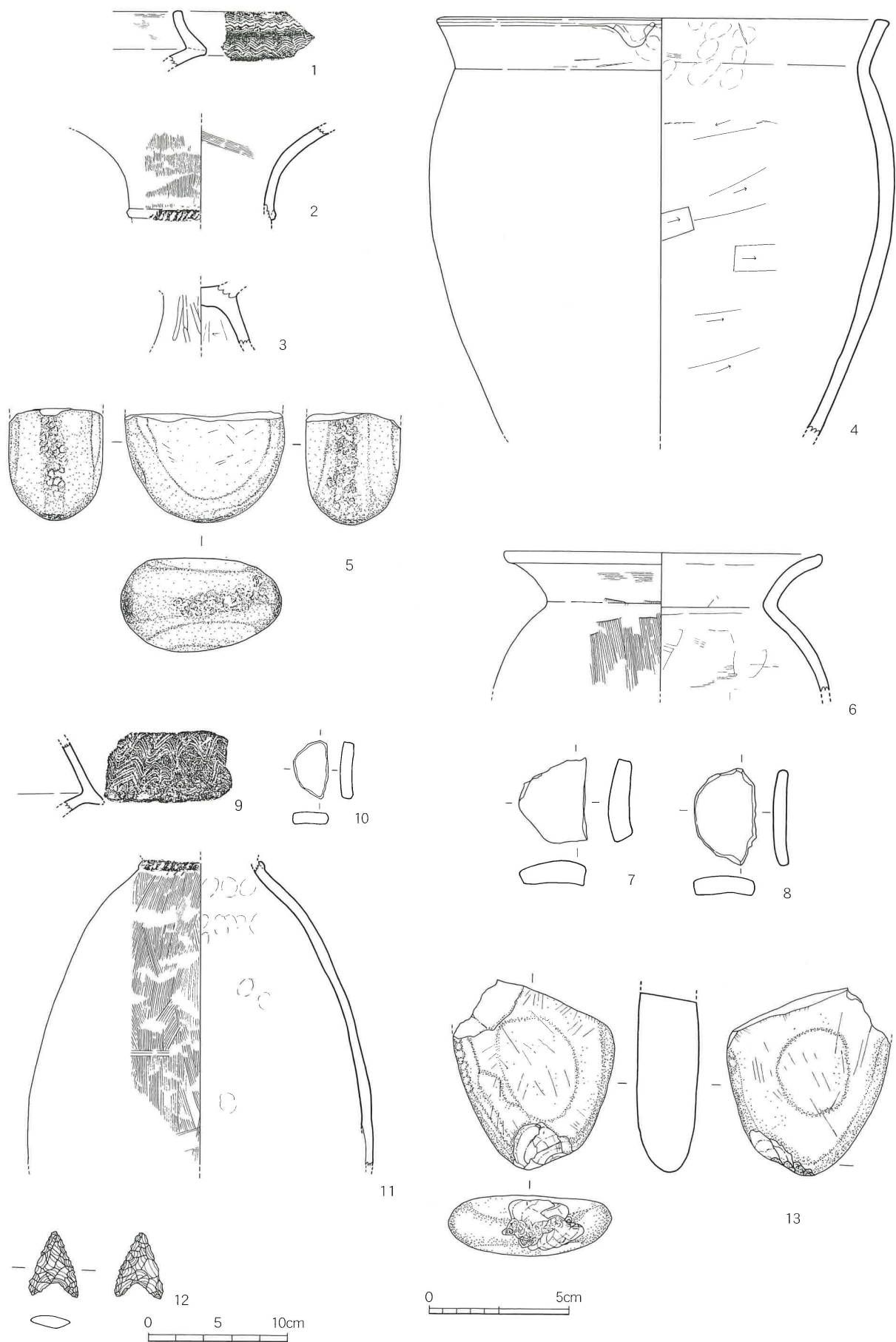
13は磨石と敲石である。表裏は磨り面で側面は敲き痕跡が残っている。半分欠損している。長さ13.4cm、幅11.7cm、厚さ4.3cm、重さ931.3g。砂岩製。

#### 53号竪穴（第68図）

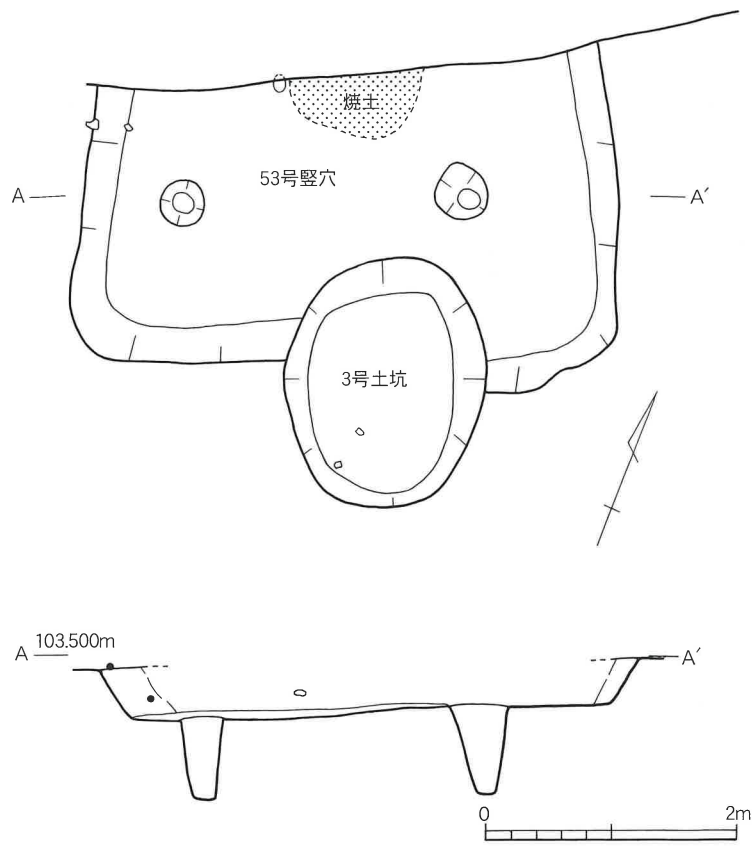
調査区の中央部の北壁に位置する方形プランの竪穴である。竪穴は半分が調査区外に遺存している。竪穴の長軸か短径かは判らないが一辺の長さは約4.1~4.4mである。確認面から床面までの深さは約40cmである。竪穴北壁中央部には焼土炉が位置している。柱穴が2本検出されているが4本支柱の一部であろう。柱穴の深さは65~70cmである。3号土坑と切り合い関係にある。

#### 出土遺物（第69図）

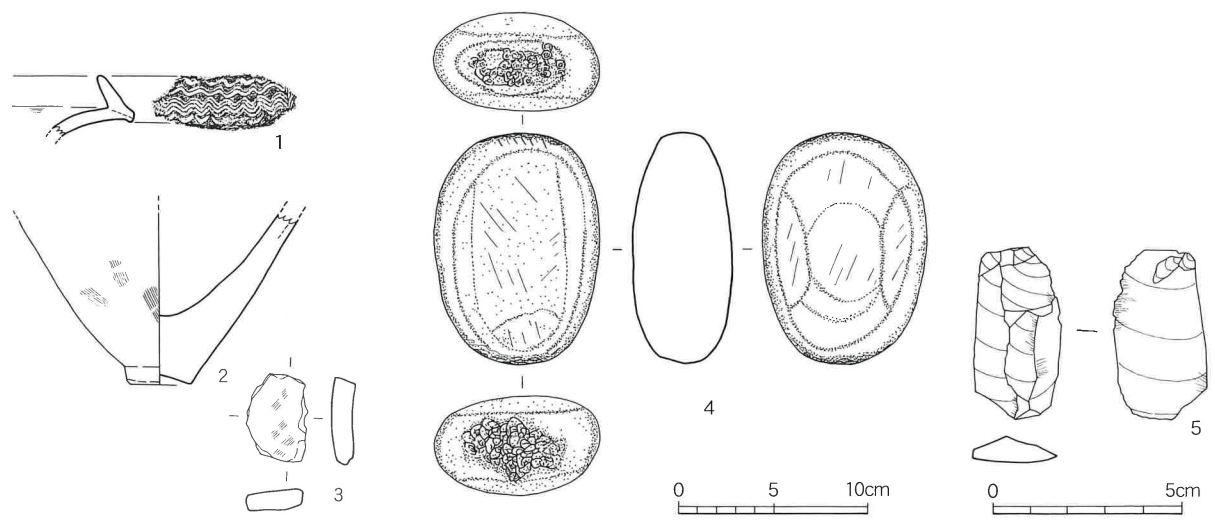
1は壺の複合口縁部である。立ち上がりは低い櫛描波状文を上下2段に施文する。2は上げ底の底部である。表面は刷毛目と撫で調整、内面は撫で調整。底部径3.4cm。3は半月形の土器片加工品である。全周囲を粗く研磨して整形している。長さ4.7cm、幅3.2cm、厚さ1.1cm、重さ19.8g。4は楕円状の川原礫を利用した磨石・敲石である。表裏を磨石、両側端を敲石として使用している。長さ12.3cm、幅約8.7cm、厚さ5.2cm、重さ855.6g。5は旧石器時代の縦長剥片である。長さ4.6cm、幅2.3cm、厚さ0.7cm、重さ8.3g。流紋岩製。



第67図 折立遺跡49号(1~5)、50号(6~8)、51号(9~12)、52号(13) 竪穴出土遺物実測図 (1/4、1/2)



第68图 折立遺跡53号竖穴実測図 (1/60)



第69图 折立遺跡53号竖穴出土遺物実測図 (1/4、1/2)



## 土坑

### 1号土坑（第70図）

調査区の中央部の北寄りに位置する楕円状土坑である。長軸を南北に取り、長径1.9m、短径1.14mを測る。確認面から床面までの深さは約40cmである。2号土坑を切る関係にある。遺物の出土はない。

### 2号土坑（第70図）

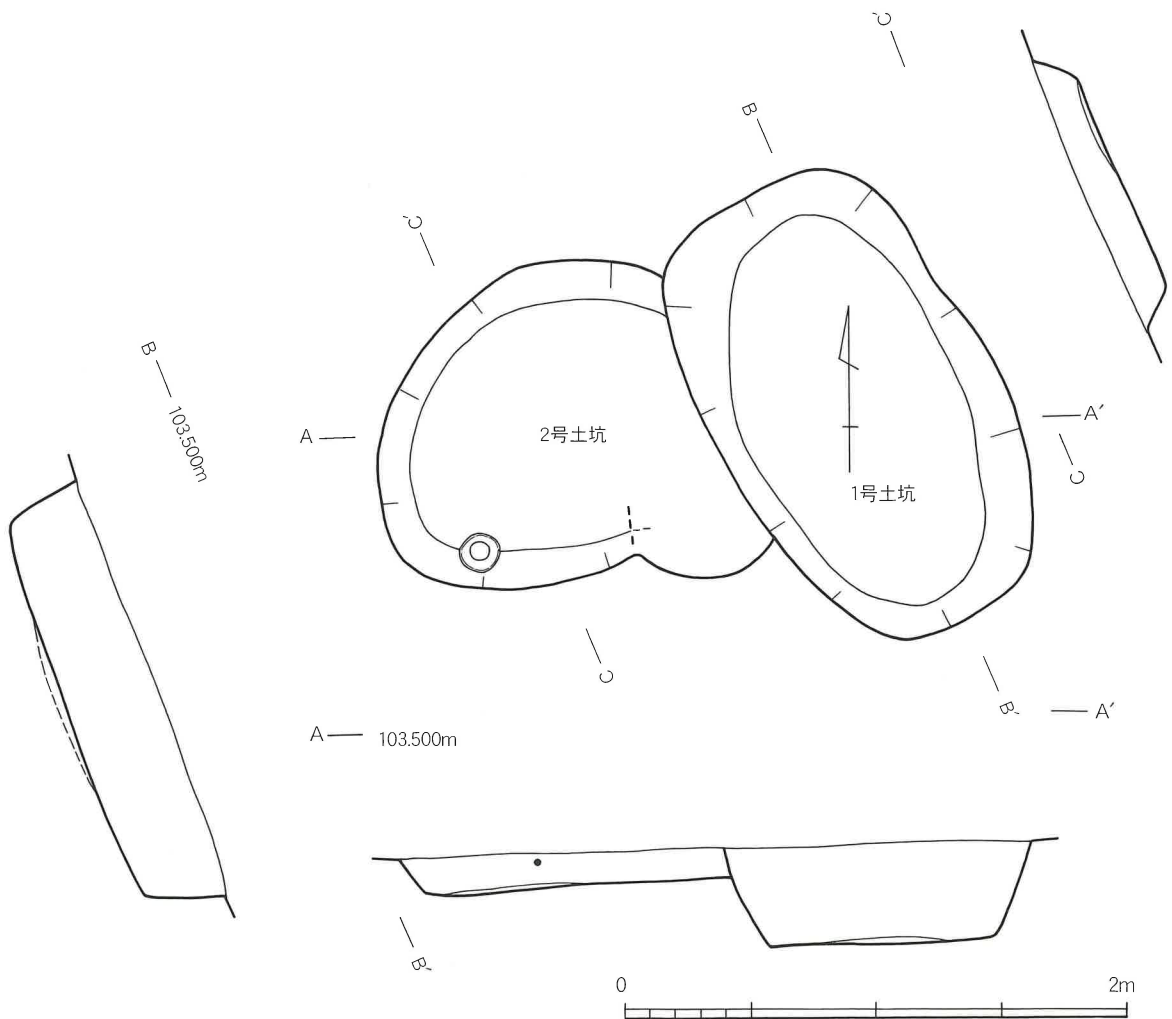
調査区の中央部の北寄りに位置する歪な楕円状土坑である。長軸を東西に取り、長径約1.65m、短径約1.3mである。確認面から床面までの深さは約16cmである。1号土坑から切られる関係にある。

### 出土遺物（第71図）

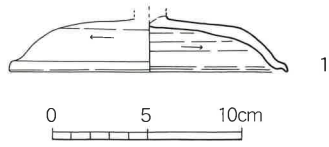
1は土師器の坏蓋である。蓋中央部の摘みは欠損している。鳥の嘴状の口径は14.9cmで器高は2.8cmである。表裏は回転ヘラ磨き調整である。

### 3号土坑（第68、72図）

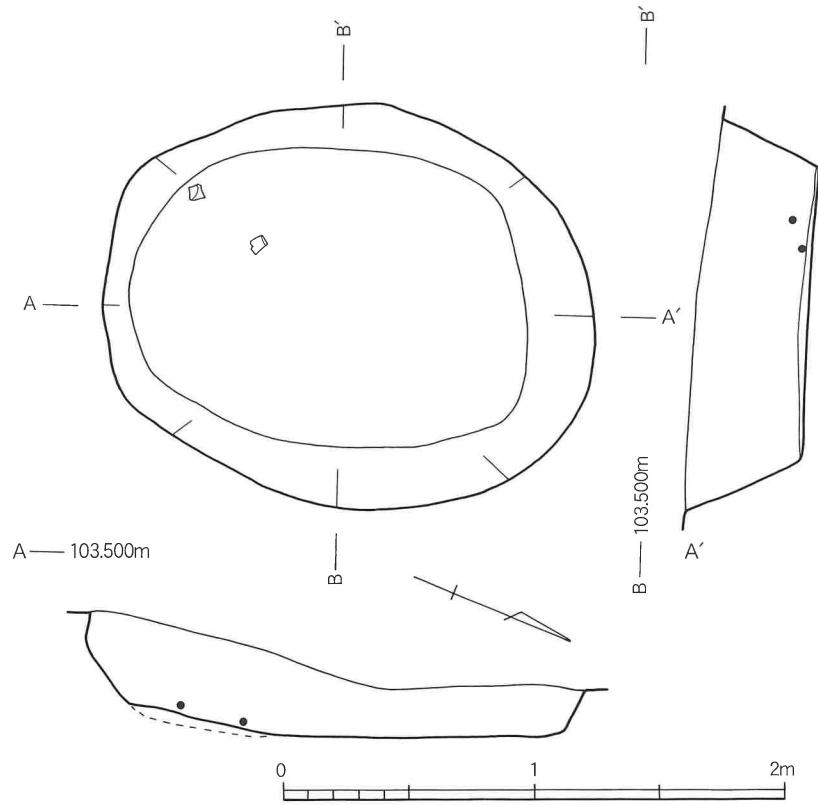
調査区の中央部の北壁に位置する53号竪穴を切る関係にある。長軸を南北に取り、長径が2m、短径が1.6mの楕円状土坑である。確認面から床面までの深さは約20～35cmである。



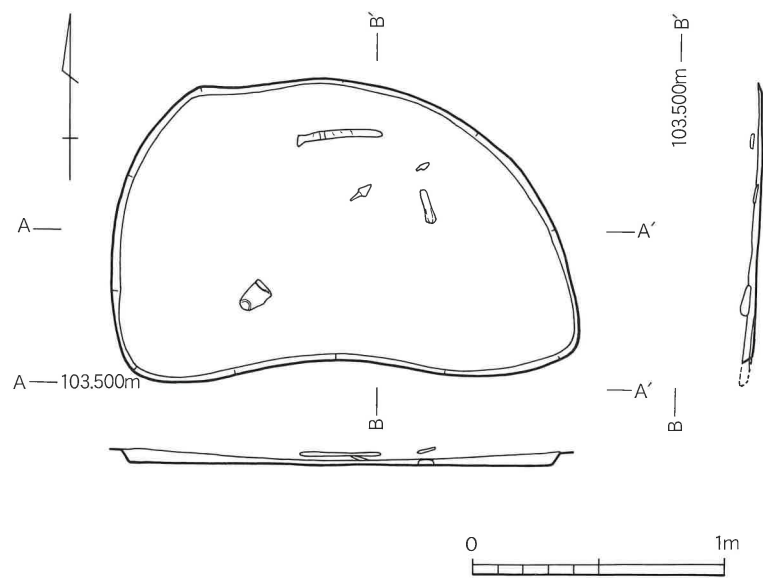
第70図 折立遺跡1、2号土坑実測図（1/30）



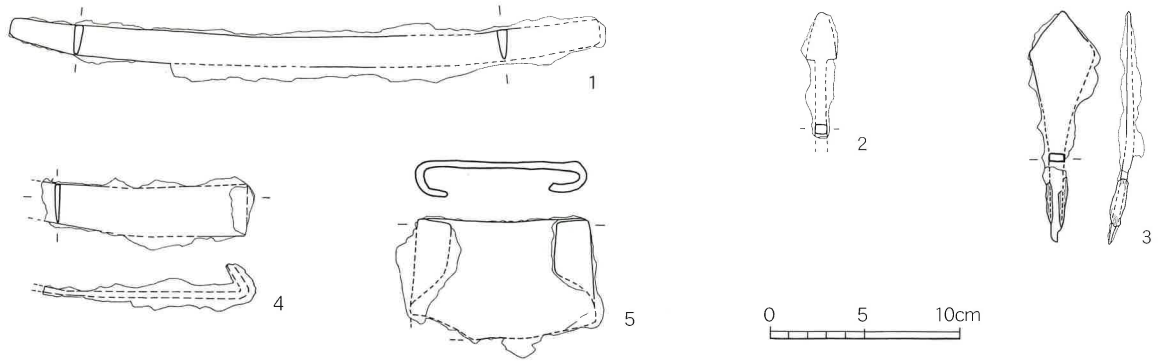
第71图 折立遺跡 2号土坑出土遺物実測図 (1/4)



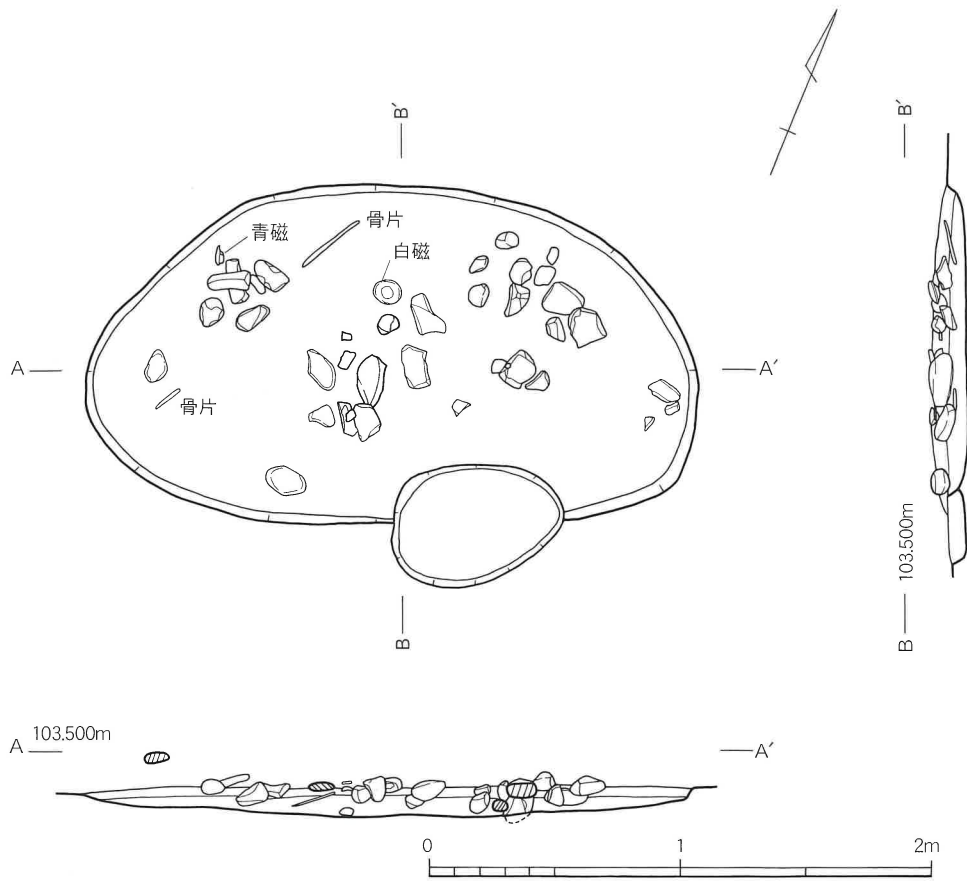
第72图 折立遺跡 3号土坑実測図 (1/30)



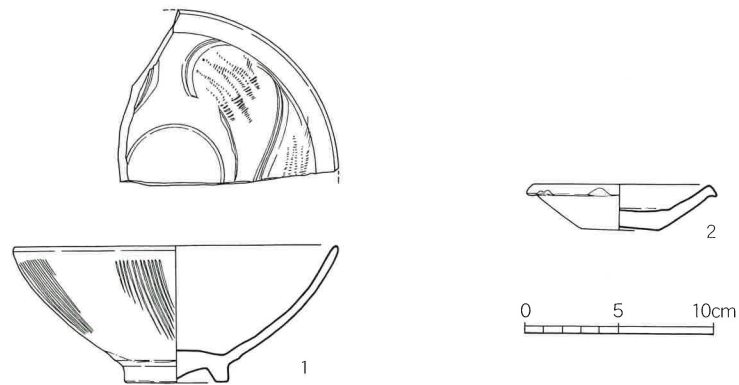
第73图 折立遺跡 4号土坑実測図 (1/30)



第74图 折立遺跡 4号土坑出土遺物実測図 (1/4)



第75图 折立遺跡 5号土坑実測図 (1/30)



第76图 折立遺跡 5号土坑出土遺物実測図 (1/4)

#### 4号土坑（第73図）

調査区の西端の中央部に位置する歪な土坑である。長軸を東西に取り、長径が1.88m、短径が1.16mの埋葬用の土坑墓である。確認面から床面までの深さは約2～5cmである。床面には短刀、鉄鏃、鉄鎌、鉄製鋤鋤が遺存しており、副葬品と推察できる。

#### 出土遺物（第74図）

1は短刀である。長さ31.3cm、幅1.6cm、厚さ0.5cm、重さ126.1g。2、3は鉄鏃である。2は長さ6.5cm、幅1.6cm、厚さ0.5cm、重さ11.6g。3は基部に桜の木の皮が巻かれていた。長さ12.4cm、最大幅3.5cm、厚さ0.4cm、重さ37.4g。4は鉄鎌である。基部は折り曲げている。長さ11cm、幅2～2.8cm、厚さ0.35cm、重さ84.3g。5は鉄製鋤鋤である。鉄板の両端部は丸みを帯びて折り曲げて着柄部を作っている。着柄部は約1.6cmと2cmである。方形板刃先。長さ6.1cm、幅9.1cm、厚さ0.4cm、重さ180.2g。

#### 5号土坑（第75図）

調査区の西寄りの中央部に位置する楕円状土坑である。長軸を東西に取り、長径が2.46m、短径が1.35mである。確認面から床面までの深さは約10cmである。土坑内には骨片が複数検出でき礫が多数確認できた。土坑墓であろうか。

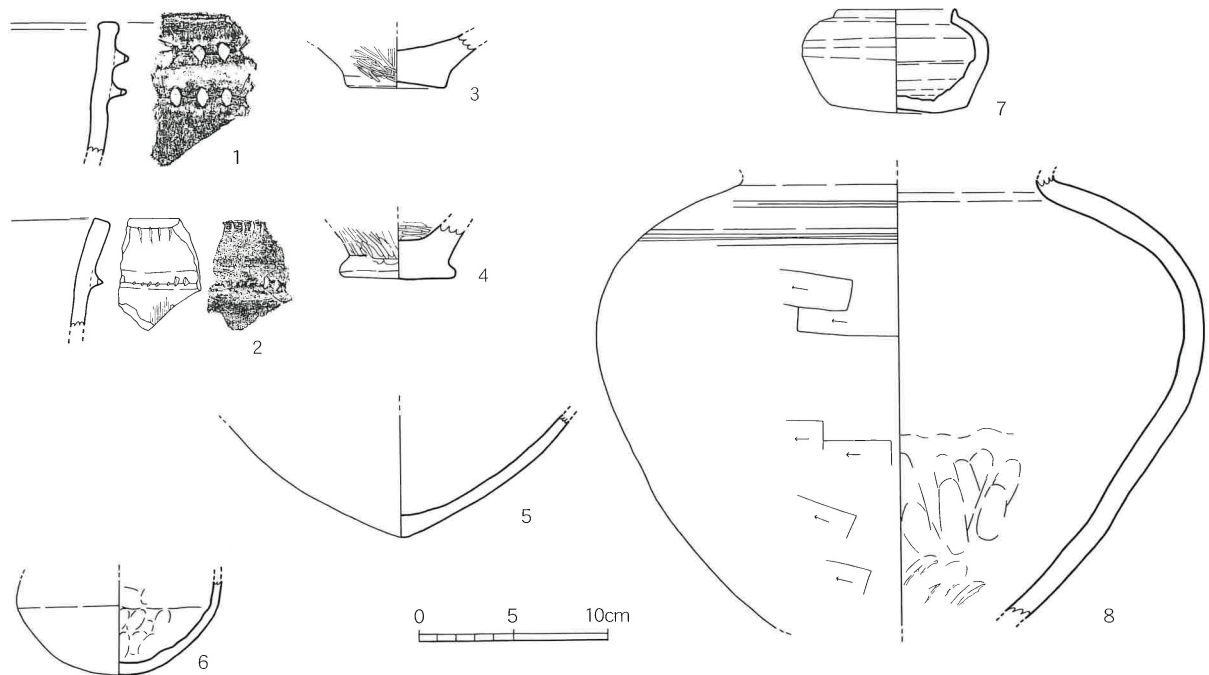
#### 出土遺物（第76図）

1は黄緑色をした同安窯系の高台付青磁碗である。表面は縦方向の櫛目文、内面は櫛点描文や細線文が施文されている。口径17.2cm、底径5.6cm、器高7.2cmである。

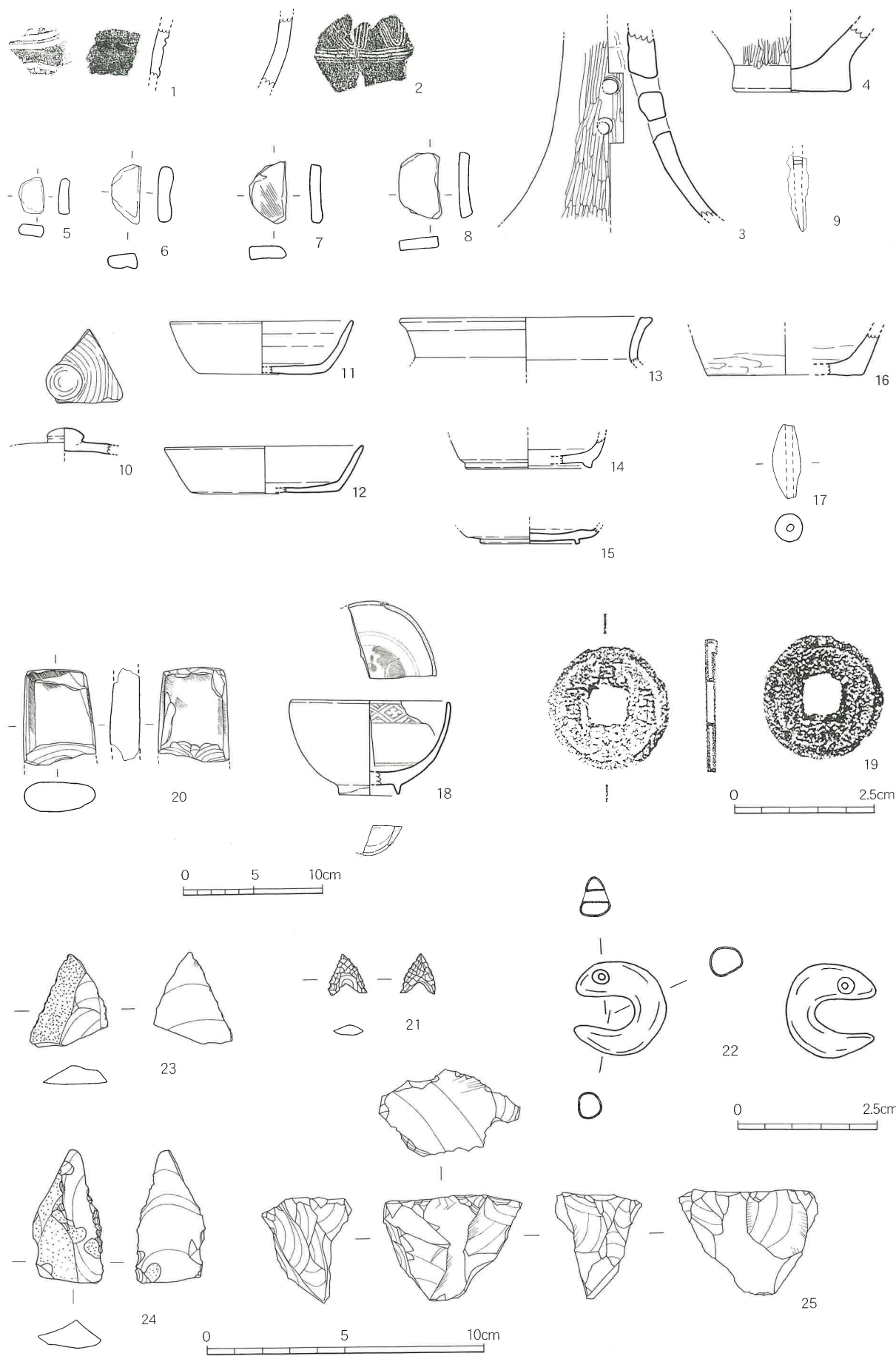
2は白磁の皿である。口縁部が数箇所打ち欠かれている。底部は露胎で全面に透明釉。口径10.1cm、底径4.2cm、器高2.4cmである。

#### 第4調査区出土遺物 1（第77図）

1、2は下城式土器の甕である。1は口縁下に二条の刻目突帯が廻っている。表裏撫で調整。



第77図 折立遺跡第4調査区出土遺物実測図1（1/4）



第78図 折立遺跡第4調査区出土遺物実測図2 (1/4、1/2、1/1)

2は口唇外側に刻目を施し、口縁下に一条の刻目突帯が廻っている。

3、4は平底部である。3はやや上げ底を呈し、底径5.4cmである。表面はヘラ磨きで内面に炭化物の付着あり。4は底径6.3cmである。表裏面はヘラ磨き。

5は尖底である。表裏撫で調整。内面に炭化物付着。

6は丸底部である。表裏撫で調整で内面には指頭痕跡を残す。胴部の最大径は11cmである。

7は土師器の小壺である。口径6.4cm、胴部最大径9.8cm、底径7.3cm、器高5.5cmである。表裏面は回転撫で調整で底部は回転ヘラ切り。

8は土師器の甕である。肩部の二ヶ所に3～5条の細線が廻っている。表面はヘラ削り後横撫で調整。内面横撫で調整と指頭圧痕を残す。頸部径15.4cm、胴部最大径32cm。

#### 第4調査区出土遺物2（第78図）

1は縄文後期の土器である。沈線の区画内に列点文を施したものである。

2は弥生後期の甕の肩部の破片である。櫛描波状文と横走櫛痕を組み合わせて施文している。

3は高杯の脚部である。表面は縦方向のヘラ磨きで内面は絞り痕や指頭痕を残している。上下二段に円形の透かしが4箇所にある。

4は底径8.6cmの平底である。表面はヘラ磨き、内面は撫で調整。5～8は半月形の土器片加工品である。周縁を研磨して整形している。5は長さ2.5cm、幅1.8cm、厚さ0.7cm、重さ5.3g。6は長さ4.2cm、幅2.1cm、厚さ0.9cm、重さ10.5g。7は長さ4.4cm、幅2.7cm、厚さ0.75cm、重さ11.7g。8は長さ4.7cm、幅3.1cm、厚さ0.8cm、重さ15g。

9は鉄鏃の茎部である。現長で長さ5.2cm、幅0.7cm、厚さ0.3cm、重さ7.4g。

10は土師器の宝珠摘み付きの蓋である。

11、12は土師器の坏である。表裏は回転撫で調整。底部は回転ヘラ切り。11は口径13.3cm、底径9.3cm、器高3.7cmである。12は口径14.4cm、底径10.8cm、器高3.4cmである。

13は須恵器の甕の口縁部である。表裏撫で調整で口唇部はやや幅広である。口径18.4cm、頸部径16cmである。

14、15は須恵器の高台付の坏である。14は低い高台で底径7.2cm。15は表裏撫で調整で底径9.2cm。

16は須恵器の平底部である。表面はヘラ磨き、内面はヘラ削りである。底径11.2cm。

17は土錘である。孔径は0.5cm。全長は5.3cm、最大幅2.1cm、重さ16.5g。

18は18世紀後半の肥前の染付碗である。口径11.4cm、底径4.4cm、器高6.7cmである。

19は寛永通寶である。直径2.2cm、厚さ0.12cm、重さ2g。

20は蛇紋岩製の磨製石斧の基部である。刃部を大きく欠損している。長さ $6.5 + \alpha$ cm、幅5cm、厚さ2.1cm、重さ $115.7 + \alpha$ g。

21はチャート製の鋸歯状石鏃である。長さ1.4cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm、重さ0.3g。

22は翡翠製の勾玉である。長さ1.7cm、幅1.7cm、厚さ0.5cm、重さ2g。縄文晩期に同じ形態のものがある。

23、24は旧石器時代の石器である。ホルンフェルス製の使用痕の付いた剥片である。24は長さ4.8cm、幅2.3cm、厚さ0.9cm、重さ10.2g。

25は旧石器時代の石器である。ホルンフェルス製の舟野型細石核の未成品である。打面の長さ5cm、幅3cm。

## 第4章 総括

折立遺跡の発掘調査は百枝浅瀬野津線道路改良工事に伴うものであり、平成17年6月～平成17年10月にかけて実施された。調査区は遺構・遺物の確認された第1調査区～第4調査区の4箇所で行われた。調査区の遺構確認面はいずれも表土下約1.5m程度と深く、黒土の堆積が何枚も重なった黒ボクという火山灰土層であり、遺構の検出は困難を極めた。特に、遺構の切り合い関係や竪穴遺構に伴う柱穴の検出は不十分であり、不確定要素の強いものであった。

第1調査区は竪穴遺構10基と掘立柱建物遺構1基、第2調査区は竪穴遺構18基、第3調査区は竪穴遺構18基と掘立柱建物遺構2基、第4調査区は竪穴遺構7基と土坑5基を検出している。4つの調査区を包括した範囲は計約180mの長さであり、検出遺構の合計は、竪穴遺構53基と掘立柱建物遺構3棟、土坑5基である。つまり、この調査区周辺には夥しい竪穴遺構が切り合い関係を保ちつつ遺存していることが推察できた。

ちなみに、折立遺跡の北東部に隣接する陣箱遺跡C地区では約200mの調査区内に43基の竪穴遺構が検出されている。折立遺跡と陣箱遺跡は大野川の第三段丘の基部付近に位置し、遺構分布の様相は東西に長く配置されたものであった。いずれも弥生後期～古墳前期の時期を主体とした竪穴住居の密集する集落跡であり、大規模なムラが展開していたと推察できる。

今回発掘調査した折立遺跡の中で注目される遺構としては、折立2号竪穴の花弁形住居跡である。二段掘りの竪穴で、支柱穴は中央竪穴の四隅や側壁中央部に配置するのが一般的である。浅い掘り込みの花弁部は遺存状態によって楕円状に検出されたり、削平を受けていたりして花弁の様相は変化するが、2弁～5弁が普遍的に確認できる。大野川中流域に点在するものでは、隣接する陣箱遺跡で2基、豊後大野市犬飼町の舞田原遺跡で4基、同市千歳町の鹿道原遺跡で3基が出土している。いずれも、弥生中期の下城式土器を主体とする。

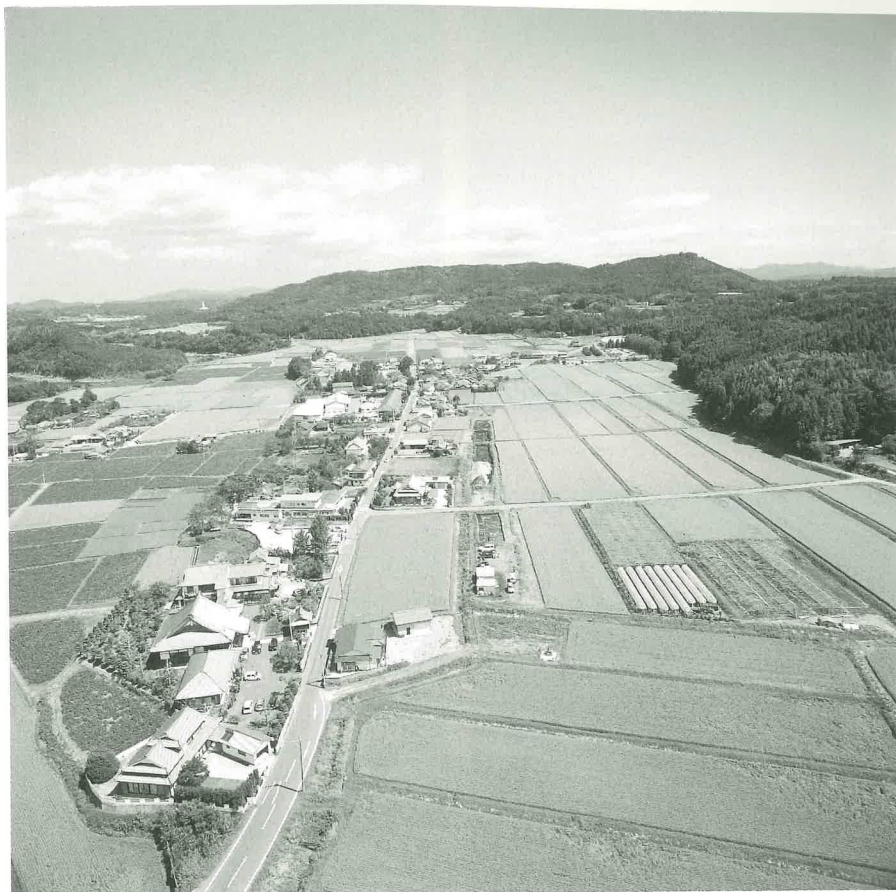
次に、折立11号竪穴で検出された支柱の抜き取り痕跡と竪穴の南壁に遺存する不定形土坑の用途、機能に関する問題は留意すべきである。大野川上・中流域の弥生後期～古墳前期の竪穴住居の支柱が抜き取られたことは、柱穴が楕円状に一方に広がっていることから以前より推測されてはいた。しかし、支柱を意図的に抜いた痕跡を最初に検証したのは、昭和61年度に発掘調査した陣箱遺跡3号竪穴の所見であろう。陣箱遺跡3号竪穴に遺存する7～8本の支柱穴は、竪穴の中心部へ向いて楕円状に掘り掘げられ、その側には各々黄褐色土がこんもりと堆積しており、この堆積土を除くと硬い住居跡の床面が現れる。つまり、柱の抜き取り痕跡であることが顕著に認識できた。その後、抜き取り痕跡は豊後大野市千歳町の鹿道原遺跡の発掘調査で徹底的に検証され、竪穴住居跡の約36パーセントに抜き取り痕跡が確認できた。鹿道原遺跡では、竪穴住居の切り合い関係が生ずる原因を、道で区画され、あらかじめ配分されていた限られた空間内での、支柱抜き取り痕跡、つまり支柱の再利用に象徴されるような竪穴の建て替えが繰り返し行われた結果だと推察した。折立遺跡にみられた多数の竪穴の切り合い関係もこの様な考え方で把握できる。

次に、折立11号竪穴で検出された竪穴南端中央部に位置している不定形土坑に関しては、今回、幾つかの新たな資料が出土している。それは、土坑内から発見された小さな骨片と土坑の上に並べられた拳大の礫の出土状態である。調査担当者の所見や土層断面の堆積状況から推察して、不定形土坑の構築は11号竪穴住居の機能している間か竪穴廃絶時と考えられることから、不定形土坑は土坑墓の一種と推量できそうである。かつて、豊後大野市犬飼町の舞田原遺跡や陣箱遺跡で用途や機能の検討を行ったことがあるが、今回の資料はこの様な所見に一脈通じるものがあり、今後、注意されるものであろう。

一方、折立遺跡では弥生後期～古墳前期の竪穴遺構に伴う遺構として、4本柱の掘立柱建物遺構が3基検出されている。一間×一間四角の掘立柱建物遺構は豊後大野市千歳町の鹿道原遺跡で注目され、これが長軸を並べて2～4棟一列に配置されていることから、古代の並び倉の先駆的な様相としての高床式倉庫群と推察された。折立遺跡では竪穴遺構の柱穴が検出し難い環境にあって、折立遺跡2号、3号掘立柱建物遺構が長軸を揃えて一列に配置されており、同様な遺構である可能性は高い。このような一間×一間四角の掘立柱建物遺構は豊後大野市三重町の陣箱遺跡、同市千歳町の高添遺跡等、同市千歳町の鹿道原遺跡とその周辺部の遺跡で検出されつつあり、極めて留意すべき現象である。

# 折立遺跡写真図版





折立遺跡（西上空から）



第1調査区調査風景（西から）



第2調査区（西から）



第3調査区（西から）

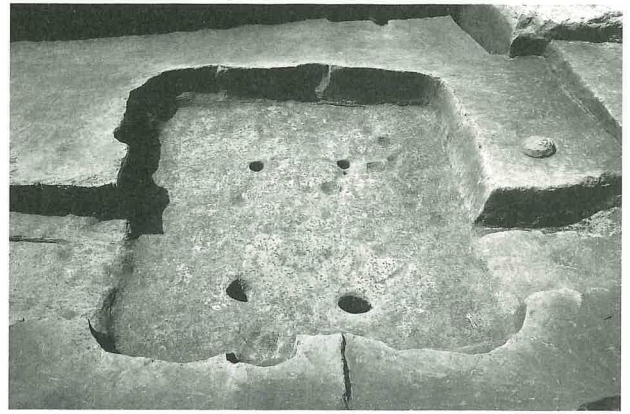


第4調査区（西から）

写真図版2



1号竖穴 (南から)



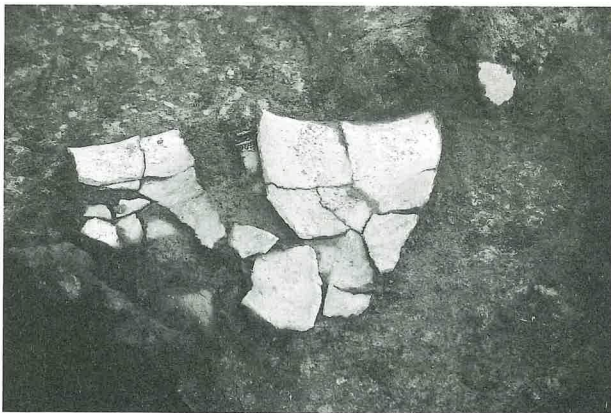
1号竖穴 (南から)



2号竖穴 (南から)



2号竖穴 (北から)



2号竖穴 土器出土状態



2号竖穴 紡鐘車出土状態



7号竖穴 (北から)



10号竖穴 (北から)



11号竪穴（北から）



11号竪穴（北から）



11号竪穴 集石土坑（北から）



11号竪穴 集石土坑（北から）



12号竪穴（南から）



15号竪穴（東から）



15号竪穴 床面の土器出土状態

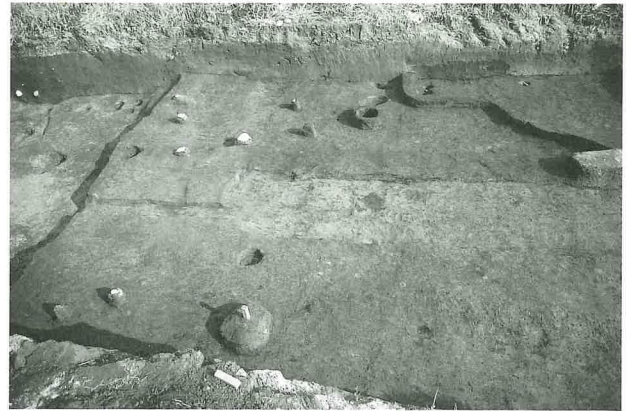


15号竪穴 土器出土状態

写真図版4



15号竪穴 鉄器出土状態



19号竪穴 (北から)



22号竪穴 (東から)



22、23号竪穴 (東から)



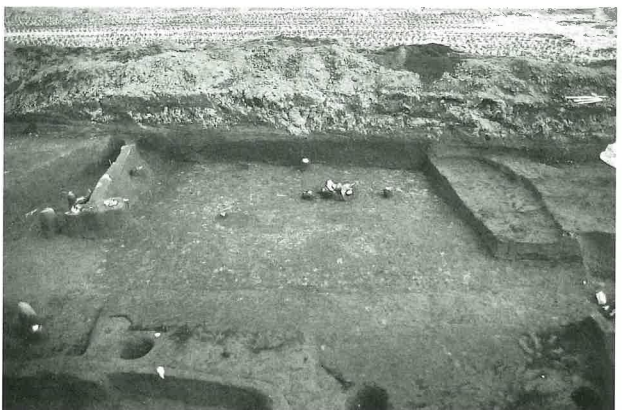
28号竪穴 (北から)



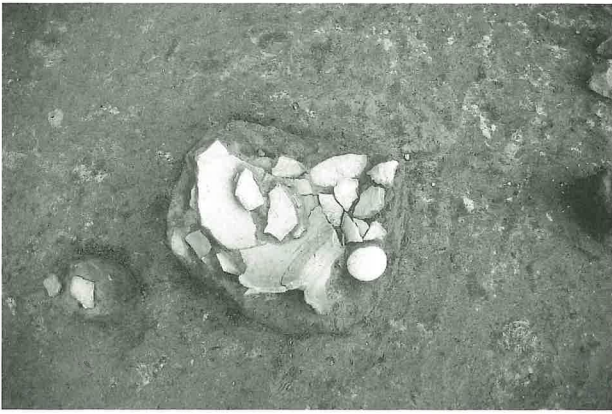
29号竪穴 (南から)



29号竪穴 (南から)



30号竪穴 (北から)



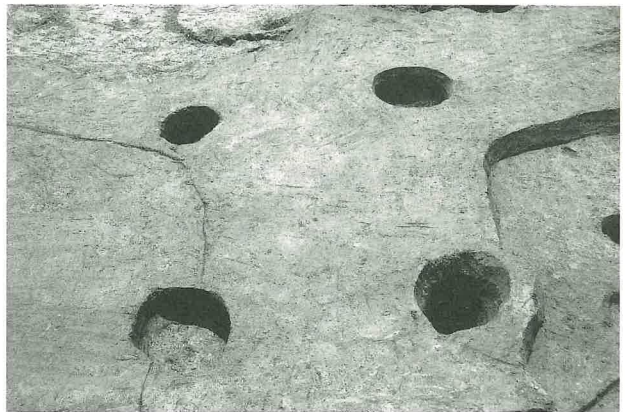
30号竖穴 土器出土状態



32号竖穴 (北から)



34号竖穴 (南から)



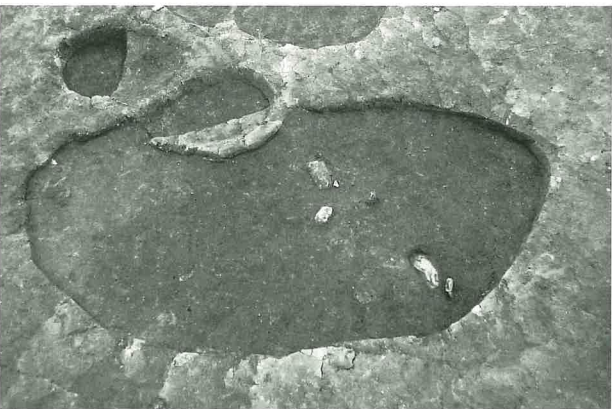
1号掘立柱 (北から)



4号土坑 (北から)



5号土坑 (北から)

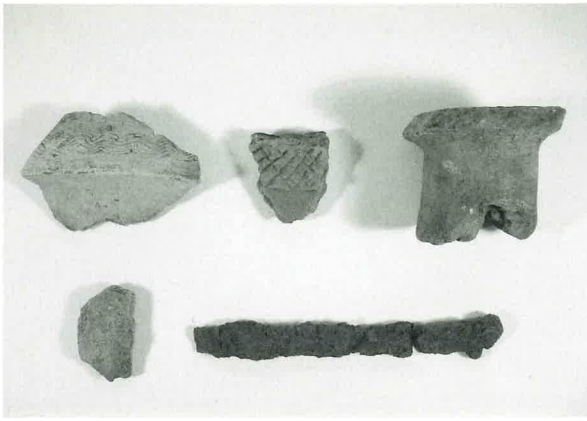


5号土坑 (北から)



勾玉出土状態

写真図版6



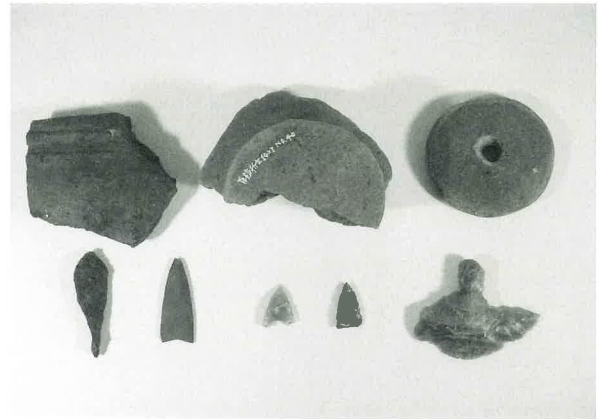
1号竖穴、第5図1~5



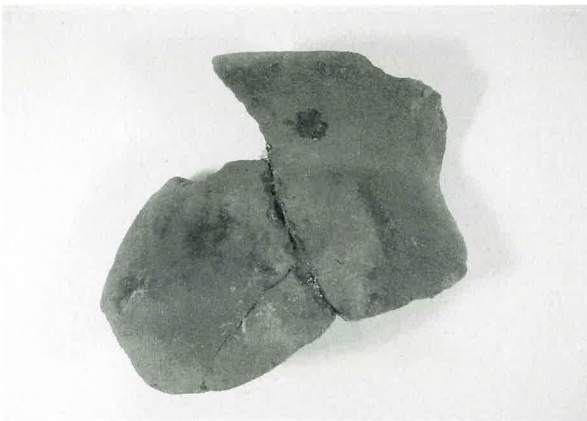
1号竖穴、第5図6



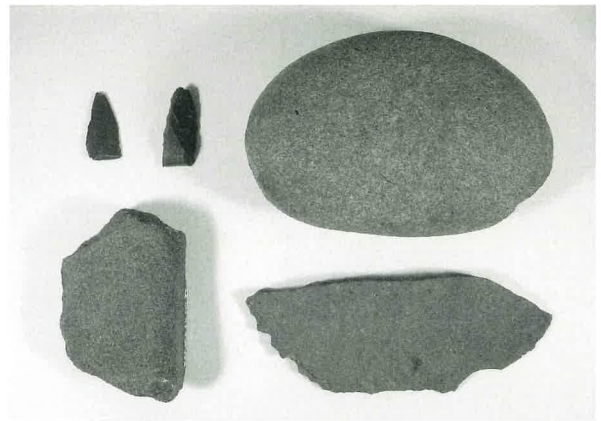
2号竖穴、第7図1、4



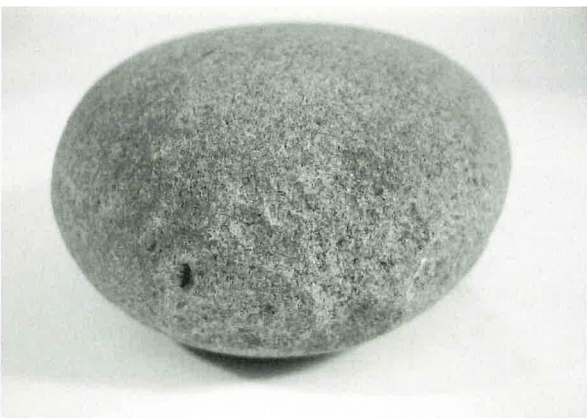
2号竖穴、第7図2、3、5~9、13



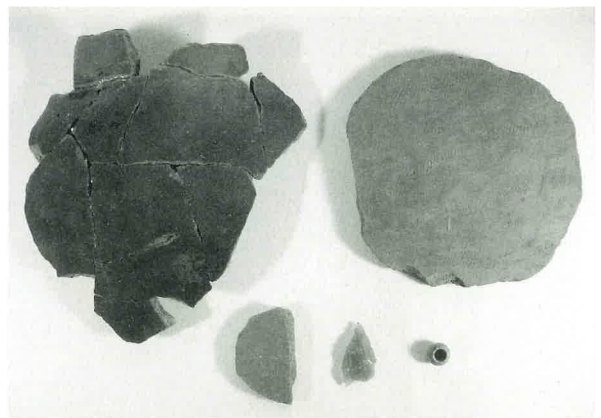
7号竖穴、第11図1



第14図4、5、7~9



第14図8



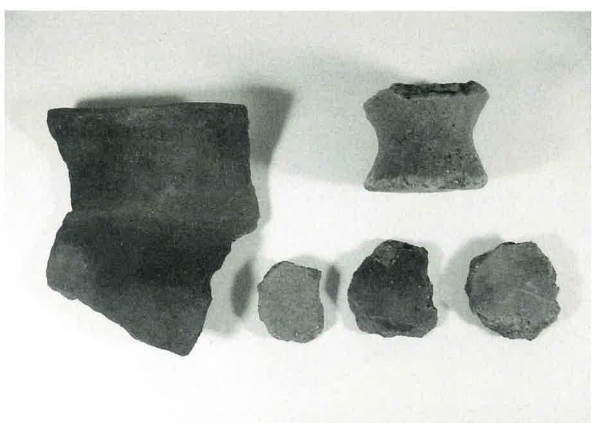
11号竖穴、第17図1~5



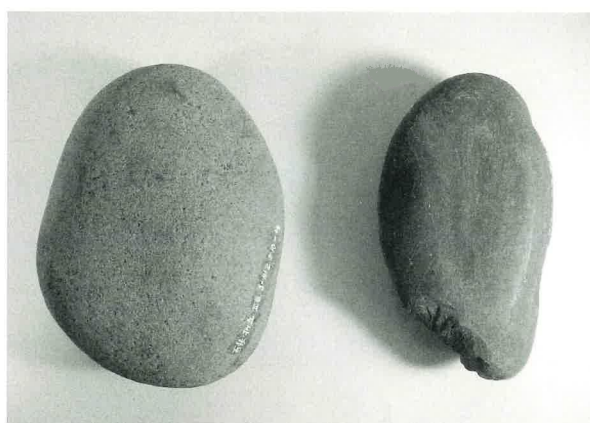
11号竖穴、第17图4（上）



11号竖穴、第17图4（下）



12号竖穴、第19图1~5



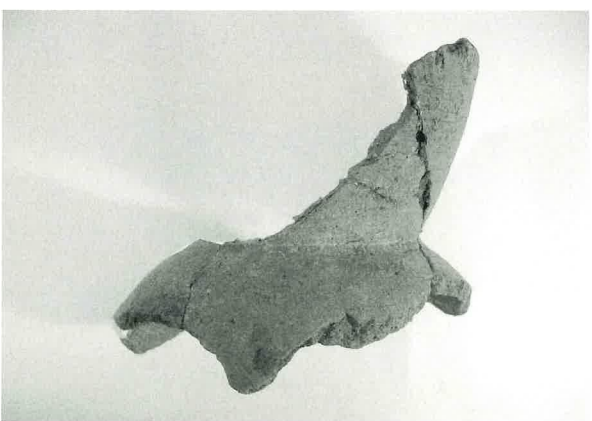
12号竖穴、第19图6、7



13、14号竖穴、第20图1、2



15号竖穴、第24图1



15号竖穴、第24图2

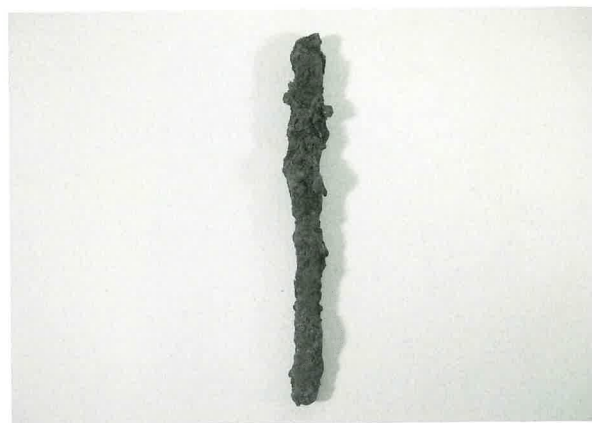


15号竖穴、第24图4

写真図版8



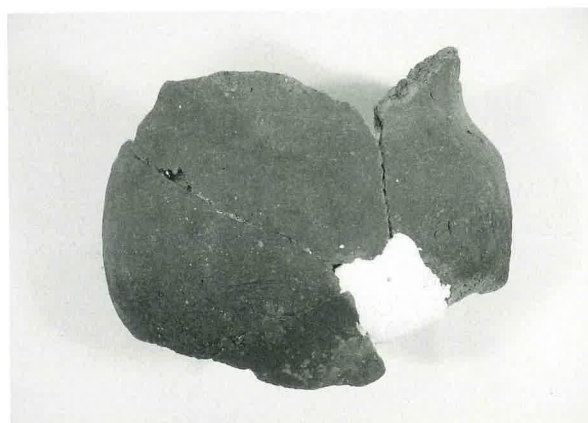
15号竖穴、第24图 5、8



15号竖穴、第24图 7



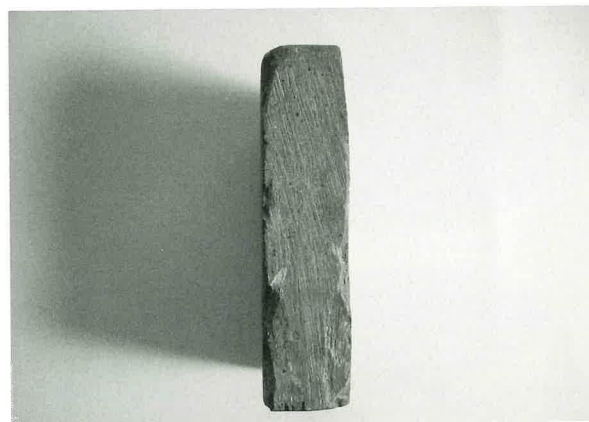
15号竖穴、第24图 8



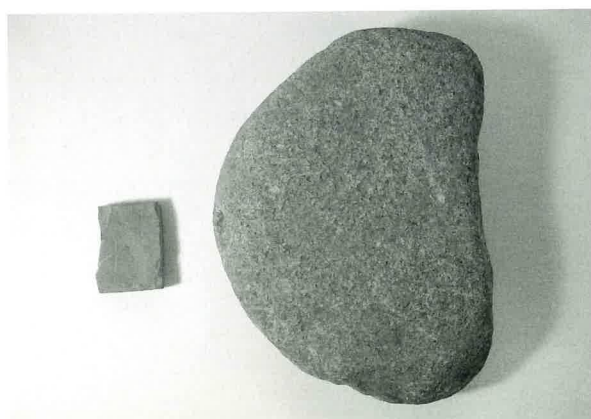
18号竖穴、第26图 2



19号竖穴、第28图 2



19号竖穴、第28图 2 (側面)



19号竖穴、第28图 2、3



21号竖穴、第31图 1





22号竖穴、第33图 1



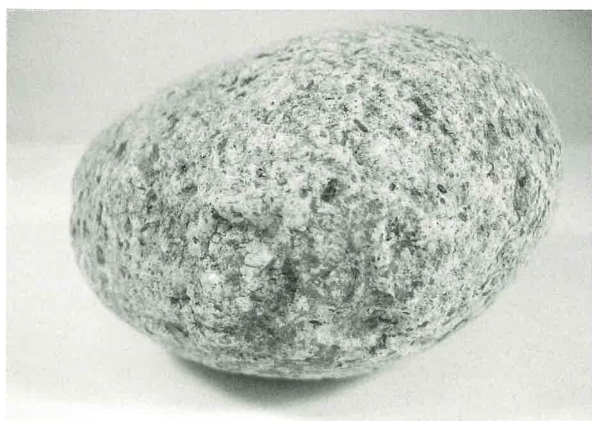
22号竖穴、第33图 2、3



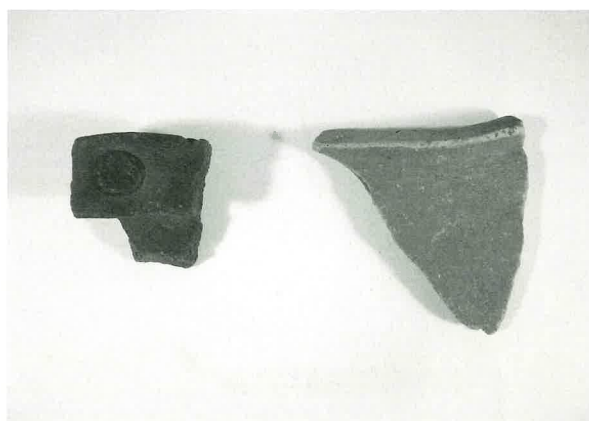
22号竖穴、第33图 4~9



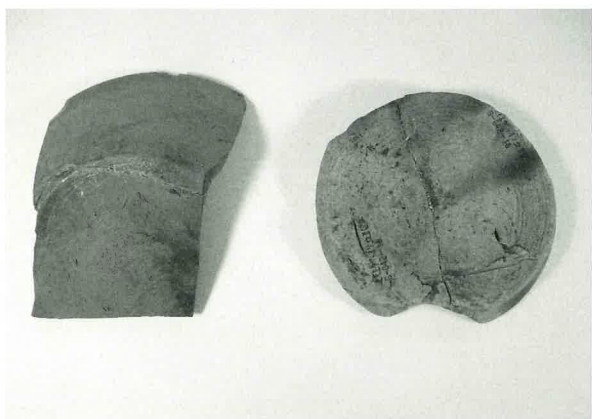
22号竖穴、第33图 10~12



27号竖穴、第36图 1



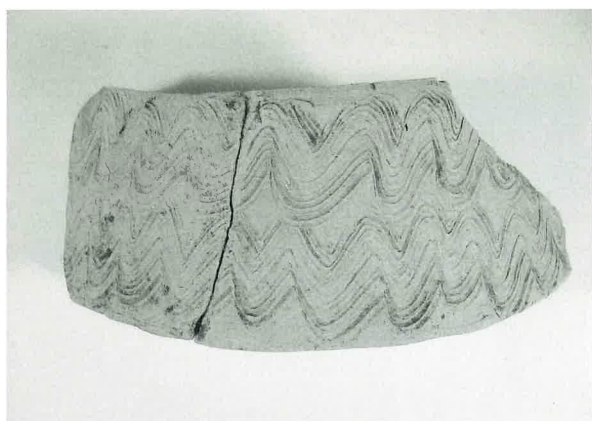
第37图 1、2



第37图 7、8



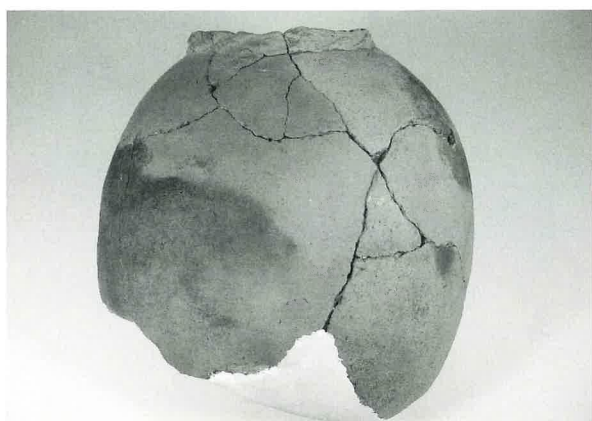
29号竖穴、第39图 1



29号竖穴、第39图2



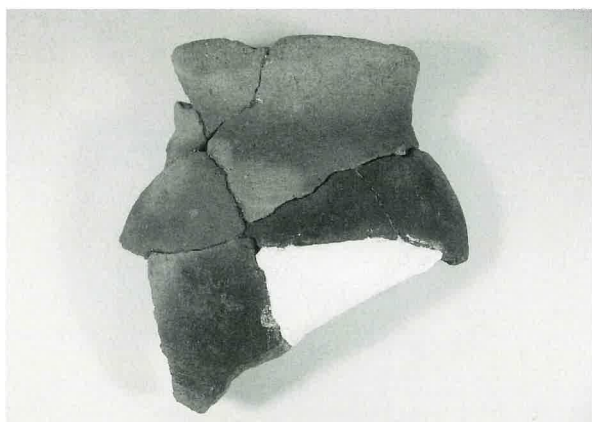
29号竖穴、第39图3



29号竖穴、第39图4



29号竖穴、第39图5



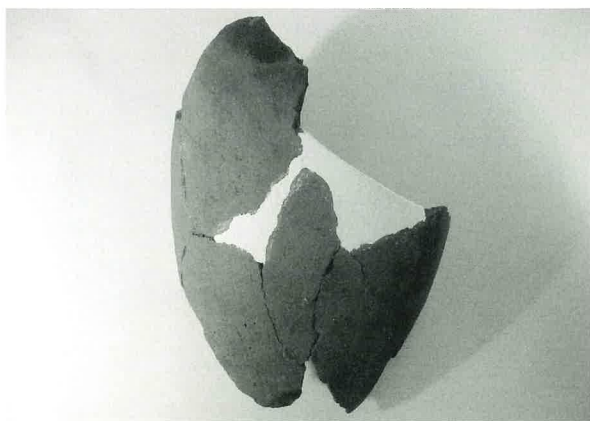
29号竖穴、第39图6



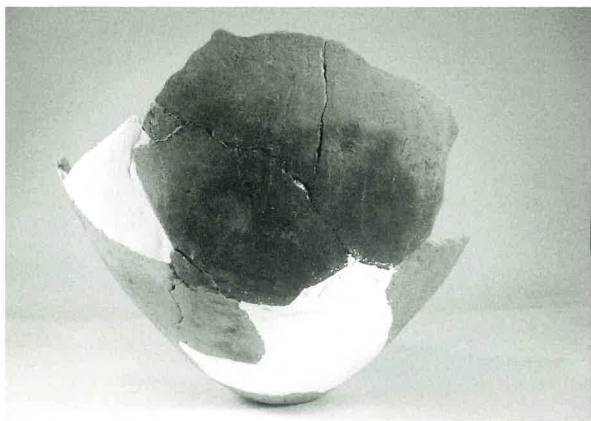
29号竖穴、第39图7



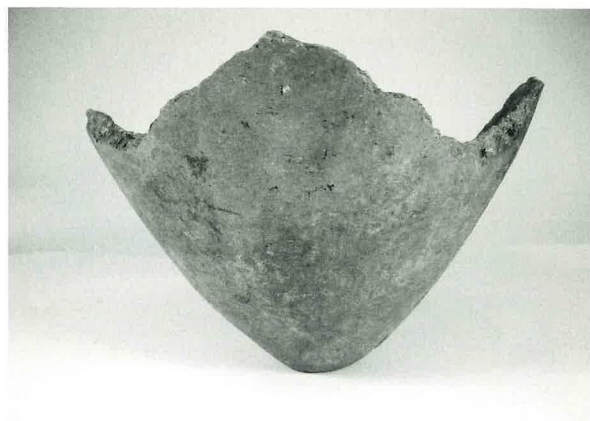
29号竖穴、第39图8



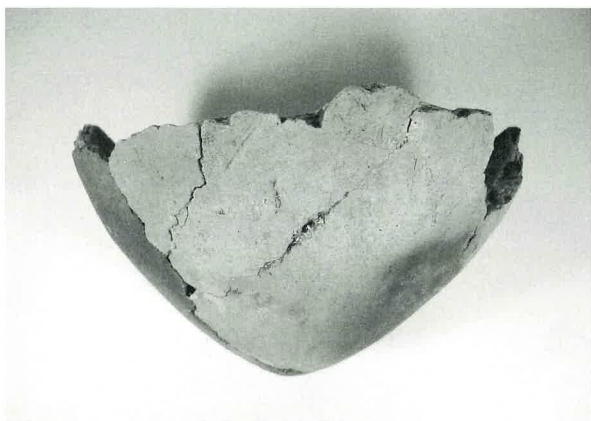
29号竖穴、第39图9



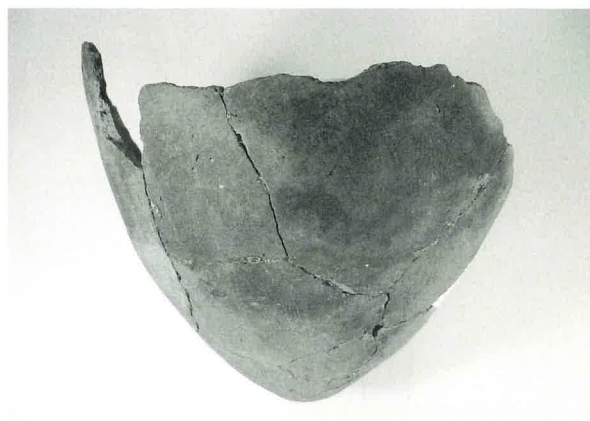
29号竖穴、第40图10



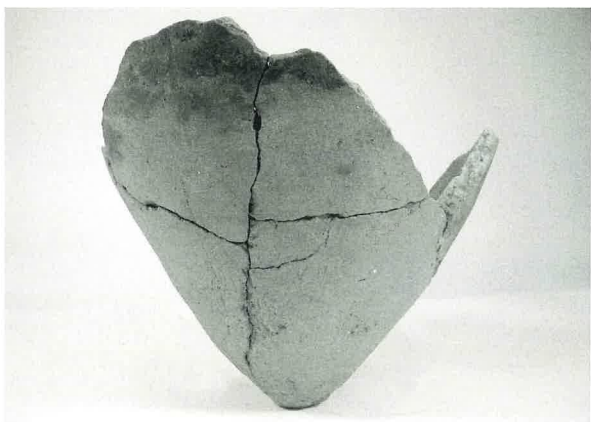
29号竖穴、第40图11



29号竖穴、第40图12



29号竖穴、第40图13



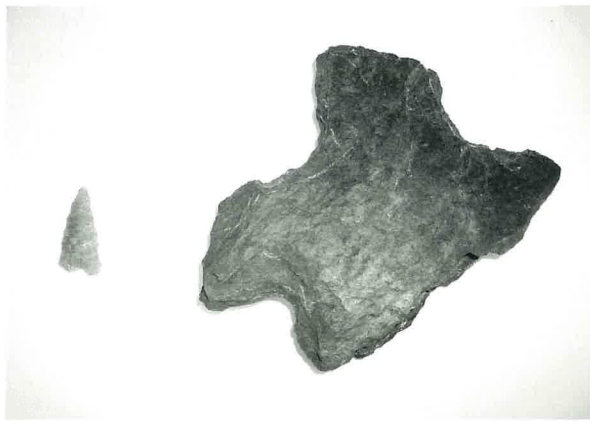
29号竖穴、第40图14



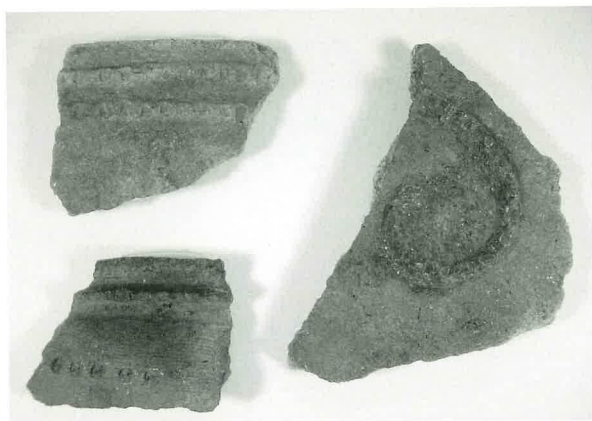
29号竖穴、第40图15



29号竖穴、第40图15 (底部)



29号竖穴、第40图16、17



30号竖穴、第42图 1、2、3



30号竖穴、第42图 4



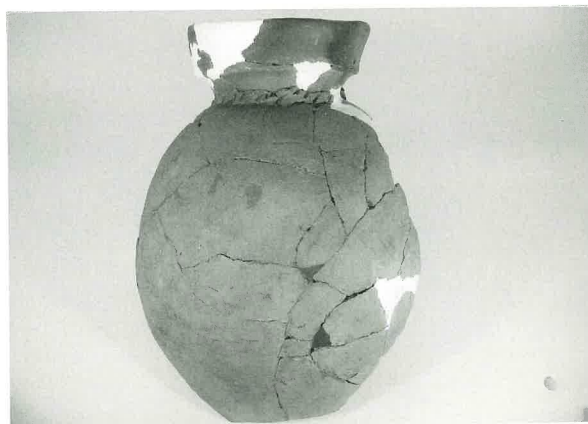
30号竖穴、第42图 5



30号竖穴、第42图 6、7



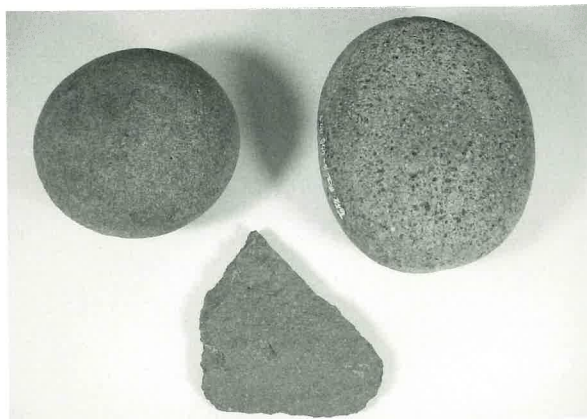
30号竖穴、第42图 7



30号竖穴、第44图 8



30号竖穴、第44图 8 (頸部)



30号竖穴、第44图 9~11



30号豎穴、第44図10



31号豎穴、第46図1



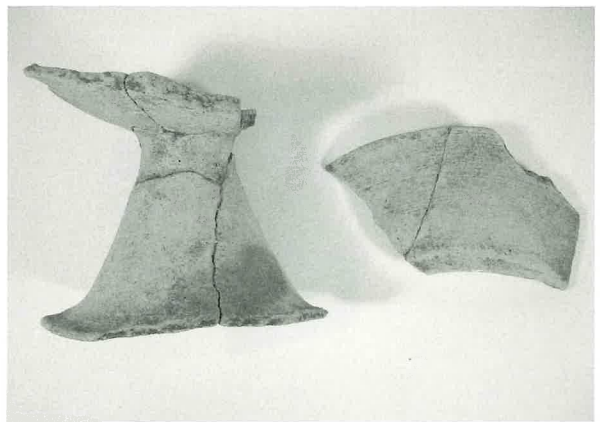
31号豎穴、第46図2



31号豎穴、第46図3



31号豎穴、第46図4



31号豎穴、第46図5、6

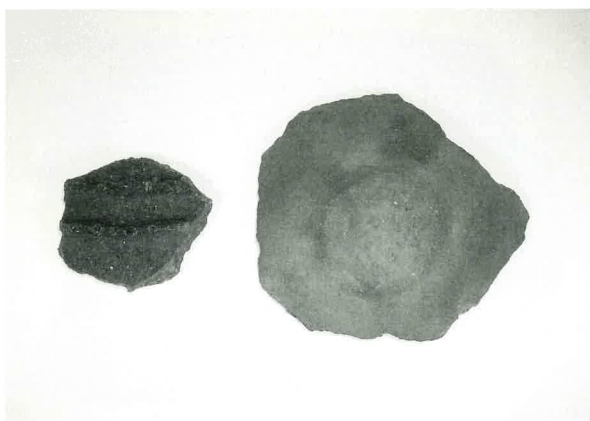


31号豎穴、第46図7、8

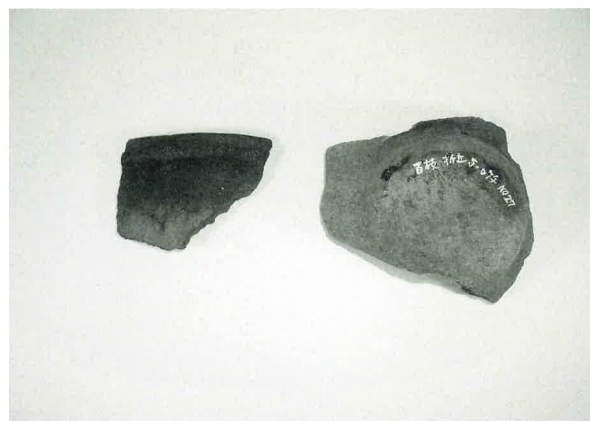


31号豎穴、第46図8 (側辺)

写真图版14



32号竖穴、第47图 1、2



34号竖穴、第50图 1、2



34号竖穴、第50图 3



34号竖穴、第50图 4、5



34号竖穴、第50图 6



34号竖穴、第50图 7



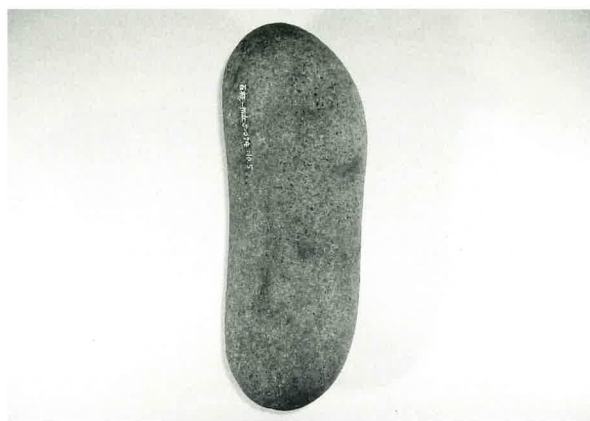
34号竖穴、第50图 7 部分扩大



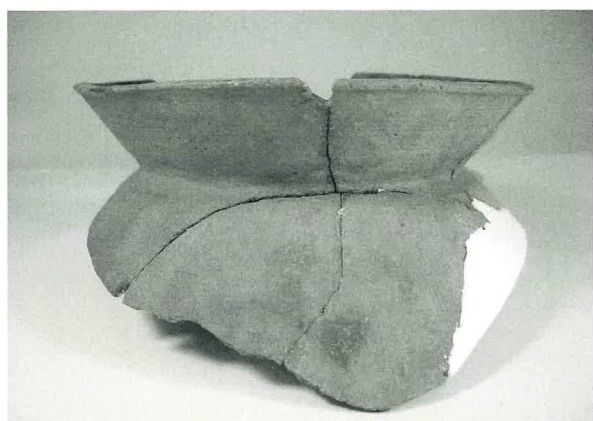
34号竖穴、第50图 8



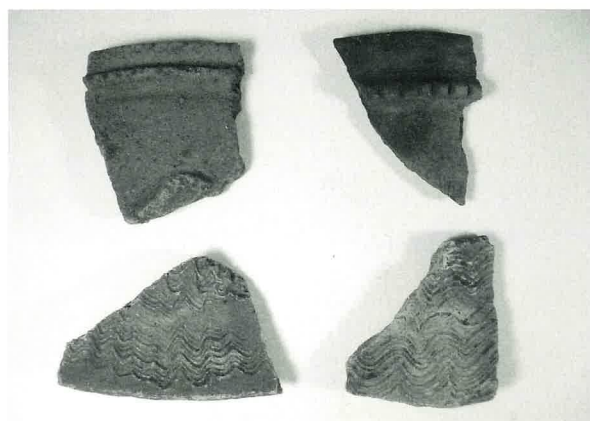
34号竖穴、第50图9



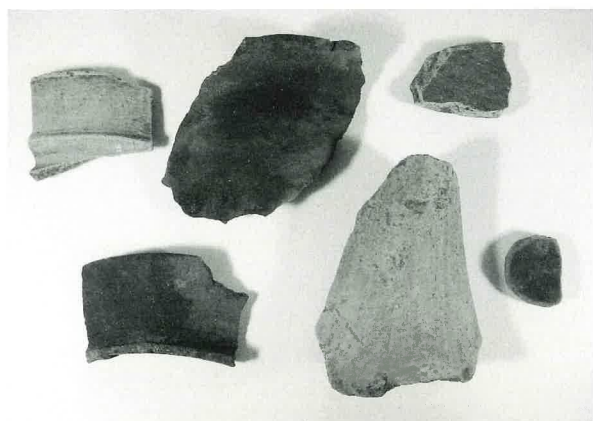
34号竖穴、第50图10



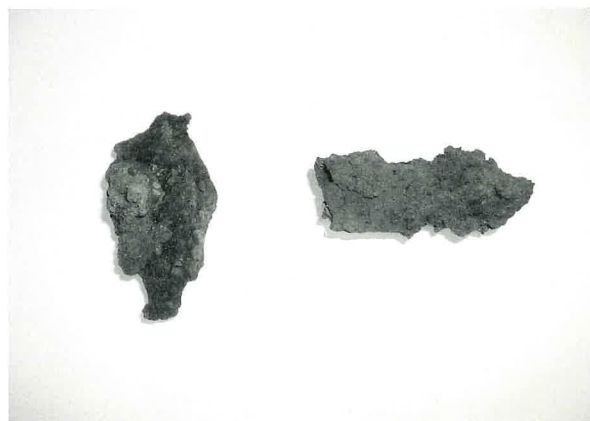
35号竖穴、第51图2



36号竖穴、第53图1~4



36号竖穴、第53图5~9、11



36号竖穴、第53图12、13



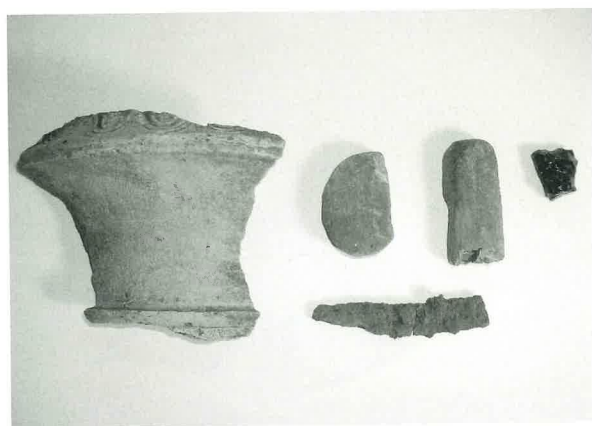
36号竖穴、第53图14、16



37号竖穴、第55图1



39号竖穴、第57图1、2



41号竖穴、第60图1~5



41号竖穴、第60图4



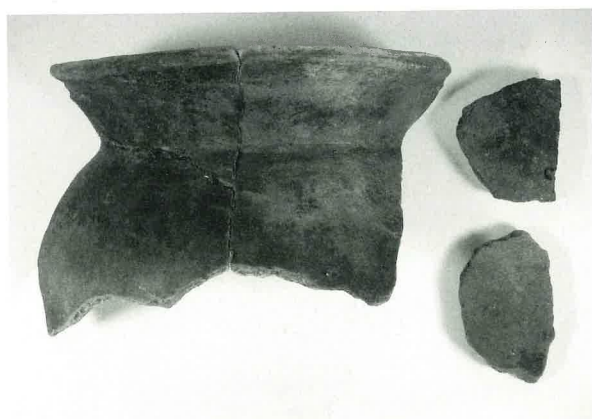
49号竖穴、第67图1、2



49号竖穴、第67图4



49号竖穴、第67图5

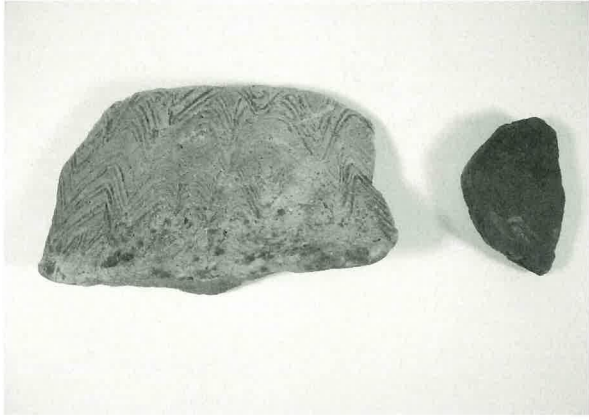


50号竖穴、第67图6、7、8

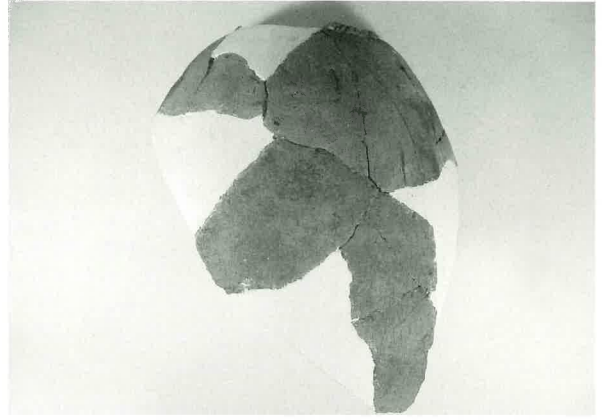


50号竖穴、第67图8





51号竖穴、第67图9、10



51号竖穴、第67图11



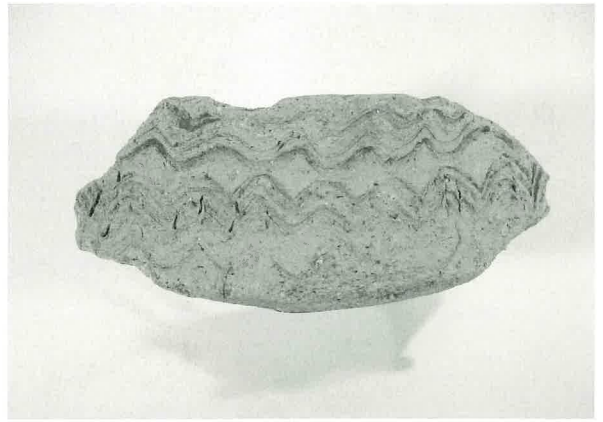
51号竖穴、第67图12(表)



52号竖穴、第67图13



52号竖穴、第67图13部分扩大



53号竖穴、第69图1

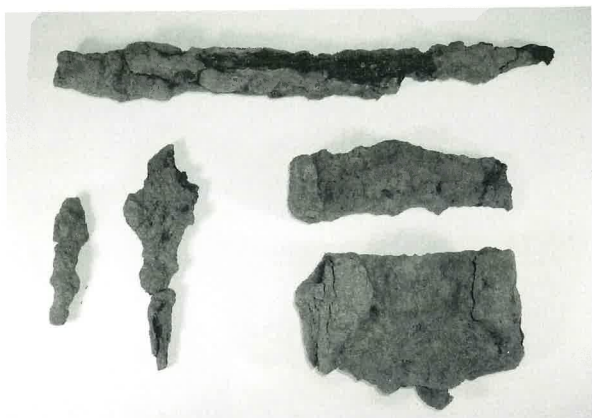


53号竖穴、第69图2

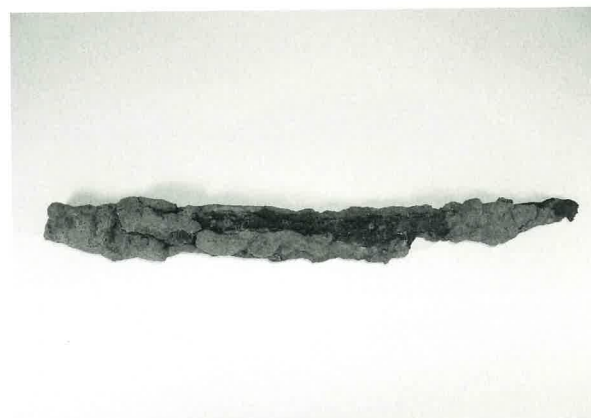


2号土坑、第71图1

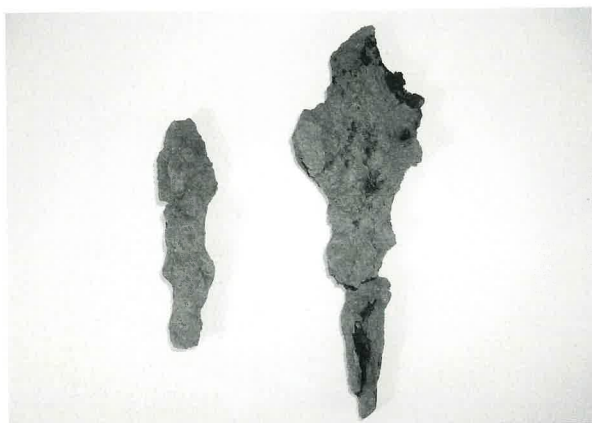
写真図版18



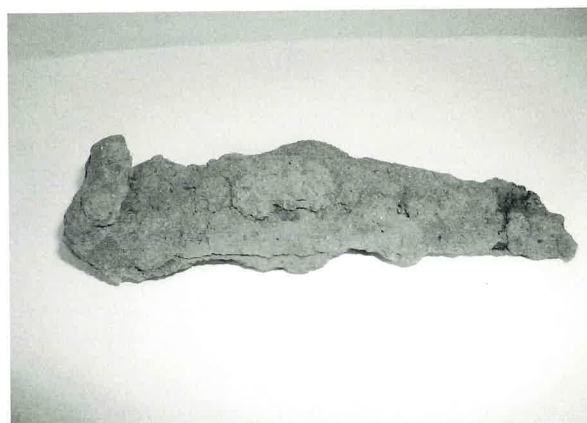
4号土坑、第74図1～5



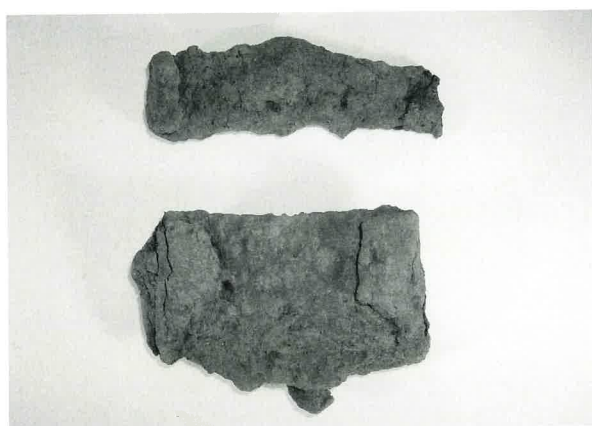
4号土坑、第74図1



4号土坑、第74図2、3



4号土坑、第74図4



4号土坑、第74図4、5



4号土坑、第74図5



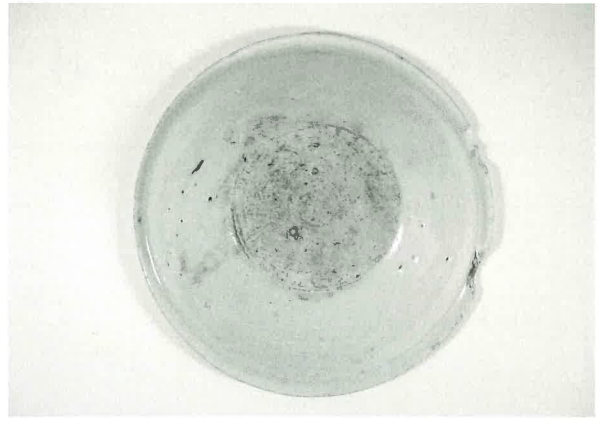
5号土坑、第76図1 (表)



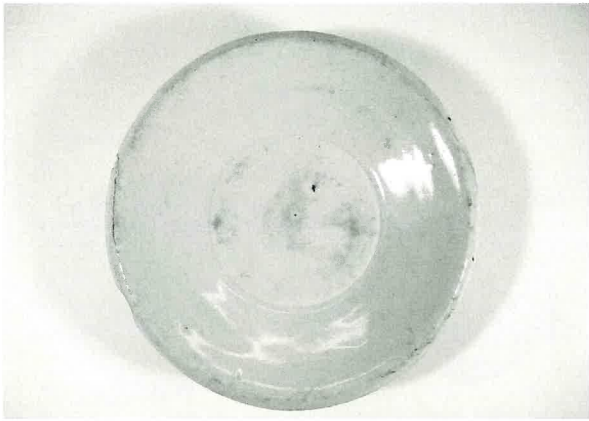
5号土坑、第76図1 (内面)



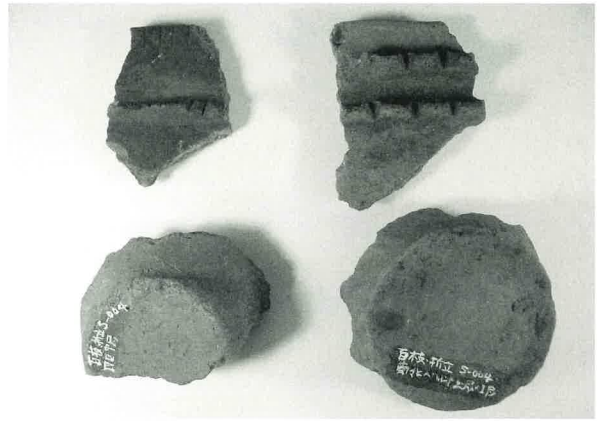
5号土坑、第76图2



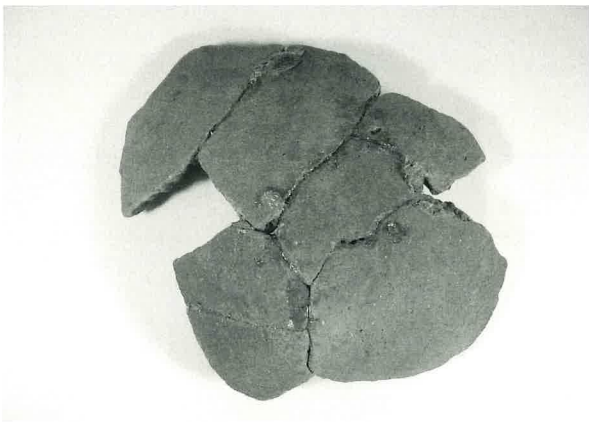
5号土坑、第76图2 (外面)



5号土坑、第76图2 (内面)



第77图1、2、3、4



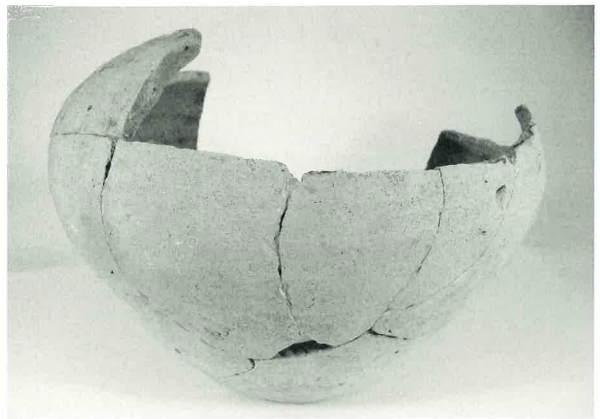
第77图5



第77图6



第77图7



第77图8



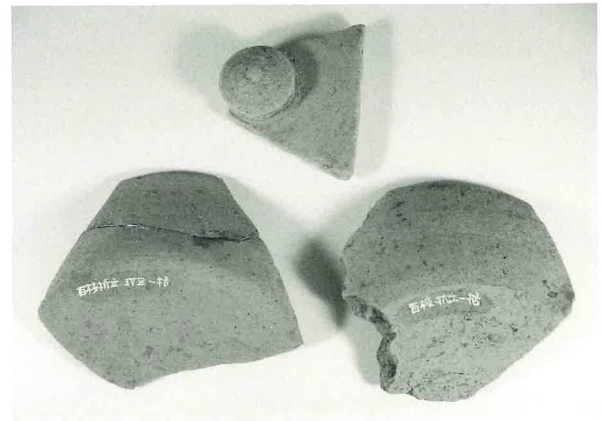
第78图 1



第78图 2



第78图 3



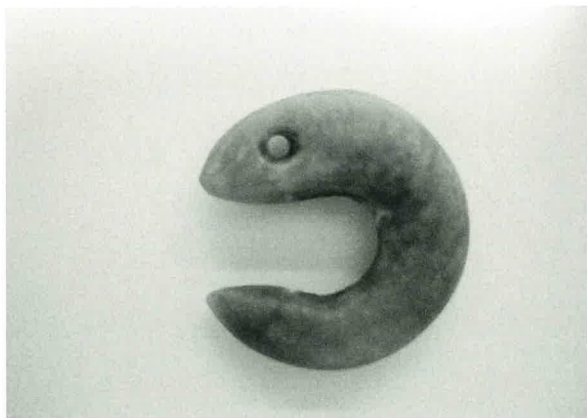
第78图10、11、12



第78图14、15



第78图20



第78图22 (表)



第78图22 (裏)

# 報告書抄録

ふりがな	おりたていせき
書名	折立遺跡
副書名	－県道百枝浅瀬野津線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－
巻次	
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第33集
編著者名	栗田勝弘
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所在地	〒870-0021 大分県大分市大字中判田1977番地 TEL 097-597-5675
発行年月日	2008年3月25日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
折立遺跡	豊後大野市三重町百枝	44212	541123	32° 59′ 55″	131° 34′ 29″	2005 0601～ 2005 1031	4000	県道百枝 浅瀬野津 線道路改 良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
折立遺跡	集落跡	弥生・古墳時代	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑	弥生土器	弥生中期の花弁形住居跡

要約	発掘調査で、弥生後期後葉～古墳前期前葉を主体とした竪穴53基、土坑5基、掘立柱建物遺構3基が検出されている。その内、1基が弥生中期の下城式土器主体とした花弁形住居跡。
----	---

おり たて い せき  
折 立 遺 跡

— 県道百枝浅瀬野津線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —  
大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第33集

平成20年3月25日

発 行 大分県教育庁埋蔵文化財センター  
〒870-1113 大分県大分市大字中判田1977番地  
TEL (097) 597-5675

印刷所 尾花印刷有限公司  
〒877-0026 大分県日田市田島本町8-8  
TEL (0973) 23-0123

